
ご近所恋愛のすすめ

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ご近所恋愛のすすめ

【Nコード】

N4105P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

スーパの冷めない距離での恋愛はいかがですか？

幼なじみや、会社の同僚など、いろんな「ご近所」な二人を描いた、読み切り短編集です。

基本的には一話読み切りですが、中には続編のあるものもあり、こちらには冒頭に注意書きがあります。

気になる題名があったら、そこからどうぞお読みください。

自サイトでも公開中。

銀座の恋物語

「遠いからダメ」

赤くなつた鼻にさらに皺を寄せて、緑山みどりやま籐子ていしさんはそう言った。

緑山籐子さんは、春から俺が働き出した銀座にある会社の先輩さんだ。

先輩っていつでも同じ年なので、ついつい雑談の時はタメ口をきいてしまう俺だった。

緑山籐子さんに関してはいろんな伝説があつて、入社してからすぐに会社で履くサンダル（よく女性社員さんが会社に来ると通勤靴と履き替えるアレ）にウサギさんがついていたとか、プライベートな写真を見せてもらつたらその時の彼女の服装がゴスロリだったとか。

そんなホントなんだか嘘なんだかよく分からない話が彼女の周りには一杯ある。

俺も最初は本人から直に受ける情報よりも、そっち系の変な情報の方が多くて緑山さんのことを「ヘんな子ちゃんかも」と思っていたんだけど。

配属先が本決まりになつて、彼女と同じプロジェクトになつて一緒に仕事をするうちに少しずつ彼女に気持ちが傾いていったのだ。

たとえば、文字が綺麗だとか。

たとえば、作る書類のレイアウトがとても見やすいとか。

たとえば、仕事を進めるうえでの話しの仕方がとても要点をついていてわかりやすいとか。

そんなんで、「いいなあ」なんて思った気持が、あつというまに

「いいなあ」どころの騒ぎじゃなくなってしまったのだ。

だから、こんなシチュエーションなんだけれど（新入社員歓迎会会場隅）俺は言わずにはいられなかったのだ。

緑山籐子さんに「俺と付き合って」と。

そしてその答えがあの一言。

「遠いからダメ」

「あのだ。遠いつて。どこから？」

緑山籐子さんの言う「遠い」がどんな意味なのかさえ俺にはわからなかった。

「家。私の家から。私は家が近い人じゃないとお付き合いはしないの」

俺はここから四十五分の住宅街に親と住んでいたので、そのことを緑山さんに伝えた。

「だめ。そんなの。全くもって遠いわ。問題外です」

問・題・外。

そう言われると（たとえ家の距離だけにしろ）傷つく。

「あのだ。その近くつて、どんな意味があるんだろう？」

緑山さんに聞く。

だって、そんな「家が近くないと付き合わない」なんて話をいまだかつて誰からもどこからも聞いたことがないから。

「うん。実はね」

そう言つと緑山さんはアルコールの原因だけじゃない赤みを顔に表しながら話し出した。

「私ね。ずっと、ずっと、『幼なじみ』とか『ご近所』つて言葉に憧れていて。その中で恋をするつてことにとても憧れていて。けれど、不幸にも私の家の側には同じ年くらいの子どもが誰もいなくて。それで、憧れは、憧れのままになっていて。でも私、どうしてもそれが諦められなくて。それでもう諦められないのなら、もうこのままそれを押し通すしかないなあ、って思っていたの」

はあ。

「ええと。で、緑山さんはその、「近所のヤツと付き合ったとして、どんなことをしたいの？」

と俺は聞いてみた。

「あのね。一緒に深夜のコンビニに行ったり、本屋さんに行ったり。あとはね、歩きたいの」

コンビニ。

本屋。

歩く？

「ただ歩くの？」

緑山さんに聞く。

「うん。ただ歩くの」

緑山さんが答える。

そう答えた緑山さんの言葉を聞いた瞬間、ゴスロリの格好をした緑山さんと、ジーンズにＴシャツ姿で歩く俺の姿が頭に浮かんだ。

「歩くんだ」

そう言つと緑山さんはうつとりした顔をしながら再び語りだした。

「そう。歩くの。月の夜は月明かりの中を。桜の季節は花のトンネルの中を。秋になったら、落ち葉を踏んで。冬の街ではマフラーを巻いて」

俺の頭の中にジュディマリの「散歩道」が流れる。

いやあ。

しかし。

「それって、一緒に住むってことでもいいの？」

緑山さんに聞く。

「ダメ。別々の家に帰るところが、この『ご近所恋愛』の醍醐味なの。お散歩が終わったあとで、名残おしいけれど別々の家に帰って、それでベットの途中で『ああ、今日は楽しかった』って思うのがいいよね」

俺ならベットの中でも一緒に、更にそこからも楽しいひと時があるほうがいいけれどなあ。

まあ、話を聞けば聞くほどに単に俺を振る口実ってことじゃなくて、本当に彼女の中で『ご近所恋愛』のヴィジョンがあるのだろうと思えた。

ということとは。

「あのさ、俺が緑山さんの近所に越してきたら付き合ってくれるの？」

緑山さんに聞く。

「うん」

おいおい。

そんな簡単に。

そんな簡単にYESと言われるとかえって不安になってしまう。まるで、側に住む男なら誰でもいいって言われているような気持ちにもなる。

しかし、もしそうなのであれば、俺以外で彼女を狙うヤツが彼女の家の側に住んだりなんかしたら、そいつと付き合っただよな。

そうであれば尚更。

今すぐにでも荷物をまとめて彼女の住む街に越さないといけない。

「俺」個人を選んでくれないとか、そんなことを言っている場合じゃない。

そんなプライドなんて、恋には不要なのだ。

手に入れたいものがあるのなら、なりふりかまわず行動しなくちゃいけない。

何を捨てても、そのチャンスを逃してはいけない。

ともかく彼女の側に（文字通り）行くこと。

「俺」個人を好きになってもらうのは、それからでも十分。

「OK。OK。了解しました。俺、引越すから、緑山さんちの側に」

「ごそごそと携帯を取り出す。

「で、緑山さんの住所ってどこだったけ？」

入力すべく画面を出す。

「……ぞ」

周りの声がつるさくて、緑山さんの声の最初の方が聞き取れなかった。

「ごめん。もう一度いいかな？」

携帯の画面を見て言う。

「中央区銀座」

へっ、と思い緑山さんの顔を見ると。

彼女は今まで見たこともくらいの可愛さで、にっこりと俺に向かって微笑んでいた。

ダイヤモンド・ゲーム

ベットのの中にいる時から雨の音がした。

起きようかな、どうしようかな、と頭の中で考えながら、ところで今日は何曜日かな、なんてことも思つて。

ああ、今日は日曜日だ、と思つたらがっかりした。

学校でもあれば、友だちと遊べるけれど。

雨の日曜日はすることがない。

おばあちゃんの家も、自転車でなら楽だけれど歩くと少し遠い。

「理花、灰谷さんところに野菜を届けに行つてくれる？」

お母さんが床に伸びて本を読んでいる私にそう言ってきた。

「はい」

のそのそと床から体を起こしながら私はそう返事をした。

お母さんはダンボールに入った野菜を新聞紙でくるみながらスパーの袋に移していた。

お父さんの田舎から送られてきた野菜だ。

「はい、これでよし」

そう言つとお母さんは私に袋を手渡してきた。

「持てる？」

少し袋は重かったけれど、持てない重さではなかった。

「大丈夫だよ」

そう言つて、玄関へと歩き出す。

部屋に比べて玄関の方が少しひんやりとした。

揃えてあつた雨靴を履いて傘を持つ。

「行つて来ます」

「はい、はい。よろしくね」

ひらひらと手を振つてお母さんは私を送り出した。

カーテンの降りた真つ暗な管理人室の横を通つて外へと出た。
広げた傘の上で雨は、ポン ポポンという音を立てて弾みだした。

その音が楽しくて、それに合わせるようにして、私も歩き出した。

灰谷さんの家は、うちから二もしないところにある一軒家だ。

灰谷さんのうちには、私と同じ年の保とたもつ一つ下の享とあるがいる。

この二人とは幼稚園の頃から一緒だった。

家同士も、まあ、仲がいいんだと思う。

こんなふうに、野菜を届けるくらいだから。

灰谷さんの家の前まで来る。

灰谷さんのおばさんは、お花が好きなんだと思う。

いつも、玄関の周りはお花の鉢で一杯だから。

うちのお母さんみたいに、気まぐれでお花を植えるような感じじゃなくて、いつもお花で一杯にしているから。

童話の中に出てくる、夢のお家みたいだとも思っていた。

呼び鈴を鳴らずと玄関のすぐ側にある居間のレースのカーテンがさつと開いて保がこつちを見てきた。

保は私を見ると、『開いてる』と口の動きでだけにそう伝えてきた。

玄関の前の鉄の門を開けると、瞬間移動をしたみたいな保が玄関のドアを開けてくれた。

「こんにちは」と私が挨拶をすると保は私をちろつと見た後「母さん、理花だよ」と家の中に向かって大声を出した。

すると、ばたばたと音がして、スリッパをはいた灰谷さんのおばさんが家の中から出てきた。

「あらあら、理花ちゃん。雨の中、いらっしやい」

「こんにちは。あのこれ、田舎の祖父母から送ってきた野菜です」
いつもの台詞を、緊張しながら灰谷さんのおばさんに言う。

「げっ。野菜だつてよ」

保がわざとらしい顔でしかめっ面をして私を見てきた。

「こら、保」

灰谷さんのおばさんが保を睨む。

保が舌を出す。

「理花ちゃん、よかつたら上がっていかない？　おいしいお菓子が
あるのよ」

そう言いながら灰谷さんのおばさんは保に「ほら、保も理花ちゃんを誘って」と言っている。

するとそこに階段から少しだけ顔を出した享が声をかけてきた。

「ああ。理花だ」

そう言つと享はばたばたとまた2階に行つて、そしてまた階段の
同じ場所に戻つてきた。

享は、大きな箱を抱えていた。

箱には、いろんなゲームの写真がついている。

「理花、ゲームやらない？」

享が言う。

「ゲーム？」

享が持つている箱をじつと見る。

「ああ、そうそう。やろうぜ。理花」

保もそう言つとどたばたと階段を上り始めた。

灰谷さんのおばさんは「全く」と言つと「これだから男の子は」
と言いながら「あとでおやつを取りに来るのよ」と言つとため息を
ついた。

お菓子もとても魅力的だけれど、暇な私にとっては、二人と同じ
ようにお菓子よりもそっちの方がずっと魅力的だった。

「理花、ほら上がって来いよ。このゲーム二人だと盛り上がらない
んだよな」

保が手で来い来いと合図をしながらそう言つた。

ダイヤモンド・ゲーム。

二人が私を誘ったのは、そんな名前のゲームだった。

「俺、黄色」

保がぱつと手を出してコマの入った袋をとり、ゲーム盤の上に並べだした。

ゲーム盤の上には大きな星のマークが書いてあって、どうやら自分の色の星の陣地から対角線にある自分の陣地までコマを一番に全てを移した人が「勝」らしい。

「理花は何色にする？」

保が聞いてくる。

残っているのは青と赤のコマだ。

「享は何色がいいの？」

享に聞く。

「なんでも」

享は大人ぶったように肩をすくめるとそう言った。

「ふーん。じゃあ、赤」

まだ封の開いていなかった赤いコマをビニール袋から出した。

享はビニールから青いコマを出すと並べだした。

「保が黄色が好きだなんて知らなかった」

自分のコマを並べながら言う。

「勝つから」

保が言う。

「青だと負けたけど、黄色を使うとコイツに勝つから」

保の言う『コイツ』って言うのは享のことだ。

「ふーん。じゃあ、黄色は、強いんだ」

「そうそう」

保がにこにこしながらそう答える。

「そうそう」

享も保の真似をしてそう言った。

「おまえ、むかつく」

保が享を睨む。

そう言つとまた享はひゅつと肩をすくめた。

そういう享の仕草を見ると、私は泣きたい気持になってしまふ。

「二人が喧嘩するなら帰る」

私がそう言つと「ひゃあゝ。理花さま、帰らないでゝ」と保が私に向かつてペコペコと頭を下げてくる。

「もう、しょうがないなあ。じゃあ、私が一番ね」

げつ、と言う男の子たちの声をバックに私は一番最初のコマを動かした。

目の前のコマを飛び越して、次に進む。

コマが一個置きにあると、どんどんとコマを進めることが出来る。

場合によつては一気に自分のいた陣地から、行くべき陣地へと進んでしまえることもある。

やっていくうちにコツが分かつて面白くなってくる。

次にどう動かすかを予想しながらコマを動かすのが楽しい。

そしてやっているうちに、二人の癖も見えてきた。

保はほぼまっすぐの方向にコマを進めていく。

無駄な動きが無く、ラッセル車のように全てのコマはじりじりと平行して進んでいく。

一方享は、コマを動かしているときは一体どこに行こうとしているんだらう？と思う進路をとりながらも、がんがんと自分の陣地にコマを入れていった。

その二人に挟まれた私は、その間をするりするりと抜けながらコマを進めていった。

凄く面白かった。

二人が嵌るわけが分かった。

そしてやった三回とも、黄色パワーで保が勝った。

「ふふふ。やっぱりな」と保は満足そうな顔で私たちを見た。

「一步一步着実に行くのが勝利の秘訣ですな」と保は言った。

そして「負けた奴等が片付けだからな」と言っただけで部屋から飛び出して行った。

「ちえ」と私は言いながら自分の分のコマを袋にしまい、そして保のコマにも手を伸ばした。

そこに享の手も伸びてきた。

負けた二人して、黙々と勝った保のコマをビニールの袋にしまった。

「ねえ」

享に声を掛ける。

「あのさあ。本当に勝てないの？」

享が眉間に皺を寄せて私を見てきた。

「だから、本当に黄色のコマじゃないと勝てないの？」

覗き込んできた享の顔をこっちも覗き込んで聞いた。

すると享の眉間の皺は、ぱっとなくなったかと思うと、享がげらげらと笑い出した。

「そんなわけではないじゃん」

享は笑いながらも片付けをしている。

「だってさ、保ってば三回も勝ったよ？」

ぶーぶーと言いながら私はゲーム盤の入っていた箱を取った。

享がその蓋を取り、ゲーム盤をしまった。

「それは、保が強いからだろ？」

享がそう言う。

そして、ゲーム盤の上にコマを入った袋を置いた。

「そうなの？」

私が聞く。

「そうだろ？」

享が答える。

「ふーん」

でも、どっちにしても面白くない。

「私も勝ちたい」

「そりゃ、俺も」

そう言いながら、二人で顔を見合わせてにやりと笑ってしまった。

なんだかんだいって、保は強くて。

そして頭もいい。

保と一緒にいると、私は自分にはそんな保のがむしゃらになるところ——たとえば、ゲーム一つにしても自分が勝つためにはコマの色にもこだわる——が足りないんだと強く思うことがあった。

そして、私から見ると享も、私と似たような感じに見えた。

「はいはい、負けたみなさんへ差し入れだよーん」

保がトレイに氷が一杯入ったカルピスとお菓子を載せてやってきた。

カラカラと氷の音がとても涼しく聞こえる。

そうそう、と思う。

これは、一番大切なことなんだけれど。

保はなんだかんだいっても優しいのだ。

トレイの上にさつと手が伸びる。

「俺は、この一番量の多いやつだからねっ」
そう言って保はむんとグラスを掴んだ。

そんな保を見て。

私と享は顔を見合わせて笑った。

そしてそんな私たちを見て、保もにやりと笑った。

私たち三人って、まるでダイヤモンド・ゲームみたいだ。

カルピスを飲みながら私はそう思った。

そして、それはなかなかいい気分だった。

膝小僧プリンス

思えば彼女は年中、膝小僧に絆創膏ばんそうこうを貼っていたのだ。

近所の友だちの近況を、直接本人たちから聞かなくなつて随分経つ。

小学生の頃は、光石みついしがバイオリンを習いだしたとか、小枝子が塾を変えただとか、天野が隣のクラスの女子からラブレターを貰ったとか（でもそれはいたずらだったとか）その他いろんなことは、通学途中や夏の夕方の花火だとかそんなときにお互いのおしゃべりの中で知ることが出来た。

中学になつて、高校になつて、就職したり大学に進学したり。その成長の中で、近所の友だちとは次第に疎遠になつてきて、そしてその近況さえもお互いの母親を通して聞くということが当たり前になつてきていた。

「八重子ちゃん、今度あんたの会社のどこだかに行くらしいわよ」
深夜の夕食タイムに母親がそんなことを言ってきた。

「八重……誰？」

焼きナスの味噌汁を左手に持ったまま母親に聞く。

「八重子ちゃんよ。ほら、小枝子ちゃんの妹の」

小枝子の妹の。

「ああ、あの小さい子」

たしか小枝子の妹は、僕たちよりも三つは下だったと思った。

「なに、あの子、もう働いているの？」

とつさに思い浮かべた彼女の姿は、申し訳ないけれど小学一年頃のものだった。

「あんた、もう、何を言っているのよ」

僕の湯飲みに熱いお茶を注ぎながら母親が言う。

「あんたが二十八なんだから、それより三つ下の八重子ちゃんは二十五でしょうが」

全く仕事ばかりだからそんななっちゃって、しっかりしてよ、と母親が言う。

「そうかあ。二十五かあ。で、僕は二十八かあ」

母親がいれたお茶を飲みながらそうつぶやく。

「そろそろ、一人暮らししようかな」と言うとき母親はふんと鼻をならし、「一人は止めて頂戴。二人暮らしにして頂戴」と言うと、先に寝るわよと言って台所から出て行った。

書類の確認に没頭していたら内線がなった。

受話器をとると受付からだった。

人材派遣会社の営業さんがいらしたとのことだった。

腕時計を見ると、約束の時間は少し過ぎていた。

応接室に入ると、ソファに座っていた紺色のスーツを着た女性がすっと立ち上がった。

そう背は高くない。

「はじめまして」

そう挨拶をするときも「よろしくお願いします」ペコリと頭を下げてきた。

その女性にソファに座るように勧め、自分も座った。

ソファと椅子の高さの関係で、丁度目線にその女性の膝小僧が目に入った。

うすいベージュのストッキングの下に絆創膏ばんそうこうが見えた。

膝小僧に絆創膏。

それはどこか懐かしさを感じさせるものだった。

女性の膝から視線を外し、名刺入れから名刺を一枚取り出す。すると相手の女性も名刺を取り出し、そしてテーブルの上に会社

のパンフレットを置いてきた。

「人事の弓高ゆみだかです」

「パーソナルの田中です」

お互いの名刺を交換する。

「では、早速ですが」

そして僕たちは派遣業務の条件や内容についての話を始めた。

「どうでした、パーソナルさんは」

席に戻った僕に内田さんが話し掛けてくる。

「まあ、今日は一回目だし。明日、うちの条件にあう人材がこちらの会社にどのくらいいるか調べてきてもらうことになっているけれど」

「そうじゃなくて、営業の彼女のことですよ」

内田さんが言う。

「営業のつて。田中さんのことかな？」

内田さんがくくくと笑う。

「聞かなかったんですか？ 受付の森田さんから」

「何を？」

「ああ、きつと弓高さんは真面目だからそんな話はしなかったんだな、森田さんも」

そう言う内田さんはうんうんと頷いた。

「パーソナルさん、うちの会社に入るなり派手に転んだらしいですよ」

「転んだ」

「ええ。もう、膝から血が流れて大騒ぎだったそうで」

「へえ」

絆創膏の貼られた膝小僧を思い出す。

「おまけに、可愛い子だって話だったし」

「ああ」

「お、珍しい。弓高さんがそんなことを言うなんて」

内田さんがおどけて言う。

「え、ああ、それは。まあ」

別に顔を赤くする必要もないのに、勝手に顔が赤くなる。

「パーソナルの田中さんねえ」

内田さんが言う。

「内田さん、なんなら仕事変わりましたよ？」

そう僕が言うのと内田さんは冗談とばかりに手を大げさに振る。

「しかし、なんか新鮮だね。膝小僧に絆創膏なんて」

そう言ったあと、内田さんが最近の子どもは絆創膏を貼るようなこともないんだろうなあと言った。

「どうなんでしょうねえ」

最近の子どもに詳しくない僕はそう答えた。

内田さんの言葉と、パーソナルさんの膝小僧を見たことで、僕は子どもの頃のことを思い出した。

——「もう、全くうちの妹ってば」

そういえば、小枝子の妹もよく転んで、そのたびに小枝子に絆創膏を貼ってもらっていた。

小枝子のポケットにはいつも絆創膏が入っていた。

そして泣いていた妹も小枝子が絆創膏を貼ると、不思議と泣き止んだものだった。

そういえば、とまた思い出す。

小枝子が風邪で遊べないときに、妹だけが僕たちが遊ぶ場所にやって来て。

そして案の定転んで、泣いてしまい。

そんな妹をおんぶして、僕は小枝子の家まで届けた記憶がある。背中が涙と鼻水でぐっしょりと濡れて。

弟も妹もない僕は、まるで即席でお兄ちゃんになった気分にな

ったものだ。

あれからもう、考えられないほど時間は過ぎて。

あの妹も、一人前の社会人として働いているらしいし。

——「八重子ちゃん、今度あんたの会社のどこだかに行くらしいわよ」

はて。

八重子ちゃん。

おおおっと思いパーソナルさんの名刺を取り出す。

—— 田中 八重子 ——

「田中 小枝子。田中、八重子？」

彼女が八重子ちゃんか？

翌日、パーソナルの田中さんは資料を十分に揃えて僕の前に出して、説明を شدした。

説明を受けながらも僕はつい膝に目が行ってしまった。

絆創膏は、昨日よりは小さいものになっていた。

「—— 以上ですが、何かご質問はございますか？」

真剣な顔をした八重子ちゃん、じゃなくて田中さんがこつちをじっと見てくる。

「いえ。ありません」

その田中さんの表情を見ると彼女の方こそ僕が近所の「弓高」だとは分かっていないようにも思えた。

いや、でも母親がああ言っていたってことは、それはないんだろ
うけれど。

まだパーソナルさんとは契約をしたわけではないし、あまり担当
と営業が知り合いつていうのも良くないとも思え。

つまり僕はそのままお互い個人的なことは話さない方向で行こう
と思った。

応接室のドアを開け、田中さんを見送る。

田中さんが「よろしくお願いします」とペコリと頭を下げ僕は
「検討させていただきます」と答えた。

と、田中さんが僕の隣を通り過ぎようとした瞬間「あっ」という
声を発した。

え？と思うと田中さんは両手にかばんやら書類を持ったまま今ま
さに倒れるような姿勢だった。

「わぁ」と僕はとっさに手を出して田中さんを助けようとしたら
何故か僕の視界に急に床が迫ってきて。

瞬間のこの出来事で、僕は会社のフロアにうつぶせに倒れて、そ
の上に田中さんが乗つかるといいう、いいんだか悪いんだか妙な具合
になってしまった。

「きゃー！ 弓高さん！」

受付の森田さんがびっくりした声で僕を呼ぶのが聞こえる。

わーわーと騒ぐ森田さんの声をバックに小さな声で「ごめんなさ
い、健かつや也くん」と言う田中さん、いや、八重子ちゃんの声が聞こえ
た。

「僕は大丈夫だけど、多分。八重子ちゃんは大丈夫？」

冷たい床を頬で感じながら僕も聞く。

ゆっくりと、そつと八重子ちゃんが僕の上から退くを感じた。

「立てる？」

八重子ちゃんが僕の頭の方に跪いてきた気配がした。ふっと顔をあげるとまた彼女の膝小僧が見えた。

膝小僧に絆創膏。

思えば彼女は年中、膝小僧に絆創膏を貼っていたのだ。

彼女の手を借りて立ち上がる。

心配そうな、泣きそうな顔。

でも、その姿はもう一人の女の人で。

とてもじゃないけど、今回は。

僕は、お兄ちゃんになった気分にはなれなかった。

視界の隅に内田さんの姿が目に入る。

きつとあとでまた冷やかされるんだろうと思うと憂鬱になるけど。

森田さんの口からこのことがどんな大げさな出来事として社内
知れ渡るのかと思うと、これまた頭が痛くなるけれど。

まあ、それでもいいかな、なんて。

八重子ちゃんの顔を見ていたら、いつになく、そんな風にも思えてしまった。

嘘つき

本当にそれは突然だった。

「頼子、正宗君が来ているわよ。降りていらっしやい」

階段の下から二階の部屋にいる私に向かって、母が大声でそう言ってくるのが聞こえた。

「はいはい」

私はパソコンの画面に視線を固定させたままで、母に聞こえるはずも無い小さな声でそう言った。

「頼子！ 返事は？ 聞こえているの？」

再び母の声が大きく響く。

「はい！ 聞こえていますよ！」

打ち込んだ内容の保存をすると、私はパソコンの電源を落とす作業を始めた。

「もう、なんなのよ」

ぶつくさ言いながら下着同然だった服を部屋着レベルに引き上げるべく着替えをした。

正宗っていうのは、お隣に住む同級生なんだけれど、大学を卒業したあと入社した会社がやたらと海外出張があるようで、ここ何年は年に数回顔をあわせるかどうかという状態だった。

しかもその「数回顔をあわせる場所」は何故かいつもうちの家なのだ。

律儀なんだか、友だちがいないんだか知らないけれど、正宗は海外のお土産なんかを持参でうちに顔を出す。

そして毎回一時間ばかり話したあとに、「じゃあ」と帰っていきそしてまた数ヶ月会わないってパターンだった。

「さてと。今度はどこのお土産だろう？」

お土産を楽しみにするくらいしか、正宗と会うメリットって私にはなかった。

「こんばんは」

「ご飯をよそう母と話している正宗に挨拶をする。」

「こんばんは」

正宗も私を見て挨拶をしてきた。

そうなのだ。

お互いのこの挨拶にも滲み出ているように、私と正宗は特別親しいって訳でもないのだ。

それは小学校の時もそうだったし（クラスが一度も同じにならなかったっていうのも大きな要因かもしれないけれど）、それ以降もあまりしゃべった記憶はない。

つまり、同級生でお隣さんなんて間柄だけれど、実際の私たちはご近所の一員としての言葉しか持ち合わせていなかった二人なのだ。

個人的なことを正宗に訊かれたこともないし、訊いたこともない。

数ヶ月に一度のこうした機会にも正宗と話すのは母か四つ下の弟（そういえば、弟は今日はまだ帰っていない）で、話題も専らご近所の人の話や天気のことだった。

「ほらほら、頼子。正宗君にお味噌汁をよそってあげて。おかあさん、お風呂に入っているおとうさんに石鹸を出してあげないといけないから」

そう言つと母は正宗の前にご飯茶碗を置き、私を残していなくなってしまうた。

おやまあ。

正宗は、うちで夕飯を食べるらしい。

よく見たら正宗はスーツ姿で（といっても、正確に言うとスーツのジャケットを脱いでネクタイも外した状態なんだけれど）部屋の隅にはスニーカーやら紙袋なんかが置かれている。

帰国ほっかほか状態と見た。

そんなことを横目で見ながら、私は母に言われた通りにお味噌汁をよそい正宗の前に置いた。

よくよく見ると正宗の前には、私たちがさっき食べた夕食と同じ物が並んでいた。

「おなか、すいているの？」

正宗に聞く。

正宗が私の顔を見て「うん」と言った。

そりゃ、可愛そうに、と思う。

私自身、おなかですいている状態っていうのがとても嫌なことだから。

海外から帰ってきて、おなかですいているなんて、涙が出るほど可愛そうだ。

「あのだ、正宗」

そう言いながら冷蔵庫を開けてタッパーに入ったカレーを出した。

「よかつたら昨日のなんだけれど、カレーも食べる？ 私が作ったから味は今ひとつかもしれないけれど」

そう言つと正宗は「ありがとう」と言いそして「いただきます」と言つた。

「せっかく正宗君が帰ってきたのに、志村さんところお留守だものね」

石鯨を父に渡してきた母がお茶を入れながら言つ。

「僕が帰って来るのが予定よりも早かつたので」

連絡をし忘れちゃったんですよ、と正宗が言つ。

「今日、帰ってきたんだ」

そんなの聞かなくてもさつきから分かっていたことだけれど、話の流れとして私はそう言った。

ただ無言で正宗がご飯を食べているのを見ているのもなんだか……だし。

というか、毎回正宗が来るたびに、同級生つてくりなのかなんだか知らないけれど、母は私を呼ぶから。

会話のメンバーに加えようとするから。

だから、こんな風に母が正宗に対して言うことに、少しとぼけた相槌を打つことで私は私なりに参加していたのだ。

ボケ役としての参加。

まあ、母にしても一人で正宗の相手をするのはなんだかなあ、と思うのだろうし。

私も特にそのことに関して文句を言うほどの強い意思もなかったし。

すると、まるでタイミングを図ったかのように家の電話がなりだした。

母がいそいそと電話に向かう。

「あらあら、こんばんは。まあ、お元気？」

そう言いながら母は子機を持ったまま、またまた私たちを残し別の部屋に行ってしまった。

全く母ってば。

そもそも、誘ったのは自分なんだから、かかってきた電話はまた後でかけるなりなんなりして、今は正宗の相手をするべきなんだ。

が、しかし。

実際、母はいないわけで。

いくら母が誘ったとはいえ、正宗は我が家のお客さんだ。

ここで私までいなくなるのは流石に正宗に悪い。
それは酷い。

困るなあ、とは思っけれど正宗が嫌いだとかそんなんじゃないわけだし。

だから私は、ご近所付き合いのルールにのっとり、その心の葛藤を表に出さずに平気な顔をしたままで正宗と同じテーブルに付いていた。

正宗はお箸使いが綺麗だ。

うちもそして正宗の家も、お箸の持ち方とかお茶碗の持ち方とかそういったことにつるさくて、それがまたすっかりと私自身にも染み付いているので正宗のそれは見ていても気持が良かった。

だから、まあ、正宗のご飯のお相手をするのはそういった点では楽しいともいえた。

「塾の講師をしているんだっけ」

正宗が珍しく私のことを訊いてきた。

「うん」

私は学習塾で小学生相手に講師をしている。

「楽しい？」

「うん。時間もさ、ほら学校が終わってからの時間だし。朝が弱い私にはあっているかな。それに、家でもちよつと作業が出来るし」

そうそう、こうして正宗のご飯のお相手をするまで私は塾生向けのプリントを作っていたのだ。

「確か場所は、駅前だっけ？」

「うん。そうそう」

「駅の側なら……いいね」

「まあ、私はここから歩いていくから。あまり駅は関係ないけれど。
通う子どもたちには便利よね」
「そうだね」

会話終了。

「お茶を飲む？」
「ありがとう」

席を立ってガス台に向かう。
やかんに二人分だけの量の水を入れた。

「ほうじ茶でもいい？」
さつき母が正宗にいれたのは煎茶だった。
「うん」

正宗が返事をした。

沸いたお湯を急須に注ぐ。

「ああ、ほんと。いい香り」
二つのお湯飲みにはうじ茶を注いだ。
「昔から好きだったよね」
背中で正宗の声を聞いた。

「うん」
確かに私はほうじ茶が昔から好きだけれど。
正宗がそんなことを知っているというか、そんな情報が彼の頭の中にあるとは意外だった。

おばさんにでも聞いたのかもしれないなあ。
そんなことを思いながら、お湯のみを正宗の前に置いた。
「ありがとう」

今日、何度目かの正宗のありがとうを聞く。

そしてまた正宗はおとなしくお行儀よく食事を始めた。

私はほうじ茶を飲みながら、正宗を観察していた。

今の正宗っていうよりも、昔の正宗を今の正宗から探そうと見ていた。

ともかく正宗はでかくなった。

性格も動きもおとなしいので、そんなに大きさは気にならないといえは気にならないんだけれど、こうしてお互い同じテーブルにいているとその存在感をひしひしと感じる。

けれど威圧的でもない。

大きくなっても、正宗は人畜無害な同級生くんなんだわあと思った。

「ごちそうさま」

正宗が言った。

「あ、はいはい」

じつと正宗を見ていたのがばれたかもしれないと思ってどきどきしてしまった。

でも、それに気が付いたところで、正宗はなんとも思わないだろうなあとも思った。

正宗が食器を運び出す。

ほんとうに、ご両親は正宗のことをよくしつけてあると思った。
ご立派。

そういえば。

「あのさ。正宗って家の鍵は持っているの？」

「ご両親は旅行中なわけだし。

「それが、持っていないんだ」
「やっぱり。」

この正宗くん、頭はよろしいのになぜか鍵をお持ちでないことが多い。

「どうするの？ 今晚」

「どうか、ホテルにでも泊まるよ」

正宗が笑う。

ホテルねえ。

それは母が許さないだろう。

きつと今晚は、正宗はうちの客間に泊まるのだろう。

「—— あつ。もしかして、ほら。開けられるかも私。正宗の家を」

ほらほら、と言って正宗の顔を見る。

正宗もそれに気が付いたのか、ああ、って顔をした。

「見に行くだけ見に行こうよ」

そう言つと私はまるで小学生に戻つたような気持ちになつて正宗の腕を掴んで二階にあがった。

うちと正宗の家は接近して建てられていた。

その結果、うちのベランダと正宗の家の二階の窓はくつつくように並んでいた。

そして、正宗の家は換気のためだとかなんとかいう理由でその窓をたいていの場合少しだけ開けていたのであった。

だから、正宗が鍵っ子（おばさんは働いていたわけではないので滅多にはなかったけれど）で鍵を忘れたときには、毎回私は大人たちには内緒でこの窓から正宗の家に入つて玄関のカギを開けてあげ

ていたのだ。

お行儀なんかに厳しい正宗の家は、こうした持ち物に関しても厳しかったから。

正宗が鍵を持っていかなかったことで怒られるのも可哀相だと思つたし、そんなお転婆な行為を私がとつても好きだったからつていうのもあつた。

正宗を盾にして私はちょっとした冒険を楽しんでいたのだつた。

二人して夜のベランダに出る。

夜風が頬にあたつて気持がいい。

「正宗！ 開いている、開いているよ！」

窓はやっぱりほんの少しだけ開いていた。
やつたーと思つて正宗の顔を見る。

「ここから入れば正宗、家に入れるよ」

そう言つて私はその窓を全開にした。
すると、真つ暗な正宗の家の廊下が見えた。

「うーん。ここからかあ。入れるかなあ」

正宗が窓枠に手をかけた。

実はこの窓は普通の窓よりもかなり小さいサイズでありまして、それに対して、正宗は普通のサイズよりも少し大きく成長してしまつていた。

「いや、しかし、椅子を借りて、足から入れば――」

「ね。もしかして、私がやつてもいい？」

正宗の言葉を遮つて言う。

「ほら、私、昔もよくやつたじゃない？ 私にならできるよ、簡単に」

あまり共通の思い出が無い私たちの唯一と言つてもいい程の思い出をちらつかせながら正宗に迫る。

正宗の家の窓を見た途端、あのころやつたことをもう一度やつてみたくなつたのだ。

「それは、助かるけれど」

「では、決まりね。正宗はさ、自分の家の玄関に行つててね」

そう言つて私は少し出っ張っている窓枠の上を手で掴んで、足を窓枠の下に乗せてぐいっつと体を持ち上げてそのまま体を正宗の家にすべりこませた。

「いたたた」

背中と顔を擦りながらも、なんとか正宗の家の中へと入った。

「大丈夫？」

まだそこにいた正宗が声をかけてきた。

「大丈夫、大丈夫。ほら、玄関に行つてよ」

小さな窓の向こうに見える正宗に私はそう言つと正宗の家の玄関を屈指した。

お隣さんとはいえ、真つ暗な中を歩くのは、ちょっと怖い。

だから私は目に付くスイッチを片っ端からぱちぱちとつけながら歩いた。

歩きながら、正宗の家に入るのも小学生以来だなあと思った。

知っているようで知らない部屋が次々と明るくなっていく。

ずっと隣に存在していた家なのに。

知っているようで知らないのがおかしかった。

階段を下りる。

トントントンという私の足音だけが響く。

正宗の家で響く自分の足音にも、これまた不思議な感じがした。

と、同時に懐かしさもあつた。
知っている音だったからかな？

段々と目の前に見えてきた正宗の家の玄関。
この扉を開けると、正宗が立っているはず。
扉を開ける私を待っている正宗が。
これも知っている風景。
過去に何度も経験したこと。

玄関の明かりをつける。

「頼子？」

玄関の外から正宗の声がした。

「うん。今、開けるよ」

そう言つて私は扉を開けた。

「わあ、凄いな。本当に開けちゃつて」
そこには正宗がいた。
けれど、知っている風景の中にいた正宗じゃない正宗が。

—— 大人になつた正宗。

仕事が忙しくて、年中海外にいる。
背も、見上げるほど高くなっていた大人の正宗が。

途端に、私は恥ずかしくなった。

この正宗の前であんな窓ぐりをしてみせたのかと思うと、自分
だけがとても幼いような氣になった。

早く自分の家に帰りたいと思った。

「うん、よかった、よかった。それでは、私は任務終了ってことで――」

そう言っ、て、さてさて家に帰ろうと思っ、て玄関を見たら。

「当たり前のことだけど。ないわ、私の靴が」

もしかして、と思っ、て正宗を見る。

「ごめん、持っ、てくるの忘れた」

そう言っ、て、正宗は申し訳なさそうな顔をした。

「うーん。持っ、てきてもらっ、てもいいかなあ？」

「うん、持っ、ていっ、てあげるよ」

そう言っ、と正宗は、あろうことか私のことを「持っ、た」。

「ちよつと、何？ わぁ」

私がそう言っ、と、正宗はまるで荷物を持ち直すようにして、私の背中にあっ、た片方の腕の位置をお尻の下というか太ももの位置にずらした。

確かにそうした方が持ち（抱き？）やすいんだろうけれど。

「待っ、て、正宗。正宗が私を連れて行っ、たらその間正宗の家は開いてる状態になるでしょ？ それっ、て、危ないでしょ？」

「確かに、そうだよな」

そう言っ、と正宗は私を下ろし、てくれた。

木の床に裸足の足がぴたんとついた。

「る、留守にするときは鍵をかけないとね。だから、正宗が私の靴を持っ、てきてくれればそれでいいんだから」

今の出来事に動揺して私は早口でそう言っ、た。

なんかもう、今日は今までの10年分に相当するほど正宗としやべっ、たような気がする。

「鍵はかけないとね」

そう言っ、と今度は正宗は、自分が玄関に入っ、たまま背中で鍵を閉

めた。

「は？」

「閉めたよ」

そう言つと正宗は靴を脱がないままで私の立つ板の間の側に腰を下ろした。

正宗、座つちやつている。

「あのね。私たちがここににいるのに鍵を閉めることもないんじゃない？」

なんだかわからないけれど、私もその場でしゃがんだ。

目線を正宗に合わせる。

正宗は私を見た後大きくため息をついて、そしてうなだれた。

「あのさ。今から、口説かせてもらつていい？」

「くど？」

正宗がうなだれたまま顔をこつちに向けてきた。

「頼子を」

「私を、なに、なに？」

「僕が頼子を口説きたいの。だから、隙をください」

正宗がやけになったような声でそう言った。

正宗が私を口説く？

この、正宗の家の玄関で？

隙をください、って。

「そんなのは、困る」

しゃがんでいた座り方を正座に直す。

いや、なんとなく。

「誰か、いる？」

正宗が訊く。

「い、いません」

言葉使いが丁寧になってしまふ。

「僕のが、嫌い？」

「嫌いじゃないけれど」

嫌いではない。

でも。

「私。正宗のこと、よく知らないし」

それはそう。

さっきの正宗の家の中を歩いたときに感じたときの気持と同じように。

知っているけれど知らない。

ましてや、大人になってからの正宗なんて。

私のとっては、海外からの「お土産運び人さん」だったし。

正宗は今の私の言葉で完全にノックアウトされたような顔をしている。

そうか。

こんなものの言い方が隙がないってことなのかもしれないなあ。

「あなさ」

正宗に話し掛ける。

「今、口説きたい？」

「え？」

怪訝そうな顔で正宗がこっちを見る。

「つまり、私にとってはとても突然のことだから。そりゃ、私だって男の人からそんなことを言ってもらえたら嬉しいよ。でもそれって、口説かれたってことが嬉しいってことで、それが正宗じゃなく

ても他の人でもいいことなのかもしれなし」

と言いながら、またまたこんな言い方がアレなんだろうなあと思ったり。

「多分正宗も、口説かれたのが正宗だから嬉しいって私に思われたいよね？」

ああ、話せば話すほど、とても失礼で高飛車な発言に陥っていくような気がする。

すると正宗がいきなり笑い出した。

「そうだね。確かに頼子の言う通りだね」

参ったな、なんて言いながら尚も正宗が笑う。

「僕さ、海外の仕事が多くて。なかなかこうして時間もとれなくて毎回出張から帰ってくるたびに『今度こそ頼子に言おう』って思っていたんだけどそれが上手くいかなくてさ、こうして二人になることもなかったし。それで流石に焦ってきていたんだよね。そんなとき、——って、つまり今晚なんだけれどさ、駅で明頼君あきよりに会ったり、おばさんともばったり玄関で会って夕飯に招かれたりして。そうなるともう『今日しかない』みたいな切羽詰まった思いになっちゃってね。ごめんね。頼子を驚かせちゃったよね」

失敗したなあ、と正宗が苦笑いを浮かべた。

そんな正宗を見ていたら、私が正宗をいじめているような気になっちゃった。

……ん？　ちょっと待つて。

明頼ってことは。

あの子も今日のことを知っているってことなのね！

やられた、と思っていたら「頼子の靴を取ってくるね」と言ってる正宗が立ち上がるうとした。

「あのさ！」

ぐいっと正宗の腕を掴む。

わあ、と言いながら正宗がもう一度その場に座った。

「あのさ、正宗の気持ちは分かったけど。でもさ『まずは、友だちから』っていうのは、有り？」

正宗の腕を掴んだままで訊く。

正宗の驚いた顔が目の前にある。

「無しだよ」

そう言つと正宗は私にかするだけのキスをしてきた。

心臓がどきんとした。

「有りにして」

私が言う。

今のキスなんて全く無かったかのような顔をしながら。

「無し」

そう言つてまた正宗がキスをしてくる。

このキスも無いような振りをするの？って私に問うかのように。

「だめ、有り」

自分が正宗にどきどきしているのを知られたくなくて、私は尚もそう言つた。

まるでキスなんて二人の間にはないような顔して。

でも、私がそう言つたびに正宗もしつこく「無し」と言つてはキスをしてきて。

それが続いて。

それが楽しくなつて。

そして今。

正宗が私を抱きしめてきた。

私も正宗のワイシャツを握っていた。

シャツ越しに正宗の体温がじんわりと感じられた。
静かでおとなしい正宗なのに、体温はとても熱くて、
それがとてもリアルだと思った。

正宗のこと。

正宗がどんな仕事をして、どんな人たちと働いていて、どんな本
を読んで、どんな色が好きだとか。

そんなデータ―は私は知らないけれど。

正宗の手とか、体の厚みとか、体温とか、臭いとか。
そんなものすべてを、今の私は知っていて。

そして、そんなすべてを私は好ましいと思っていた。

突然、私の中で遠くにいたはずの正宗の存在がズームによってぐ
ぐぐっと近づいてきた気がした。

それは。

正宗と始めてもいいと思っているってことなのかな？
正宗をそんな風に好きになるかもってことなのかな？

「頼子」

正宗が真面目な声で私の名前を呼んだ。

「好きだから」

正宗のストレートすぎる言葉が脳天に響く。

「口説かないって言ったのに」

ぼそりと正宗に言う。

「僕、嘘つきだから」

正宗はそう言うと、ズボンのポケットに手を入れてじゃらじゃらしたものを私の目の前のぶら下げた。

「鍵？」

「うん。持っていたんだ」

「え？」

正宗は鍵を持っていた。

「ついでに言うと、小学校の頃も」

「は？」

小学校の頃、とな。

「嘘っ」

「ほんと」

「……どーいうこと？」

「頼子にかまって欲しかったから」

おとなしい顔して、正宗はそんな告白までしてきた。

「う、嘘つきっ！」

嘘つき、嘘つき、と連呼する私に、正宗は動じることなくじゃらじゃらとした鍵の中の一つを取って私に握らせた。

「隣の駅だから。駅からは徒歩七分。三LDK。オートロック。三階、角部屋」

「な、なによ」

正宗から離れようと、ずりりと正座のまま後ろに下がる。

「マンション。買ったからさ。窓から頼子が入らないですむように渡しておくね」

マンションを買った？

鍵を渡す？

さっきまで私の目の前にいた健気な青年はどこへ？

「なんか、ずるい。ずるいよ、正宗」

「うん。僕は、ずるくて、嘘つきだよ」

正宗が言う。

「でもそうでもないよ、頼子に近づけなかったでしょ？」

そう言っただけで、正宗が私のことをじっと見てきた。

その顔を見て、そんな正宗を見て。

ああこれが正宗だったんだなあ、と思った。

同級生でお隣さんだけれど単なる近所の一員さんだった場所からひょいとハードルを超えて私の目の前に、今の正宗がいた。本当にそれは突然だった。

私の目の前に現れた、健気で自信家で策略家の正宗。

でも、それでも。

私は正宗が嫌じゃない。

なんか、面白そう。

うん。

正宗と一緒に生きるのって、面白そう。

こんな時に、こんな風に思うなんて少し変かもしれないけれど、わくわくとした。

わくわく、どきどき。

ちよつと冒険気分。

「でもね。先ずはお友達から、だからね」

形だけ睨んでしつこくもそう言う私に「じゃあ、三ヶ月間有効ね」とだけ正宗は言う。

そしてその噓つきのままの顔で、とっても嬉しそうに、にっこりと笑った。

近所人（きんじょびと）と私

誰でも、身の危険を感じる言葉の一つや二つを浴びた経験は、あるんじゃないかって思う。

そして、それによってその後の人生が変わるってことも。

「あら、理佐子ちゃん。こんばんは」

いつものように回覧板を持っていくと、訪問先の篠田家のおばさんは、にこにこしながら私を眺めてきた。

長年の付き合いから、おばさんのこのにこ顔はとても危険なシグナルだと知っている私は、年季が入り角が丸くなって味のある回覧板を「はい」とばかりにおばさんに押しつけると、「では、よろしく願います」とわざと間延びさせた声で手際よくシグナルブロックをし、おばさんの何か言いたげな視線を門扉で遮断するというとどめを刺し、家に逃げ帰った。

最初は全く気がつかなかった。

まさか、そんなニーズが私にあったなんて。

そんなこと、一ミリたりとも思ったことがなかったからだ。

だからあの時、ついうっかり、危うくあのセリフを最後までおばさんに言わせてしまうことになったのだ。

あの時とは、私が就職したてで、それを機に母が父の単身赴任先に行ってしまったばかりのこと。

今から三年前のことだった。

その時も、今日のように回覧板を持っていた私に、「一人暮らしは慣れたの？」とおばさんは心配そうな顔で聞いてきた。

心の底から心配しているのがわかるおばさんの顔を見てじーんとしながら、「はい。もうばっちりですよ」なんて答えると、おばさんは「まあ、よかったわ」と笑顔になった。

昔から、篠田のおばさんのことを私は妙に好きだった。

嘘がないというか、言っていることと表情が一致していたからだ。

大人は子どもがそんなことに気がついていないと思っているかもしれないけれど（つて今は私も大人の側だけど）、口調は気の毒そうなのに顔は微かに笑っていたり、褒めてくれているのに嫌そうな顔をしている大人って多い。

そういうの、大嫌いだし、ぞつとするとと思う私にとって、篠田のおばさんは安心できる人だったのだ。

だからって別に何がどうってことじゃないんだけど、親以外に好きな大人がいるっていうのは、嬉しいというか、ほつとできるというか。

ともかくそんなだった。

実は、内心、初めての一人暮らしで、時々心細くなったりもした私にとっておばさんの一言は、「よしっ、がんばるぞっ」ってな元気のもとにもなったのだ。

そしてそんな私に、「何か困ったことがあったら、いつでも頼りにしてね」と、おばさんは泣かせるようなことまで言ってきた。

人づきあいが薄いと言われる昨今、私は本当に幸せだとしみじみとした。

しかし、そこでしみじみしちゃったのがいけなかったのだ。

「そうそう！ 困ったことと言えば。聞いてくれる？ 理佐子ちゃん」

これは雲行きが、と思っただけけれどアフターカーニバル。

おばさんは、篠田家の兄弟姉妹の中で、私が唯一避けている人物

について語り出した。

「和弥^{かずや}なんだけど、社会人になっても相変わらずふらふらして、どこかにいい——」

「あ、おばさん！ 今、家の電話がなっていたみたい！ ごめんなさい！ 両親かもしれないので、家に戻りますねっ！」

そう言つと、私は投げ出すように回覧板を渡し、篠田家から逃げ帰った。

篠田家には外見も内容もすこぶる優秀なお子さまたちがいる。

その中で、篠田 和弥は、私が思うに「超ヤバい奴」だ。

そしてこいつこそが、私に、身の危険を感じる言葉を浴びせた張本人である。

今でこそそんな存在になった和弥だが、実は同じ年で中学までは学校が同じだったこともあってか、ついうっかり魔が差して「お付き合い」なんかしちまったことがあったのだ。

その頃は、和弥がヤバい奴だとは気がつかず、まあ確かに自分本位でおぼっちゃまなところはあったものの、だからといって人に危害を加えるわけでもなく意地が悪いところもなく、話していてもどちらかという楽しい奴なので、「お付き合い」も結構楽しいものだった。

が。

こいつはヤバい奴だと、そして以後和弥を避け、距離を置くようになった事件がある。

それは、中三の夏のことだった。

お付き合い半年目と受験とで、あれこれいろんな意味で盛り上がっていた私達。

和弥はやたらと私と和弥の親に、付き合っていることを公表したがつたていたのだけど、それを私は（今から思うと野生の警告ラン

ブが脳内でピコピコと光っていたのかもしれないが）まあ、受験が終わってからでもいいんじゃないの、と言ってのりくるとかわっていたのだ。

その日も、和弥の家で受験勉強をしながらの合間に、また和弥がその話を蒸し返してきた。

そして、私はいつものようにのりくるとかわして、再び勉強を始めた。

多少罪悪感もあった私は、勉強しながらも和弥の様子を窺っていた。

和弥といえば、勉強をせずにしばらくぼんやりと壁の方向を眺めていた。

そして「そっか。わかった」と納得したような言葉を言ったので、私も安心して勉強に本腰を入れようとした、その瞬間。

あいつは私をベットに押し倒したのである。

巷では、「最近の中学生は」とか、「出会い系サイトでどーだこーだ」というニュースが流れ始めたところだったけれど、私の周りにはそんな話もなくなっていたってクリーンだったので、まさか自分の「お付き合い」の中でこんな場面にぶち当たるとは夢にも思っていなかったのだ。

ベットに仰向けになりながらも手に参考書を持ったままだった私は、現実を起こっている状況に今一つ現実味がなく、どこかで「冗談だろう」と高を括っていた。

が、和弥が服を脱ぎ出したのだ。

ちよつとまてよ、おいおい、まじかよ、うそだろ、じょうだんだろっ！

頭の中で思いを漢字変換できないくらいパニックな私にお構いなしに、和弥は上だけ脱ぐと今度は私の参考書を掴んで机に置くと、ブラウスにまで手を伸ばしてきた。

「だめだめだめ！」

マジやばい！　と流石に身の危機を感じた私は、和弥の腕をぎゅっと握った。

今でこそ大人の野太い腕をしている和弥だけど、中三の頃はどちらかといえば華奢で、手首だって私が太かったかもしれない。

和弥は私に宙で腕を掴まれたままで「なんで」と聞いてきた。

なんで、ですって！　こっちが言いたいわ、なんで、って。

「あ、あほかっ！　ありえん！　こ、こんなことっ！」

中三だぞ。一四歳だぞ。

「はあ？」

和弥はきょとんとしたような、ホント無邪気に「はあ？」ってな表情をした。

だから、もしかして、これって、あのことに続くことに果てしなく似ている序章的行為だけど、実は違うことだったのかいな？　と思った私も「はあ？」なんて答えてしまった。

すると和弥は私をじっと見下ろして、「理佐子、おまえ、なに出し惜しみしてんの」と、呆れたような声で言ったのだ。

出・し・惜・し・み

今、こいつ、出し惜しみって言いやがりましたか？

私は大きく息をすったあと足で反動をつけ、起き上がりしなに頭突きを和弥の胸あたりにかまして「さらばだっ！」と言い放つと、部屋を飛び出した。

そして二度と、和弥の部屋に行くことはなかった。

乙女の一大事に向かい、「出し惜しみ」ですよ。

「出し惜しみ」。

出し惜しみ、結構。

どこが悪いっ！　って。

大事だと思っもんを、大事にしないでどうする。

そう簡単に、ちよちよいとできるかって言うんだバカ。

最初にあつた身の危険を感じる恐怖が去ると、今度は徐々にそれ

は腹立たしさへと変わっていった。

和弥は、起こした行動のあとの結果について、どう思っただとか。

男はいいけど、女はたまったもんじゃない、とか。

保健の時間、何を聞いていたんだ、とか。

考えれば、考えるほどに、許し難い言葉である。

腹立たしい。

しかも、中学生でそんな台詞を言うなんて！

世も末。

以後、名前も変え、住む場所も変え、性別も変え……なあんてことはできるはずもない私は、篠田家との関係も壊したくないという守りの気持ちも入り、ただひたすら地味に地味に地味に地味に和弥を避けながら「篠田家のご近所さん」として生息していたわけである。

しかし、和弥を「ご近所さん」とは呼びたくない私であった。

あんなやつを表現する言葉に、「ご近所さん」だけでなく「同級生」も「幼馴染」ももつたいない。

そこで私は和弥の存在位置的表現に「近所人^{きんじょびと}」という言葉を使うことにした。

私の脳内だけの呼び名であり区分けなのだが、それは私のプライドにも関わる大事なことなのだ。

なのに、なのにですよ。

篠田のおばさんは、私に「和弥に誰かいい娘さんを紹介してほしい」（みなまで言わせなかったが、あの先の流れとしてはそうだろう）と言っているのである。

自分が食べてまずかった饅頭を、人に勧める人がいるだろうか？
自分がされていやだったことをする可能性がある人物を、他の人に紹介なんかできるだろうか。

否。

否、よ。

それにあのおばさんのつてで誰もいないのなら、この地球に和弥の相手は存在しないのだ。

そうだ、和弥よ。

火星に行くがよい！

わずかな生命の可能性に、己の人生をかけよ！

「あほか、おまえ何言ってるの」

「うわつ。和弥め！ 人の家で何をしている！ 今すぐ尼寺へ行け！」

「あのさ。……前から言いたかったけど、理佐子のそのじゃべり方って、何かのプレイなわけ？」

「んなわけあるまい。この話し方のどこがまずいか申してみよ！」

「あと、考えていることが独り言で出るのは世間体が悪いのでやめた方がいいよ。俺、火星にはいかないし」

「うむむ。残念なり」

全くなんで和弥が人の家にいるのかと首をかしげながら、存在を無視して冷蔵庫に向かう。

「あ、俺にも麦茶くれ」

「……」

「無視しようとしているだろ」

この野郎、と言いつつ和弥は自分の分の麦茶を自分で注いでいた。

成り行き上、二人で立って麦茶を飲む。

あの「出し惜しみ」事件から十年が過ぎた。

社会人になってからは三年が過ぎた。

地味に地味に地味に地味に和弥を避けてきている私だけど、地味なだけに十分に避けることができず、結局隣を見るとこいつがいるのだ。

もしかして、和弥は私が避けているってことすら気が付いていないかもしれない。

それくらい地味で地味で地味で地味な私の抵抗なのだ。

「玄関、いくら俺の家が近所だからって、開けたまま行くな」

「え、開いていた？」

「恐ろしいことに」

回覧板を持っていく使命感に、カギのことは抜け落ちていたのだな。

「それは、すまぬ」

どんな相手にも感謝の意を伝えないとイケない。

そしてお礼も。

「そうそう、おばさん心配してたよ和弥のこと」

和弥がいぶかしげな顔をした。

そうかそうか、全くわかっていなかったか。

得てして、子とは親の心配に気がつかぬものだからな。

「和弥のお嫁さんのことだよ。早くいい人みつけて身を固めたほうがいいんじゃないの」

普段では絶対言わないことだが、玄関の鍵のお礼なのだ。

それに、私が女の子を紹介するよりも（って、紹介しないけどさ）

、和弥が自分で犠牲者……でなくて、お相手を見つけてくれた方が私だってハッピーなのである。

「はあ？」

「え？」

和弥の「はあ？」ってな顔は、中三の時に和弥がした、きょとんとした無邪気に表情に似ていた。

「……理佐子って、馬鹿？」

「漢字検定は準二級」

「いや、そういうことじゃなくて」

和弥はいつになく真面目な顔で考え込んでいる。

「付き合っている、よな？」

和弥が私の顔を覗き込んでくる。

「おっ、そうか。和弥には彼女いるんだな。それはよかった。それならそうと、家族に紹介すればいいのに」

そうしてくれていたら、私だって仲介人の役目をしなくてもいいのだから。

「……『言うな』って、言ったよな？」

またまた慎重な顔で、和弥が私の顔を覗く。

こうして見ると、この十年で和弥も外見的には大人の立派な青年になったなあと思った。

そういえば、あの暴言以来、和弥はそういった意味のことも一切言わなくなっていた。

体だけでなく心も成長していたのかもしれない。

そうか、そうか。

もうあの頃の和弥ではないんだなあ。

「おい、理佐子、聞いてるか？」

「あ、うん。話はもういい？ 私そろそろ眠りたいんですけど」
今日も忙しい一日だった。

私も社会人として立派に働けるようになってきたなあ、自分で自分を褒めてやりたい。

「眠るだと？ あ、まあ、一点だけ確認したらすぐにでも寝かしてやるよ」

「寝かしてやる？ あんたってば、何を偉そうに」

心の成長はまだだったらしい。

「まあ、聞け」

そう言うとき和弥はじつとこっちを見てきた。

負けずに私もじつと見る。

「俺らさあ、中学の時から今までずっと付き合っているよな。で、理佐子はそのことを両方の親には言ってくれなと言っていたよな」

「はあ？ あんた、何寝言を言ってるのよ。私たち付き合ってるん

か、なつ、ないでしょ！何をどう考えたらそんな考えが」

「はあ？付き合っていないって？じゃ、俺は誰と付き合っているんだよ！」

「そんなの私を知るわけないじゃん！」

「り、理佐子っ！てめえ、いつの間に俺と別れてんだよっ！」

「和弥こそ、いつの間に私と付き合っているのよ！」

「理佐子は変だ！」

「和弥の思考の方が変でしょ！」

二人とも会話の中にびっくりマークを飛ばしすぎで呼吸が荒くなっている。

マンガだったら、私たちのいるコマには「ゼイハア」って言葉が書かれていることだろう。

「落ち着こう」と和弥が言ったので「望むところだ」といって深呼吸をした。

「さて、理佐子さん。まあ、座ろうじゃないか」

そう言つと和弥は今私たちが立っているキッチン（しかも冷蔵庫の前だ）に正座をした。

仕方がないので私も和弥に向かい合うようにして正座をした。

けど、なんで正座よ。

「コホンとわざとらしい咳をすると、「じゃ、確認ね」と和弥が言う。

「俺さ、中学二年生の理佐子の誕生日に……言つたよな」

「うん。言つた」

もの凄く驚いたので覚えている。

「うん。それはOKだよな。で、それは始まり、と。で、理佐子の言つ終わりつていつのことだよ」

「『理佐子の言つ終わりつて』。……和弥」

つまり、和弥は終わっていないったというか、中学二年から今まで

私たちが続いていると思っただけだよね。

「和弥って、変人？」

こっちはもうとくに何の関係もない近所人だと思っていた相手が、実は今もって私を彼女だと思っただけで、果たしてそんなことであるのだろうか？

「変人」和弥は苦虫を噛んだような顔をした。

「変人かあ。確かに、ずっとずっとあいつらには、そう言われ続けてきたよなあ」

和弥が使う「あいつら」という言葉は、和弥の兄弟姉妹を表していることが多い。

「あのさ。つまり、私の言うところの終わりって、和弥の部屋に最後に行った時よ」

「俺が理佐子に胸を頭突きされた時のことか？」

ここで最後に「？」が入るってことは、和弥は本当に全く気が付いていなかったんだろう。

それは衝撃的である。

「私、私は、言っただよ。和弥ともう付き合えないって」

和弥の顔がひきさがる。

可哀そうな気もするが、私のあの時の衝撃を考えると可愛いものだ。

「言っただか？ そんなこと」

「言っただよ。ちゃんと」

「……俺、そんな痛いことを言われた記憶が全くないんだけど」

「記憶喪失？」

「んなわけあるか！」

「そうかあ。私は今でもしっかり覚えているけどなあ。和弥に頭突きしたあとの去り際に「さらばだっ！」って」

和弥には聞こえていなかったのかな。

大声で叫んだつもりだったけど、実際はそうでなかったのだろう。

「え。理佐子、今「さらばだっ！」って言った？」

和弥が正座したままで上体を前に傾けるようにして私にそう言った。

「うん。言ったよ。「さらばだっ！」って」

「それなら覚えている。で、それが、理佐子の言うところの別れのセリフってこと？」

「うん。さらば、だもん」

他にどんな言葉があるっていうんだ。

「……分かりづらい。非常に、分かりづらいことこの上ない」

「この上だろうが、この下だろうが、事實はかわらん。つまりが、あの日あの時あの場所から、君と私は赤の他人なのだ」

「微妙に某曲が入った台詞だな、おい。まあ、理佐子と俺が他人なのは承知だけど。……待て待て。ってことは、おまえの気持ちを尊重して過ごした、この俺の悶々とした十年間は、なんだというのだっ！ 理佐子、男の純情を返せ！」

そう言うとき和弥はほれほれと右手を出してきた。

……そうか。

憐れ和弥は、自分が振られらることを知らずに（どんだけおバカなのか）、彼女も作らずに過ごしていた……ん？

「おい待て和弥。おまえ、高校の時綺麗な女の子と付き合っていたよな」

そうそう。その彼女の姿を見てその哀れさと犠牲心に、木陰ですと涙を流したものだ。

「それに、大学のころだって。車で女の子を助手席に乗せて走っているのをみたような」

ような、でなく見た。

「記憶にない」

「……記憶に、ない？」

気の毒に。

自分に都合の悪いことは、デリートしてしまう機能がついてしま

ったんだな。和弥。

「ドンマイ和弥」

そう言いながら、さっき和弥が差し出してきて、今はだらんと
っている右手にをぼんぼんと叩く。
と。

和弥がそのまま私の手首をぎゅっと掴んできた。

「な、ななな。痛いでしょ」

右手で和弥の手首攻撃を阻止しようと試みる。

しかし、悲しいかな。

しよせんはおなこの力。

じたばたしている私をもともせず、和弥が私の左手に。

「ぎゃあ！」

「うっし。任務完了。返還不受理」

「これは、一体」

「ダイヤモンドですよ、理佐子さん」

ダ、ダイヤモンド。

「男の純情、これで相殺な」

啞然としている私の頬に、和弥がぱつとキスをしてきた。

「とりあえず、今から母親に報告してくるから。またあとでな」

そう言つと和弥は、口笛を吹きながら玄関からまで行き私を振り
かえると、「十年待ったんだ。いい加減出し惜しみもそれくらいに
しとけよな」と言つて出ていった。

や。ややや。

目をパチクリさせながら、恐る恐る左手薬指を見る。

ひっ……光ってますっ、よ！

これは、乙女の一大事ですよね？

サンダルとショートボブ

見るとはなしに、前を歩くカップルの女の人の髪を見ていた。

美容院で丁寧に染められたであろう栗色の毛は、肩の上でふんわりと落ち広がり、多分「昨日の朝」ならもっと綺麗にセットされていたんだろうなと思った。

着ているピンク色した質の良さそうなブラウスも、そして腰をしつかりマークしているベルトも、少しタイトなスカートも、全て「昨日の朝」と比べると、少しだけくたびれた感じがするんだろうなっと思った。

彼女の細い腕は、絡みつくように彼の腕に組まれている。

彼女がしつかりとヒールのある靴を履いているためか、隣の彼女よりも少しだけ背が高くなっていて、そのためか余計に体を彼氏側に倒し、密着度がやけに高いラブラブカップルになっていた。

土曜の朝、女一人で仕事に向かう私の目には、カフェインたっぷりのコーヒーよりも目が覚める光景でございますわ。

それにしても、彼氏、幸せだね。

愛されているね。

で、その彼氏のスタイルといえば、どーでもいいような色のＴシャツに（ほんと激しく色落ちして最初の色がわからない）、皺々のズボンに、足もとはサンダルだった。

……ん、サンダル？

ちなみに今朝のお天気は、雨でございますが。
うーん。

サンダルかあ。

そのサンダルの足に激しくデジャブを感じつつ、前を歩く二人と私はなんて違う格好なんだろうとも思った。

私の足元は、最近購入したすごく可愛いレインブーツ。

これがまた結構なお値段でした。
で、せっかくだからと、傘もブーツと合わせた色使いのものを購入。

雨でも仕事に行くのが楽しくなれるようにと、ある意味戦闘服。
前を歩くカップルさんは、傘は透明のビニールのやつで、本数も一本。（つまり、相合傘。ごちそうさま）

レインブーツを履いてなくても、傘とブーツの色が合っていないくても、雨でも楽しく歩ける二人が正直ちょっと羨ましかった。

と、交差点の信号で二人が立ち止まる。

彼女が何かを言ったことに対してか、彼氏が彼女を見た横顔が目にはいる。

—— ギクリとした。

塩崎 しおさき 峰生 ほうせい。

そうであれば、やたらと線の多い漢字が氏名に使われている、塩崎 峰生だ。

ああ、そうだ。

あのサンダルの足で気が付くべきだった。

彼は、学生時代から冬でもサンダルを履いている「サンダル男」として、有名な御仁だったのだから。

しかし、いくらなんでも塩崎 峰生が朝から女連れで近所を歩いているとは思わなかった。

だって、朝から彼女と駅に向かって歩いてるってことは。

彼は昨夜、自宅に彼女を連れ込んだってことでしょ。

けれど、彼の家は、家族良く暮らしているファミリーな一家なわけ。

よもやそんなご乱行をなさるとは、夢にも思わないじゃないですか。

もしかして、ご両親は旅行中……とか。
ひい。

何やってんだか。

そしてこういう場合、あっちよりもこっちの側が顔を合わせるのが恥ずかしくなるもので。

昨晩明らかに何かがあったと想像できる隣人の息子（塩崎家はうちの隣だ）に対して、明るく「おはよう」と言えるほどまだ私は人間ができてなく。

因って、急遽、駅までのルートを変更し、幸せカップルに会わないよう歩き出した私なのであります、まる。

「行野^{ゆきの}さん、備品の補充をお願いします」

開店前の準備のため売り場に立った私に、先輩からの声がした。

元気よく返事をし、私はレジ回りの袋の補充と紙袋に被せる雨用のビニールカバーの補充を始めた。

私は文具店に就職し、近所の駅ビルに入っている店に配属され、今年で二年が過ぎていた。

こういった職業だけに、土日だからといって休みではなく、自然と学生時代からの友人とは遊びに出掛けることは減ってしまったのだけれど、友だちがお店に寄ってくれたり、時には売り上げに貢献してくれたり、そういった面ではかえって顔を合わす機会は増えたのかもしれないと思った。

小さいころから紙マニアだった私は、やたらといろんな紙を集めていて、ついには職業にまでしてしまったというわけ。

会社の先輩にも「それも好きだなんて」と言われるけれど、私は文具を入れる薄茶色した平袋も好きだったりする。

ノートを入れる平袋もいいけれど、鉛筆とかペンを入れる小さく
長細い平袋も好きだ。

ノスタルジーを感じる。

好きなものを好きなだけ触れる仕事ができ（お会計をして袋に
商品を入れるたびに触るわけだし）、本当に幸せだなあとしみじみ
とする。

朝礼の後、ビルが開店する音楽が流れ、入店してくるお客様に挨拶
をしながら、今日もばりばり働くぞってな笑顔になる。

が。

「すみません」

かけられた声に振り向くと、後ろから見ただ服と髪型は知っている
けれど正面からは初めて見る女性の姿があつた。

「いらつしやいませ」

意外な訪問者にできるだけ笑顔で答えると、その女性のお客様は
「ふーん」って声を出すと（怖いよお）、「ほんと、小さいのね」
とおっしゃった。

小さい、というのは私の身体に関することだろう。

果たして、その言葉に、どんな反応をしたらいいのかわからない
私は、「困った時はスマイル」の信条のもと、そのままの笑顔で「
はい」と答えた。

微笑みながらも、視界のあちこちで塩崎 峰生の姿を探す。

おーい、君の彼女はここだよ、早く連れに來い。

「あ、もしかして知っているんだ。私の事」

へえ、凄いわねえ、と彼女兼お客様がおっしゃる。

「流石、彼女さんよね。悔しいな」

彼女兼お客様の言葉が、私には宇宙からのメッセージのように聞
こえる。

「でも私も、峰生とは家に泊まる仲なんだし。この際、彼女さんが

他に誰かを見つけるっていうのはどうかな」

彼女兼お客様。

多分、それは激しい誤解だと。

しかし、あまりの誤解に、そんな言葉も言えず。

ほほ笑みながらも、口をパクパクとさせた金魚状態の私を放って、彼女兼お客様は気が済んだような軽やかな足取りでお店から出て行かれた。

一度あることは二度あるってことか。

仕事から上がる前に商品の補充をしようと、品薄になっていたTOMBOのスティックのりをしゃがんで並べている時、隣にのそりとしやがむ人の気配がした。

「いらつしやいませ」、と朗らかにそのお客様に挨拶をすると、「やあ」と片手を上げた意外な訪問者その二、塩崎 峰生がいた。

「ちよつと話があるから来てくれる」、とどこかの店の名刺を私の手の上にひらりと置くと、塩崎 峰生はすくと立ち上がり、お店から出て行った。

塩崎 峰生の後ろ姿を眺めつつ、足元がサンダルであったことはしっかりとチェックしていた私だった。

実は今朝、ついっかかりめざましの占いを見てこなかった。

特別、占いを信じるってわけではないけれど、こういう非常時には何かしらヒントがあると心の拠り所になる。

何か救いの言葉をと、塩崎 峰生が指定してきたお店に行く途中のコンビ二に寄り、目に付いた雑誌をめくり天の言葉を探す。

がくりと項垂れる。

星占いじゃない。

生まれ月とか、生まれた日とかそいつったのを計算して出して占

うやつだ。

そんなの、今すぐできるわけもなく。

仕方なく、天の言葉なしに、そのまま塩崎 峰生が指定の店に向かった。

塩崎 峰生が待っていたお店は、英国のパブみたいな造りだった。

いい感じにブラウンのカウンターとテーブル。

店内をキョロキョロすると、こっちに向い手を上げた塩崎 峰生がいた。

目の前に現れた店員さんに、塩崎 峰生のことを指しながら「待ち合わせなんで」と言うと、店員さんはにっこりと笑い体をすっぴんずらしてくれた。

塩崎 峰生の前には、黒ビールとつまみのナッツ類の入ったお皿があった。

「こんばんは」と言って席に座ると、塩崎 峰生は「わざわざ悪いね」なんてことを言った。

さっきの店員さんがお水を持ってきてくれたので、私も塩崎 峰生と同じ黒ビールを頼んだ。

ただし、サイズは小さめで。

とりあえず、と思い、テーブルに置かれた水をごくごく飲む。

緊張しているなって、自分でも思った。

「行野さん」と塩崎 峰生が言う。

お、いよいよか、と思い「はい」と答える。

そして、そうか塩崎 峰生は私のことを「行野さん」と呼ぶんだなと了解した。

つまり私も彼の事は、塩崎君と呼ぶのが正しいのだろうと。

「フクエンしたいんだけど」

塩崎君はそう言っただけで私の事をじっと見た。

フクエン……、復縁？

「フクエンって、復讐の復に、縁日の縁？」

「はは、相変わらず面白いこと言うね。そう、フクシユウの復に縁日の縁。ところで、行野さんの言うところのフクシユウってシユウの字は『習う』の方？」

「あ、習うじゃなくて、難しい方」と言っただけでテーブルの上に「讐」の字を指で書く。

「暗示的」

「え、暗示的？ 何が？」

「まあ、そうならないといいけど」

「う、うん？」

一体どんな会話なんだと思っているうちに、黒ビールがやってきた。

「んじゃ、乾杯」と言っただけで、塩崎君は一方的に人のグラスに自分のグラスをあてた。

コクと苦みがある黒ビールを、私は塩崎君に教わった。

そもそも、塩崎君は隣人などではなく、大学の同級生だった。

その同級生である塩崎君が、ある日一家で我が家の隣に越してきたのだ。

だから、私たちの隣人歴はまだ三、四年といったところ。

あの時は、大学の同級生が越してくるなんて凄い確率だなあと、心底驚いたものだった。

確かに、私と塩崎君は、仲が良かった。とても。

—— 彼が引っ越してくる前までは。

けれど、仲が良かったとはいえ、塩崎君が言うような「復縁」するような関係になったことは、一度もない。

その手前で。

友だちと、恋人の真ん中で。

ある日突然、塩崎君は私を避け出したのだから。

だから、塩崎君が「復縁」って言った時も、漢字にならなかったし、なつたあとでも、その意味がわからない。

あ、待てよ。

塩崎君は、私と「復縁したい」とは、言っていない。

ああ、そうか。

ピンクブラウスの彼女との仲がこじれたってことで、その修復に力を貸せっってことなのだろう。

なるほど……。

「で、どうすれば」

ん、って顔でビールを飲んだあと、塩崎君は「ああ、はいはい」と言った。

「ってことは、行野さんにもその気があるってことだね」

まあ、二人の仲を取り持つのはやぶさかではないので、「まあ」と答える。

「誤解を解けばいいのかな？」

ピンクブラウスの彼女は、私を塩崎君の彼女だと勘違いしているわけだから、そこを正すのがいいのかなあ。

「ああ、誤解かあ」

塩崎君は、随分難しい顔をした。

「俺が、悪いんだよな」

ぼつりと塩崎君が言う。

ほお、と思いながらビールを飲む。

自分が悪いって思える人って、いいなって思った。そしてそれが、塩崎君で嬉しいとも。

「大丈夫だよ、きちんと説明すればわかるから」

きつと何かの拍子に、隣に住む大学の同級生の話にでもなったんだろう。

正直、自分が好きだった相手とその彼女間に出てほしい話題ではないけれど、それはもう仕方ないなと思った。

大学での写真でもあっただろうか。

「説明、上手くできるか自信はないけど、聞いてくれる?」と塩崎君が言った。

私が、聞くのだろうか?

彼女に言う前の、プレ説明か?

「まあ、うん。いいけど」

わざわざ私を呼び出してのことだから、まあ、聞くしかないんだろうなとも思えた。

でもそれって、ちょっぴり、残酷だ。

「背が低い女の子が嫌いってわけじゃないんだ」

「……はあ?」

「いや、ほら、俺、そういったこと学生の頃言った記憶があるから。行野さんの前で」

「はあ。それは、まあ」

言った、確かに塩崎君は言った。

背の低い女の子なんてとんでもない、と。

そしてそれから塩崎君は、私を避けだした。

だから私もそれ以来、彼には近づかなかったのだ。

塩崎君はその言葉通り、連れて歩く子はピンクブラウスさんみたいに背の高い人ばかりだった。

「無神経だったと分かってた。けど、謝れなかった」

ごめん、と塩崎君が言う。

外見の好みってものが人にはあるってことを、人より先に身長における成長期が終わった時点で私にはわかってた。

それは、自分の身長について、やけに好ましいと言ってくる人がいたって経験があったからだ。

だから、その反対のことを塩崎君に言われた時、自分では直しようがないどうしようもないことなのに、どこかで、あ、そっかとも思ったのだ。

理屈じゃなく、「そういうもんか」と受け止めたのだ。

「行野さんのことを避けたのは、俺のバカなプライドのせいなんだ」

「え？」

「大学で、行野さんと出会って。行野さんといると楽しくて、ほんと、それは本当に」

「……はあ」

「その時点でも、周りに色々言われていて、でもまあ、気にならないって言えばウソだったけど」

周りに色々って、冷やかされたってことだろうか。

「引っ越して行野さんの家の隣になって、なんて凄い偶然なんだって喜んだんだけど」

喜んだ、って。

思わず顔が赤くなる。

「親や兄弟から、行野さんならおまえに丁度いいなんて言われて」「え？」

それは、どういう意味だろう。

「身長」

塩崎君は一言そう言った。

「あんなこと、行野さんに言う言葉じゃなかった。本当にごめん」

塩崎君は深々と、それこそテーブルに頭がつくくらい下げていた。

塩崎君の身長は、百七十センチはないと思う。

百六十五とか。

私の身長は百五十センチちょいなので、確かに並ぶといい感じだったのだろう。

それを、身長を気にしていた塩崎君が面白く思わなかったとしても、仕方がないことだろう。

そう。仕方ないのだ。

そういうことだ。

「そのことは、もういいよ。時効ってことで。で、塩崎君の言うところの復縁のお手伝いはどうすればいいわけ？ 経験からして、彼女に彼女じゃない女——つまり私ね、が説明すると余計ややこしくなると思うんだよね。だから、塩崎君の思うお手伝いができるかといえ、今一つ自信がないかなあ」

一気にしゃべったら喉が渴いたので、ビールをごくごく飲んだ。

「……彼女？」

「うん。ほら、ピンクのブラウスの」

「え」

「ん？」

「なんで？」

「なんでって。今朝一緒に歩いているところ見たし、お店にも彼女来たし」

「……今朝」

「うん。今朝」

「や、あれは何でもないから！ 昨日会社で飲み会があつて、彼女が家が遠くて終電ないっていうからうちの家に泊めたけど、家族もいたし」

「そうなんだ」

「そうなんだ、って、行野さん、分かっているのかなあ」

「うん。終電でしょ」

「……ま、まあ。で、それよりお店ってどういことさ」

「どういことって、彼女がうちのお店に来て、なんか勘違いしたようなことを言っ去って行ったのよ。だから、塩崎君はその誤解を解きたいんでしょ？」

「いや、解きたくない」

「解きたく、ない？」

「そう」

「そうなんだ」

「そうなんだ、って、行野さん。分かっているのかなあ」

塩崎君がぼやく。

実は、塩崎君のぼやきの通り、私にはさっぱりわけがわからない。

でも、まあ、そもそも私には関係のないことなのだから、あまりとことんまで塩崎君にあれこれ説明させるのもなんだと思うし。

ところで、今までの話のどこが、彼女へのプレ説明だったんだろう？

さっぱりわからない。

私、酔っているのかな。

「まあともかく、塩崎君は自分が悪いって自覚があつて、彼女との関係を修復したいって思うわけでしょ。大丈夫だよ。自分がしたことを分かっいて、尚且つ建設的な考えを持っているわけだから、きっと上手くいくって。自信をもつて」

酔っているならそろそろ帰った方がいいと思う。

だって、素面でもかなり私にはきつい内容なわけだし。好きだった人の恋愛相談なんて、悪酔いしかできない。

「行野さん、わかってない」

「え」

腰を浮かしかけた私に、待ったの聲がかかる。

「誤解を解きたいのも、復縁したいのも、相手は行野さんなんだ」

「へ」

私？

意味がよくわからない。

「なんで？」

なんで。

「大学の時、うちが行野さんの家の隣に越してくるまで。俺が行野さんに暴言を吐くまで。すぐ、思いつきり自惚れかもしれないけど、俺たちいい感じだったよな。でも、隣に越して、距離は近くなったのに、さっき言った俺の妙なプライドのせいで関係は遠くなつて。それ、ずっと後悔していて」

塩崎君の言葉に目がぱちくりとする。

「昨日、会社の飲み会のあと、あんな風にあの子がうちに泊まつてで、当然のように親もあの子も、俺とあの子が付き合っただみたいな雰囲気になつて。そこまで来て、ようやく危機を感じたというか、このままじゃダメだつて」

そう言つと塩崎君は黙ってしまった。

「家は隣なんだから、近くににいるんだから、だからそのうちまた行野さんと親しくなれる時も来るんじゃないかって樂觀的に考えていたけど、それ、甘かったなつて。ちゃんとと言わないと、いつまでも平行線だつて自覚して」

行野さんと親しくなれる時？

行野さんつて、私のことだよな。

「もし、行野さんに付き合っている奴がいらないなら、俺の事を考えて欲しい。いや、もしいたとしても、俺とのかを考えてほしいんですけど」

塩崎君が、じつと私の顔を見ている。

ひゃあ。汗が出ますよ。

「そう、なんだ」

つまり、塩崎君は私のことを――。

「また、そうなんだって言葉で。行野さん。本当に、分かっているのかなあ」

「うん、大丈夫よ」

「ふーん。不安」

そう言つと塩崎君はビールをぐくりと飲んだ。

「言っちゃんだよね、あの子に。隣の子が好きだって。大学のころからって。で、写真見せろって言うから、見せたら見せたで、『ショートボブって、この子がショートボブなんじゃない！』っていきなり怒られて。なんでも、あの子、俺がその髪型が好きだってことどこからか聞いて、それでそうしちゃったみたいんだけど。だから、責任とれとか言いだして、結局美容院代って一万円ぶん取られたんだけど。まいったよ」

塩崎君はそう言つと、首の後ろを掻いた。

「で、復縁なんて言葉を使っちゃったけど、つまりは仕切り直し。もう一度、仲良くして欲しいんだけど。どうでしょう」

「……どうでしょうって言われても。なんというか」

私にとってはあまりに突然のことで、戸惑うばかりだ。

でも、人生においての「ここ一番」ってというのが、おそらく今って気もして。

ここはがっちりと掴まないと、後悔するって予感があった。

「仲良くって、いきなりはちょっとあれだけど。徐々になら。ご飯を食べに行ったり――」

「映画を観に行ったり？」

「うん。そう」

私の答えに、塩崎君が小さくガッツポーズをした。

いや、そんな。

私、それほどの者ではございませんが。

思わず照れ笑いを浮かべると、塩崎君も同じように笑った。

お店を出て、並んで歩く。

家が隣同士だから、一緒にいられる時間が長い。

塩崎君とこうして歩くと、大学のキャンパスで、まだお互い少し敬語なんか入りながら話していたころを思い出す。

そのうち、段々と仲良くなって敬語もなくなって。

塩崎君の隣にいるのが心地よくなって。

たまに、友だちや先輩に冷やかされることも増えてきたなあと思う頃。

塩崎君一家が、うちの隣に越してきた。

そして、塩崎君に避けられて、私たちは離れて――。

ペタンペタンと、サンダルの音がする。

隣を見れば塩崎君。

あの頃より、少し大人になった顔。

彼の隣で、私の髪が揺れた。

それもひとつの春の景色

駅の前の赤信号で立ち止まる。

横には良く知る人物が。

すぐに、そっちも私に気がついた。

そして顔を見合わせて、―― まさに相手の顔をじっと見て、
お互いの鼻から口にかけて今まで見たことも無い白くて四角いもの
の存在に目を丸くする。

「花粉症？」

<コートは玄関で脱いで部屋には持ち込まぬのが良いそうで。>
<<やってる、やってる。更に帰ってきたら直ぐにシャワーを浴
びたほうが。>>

<今日からやってみる。会社の人から良く効くサプリを聞いたん
で教えるよ。>

<<ありがとう。その種類は知らなかったなあ。帰りに薬屋さん
で搜すわ。あと、飲むとすつとするお茶があるんで、おばさんに渡
しとくね。>>

<サンキュ。>

ご近所だけと社会人の私たちは、専らメールで花粉症に効く情報
を交換し始めた。

<保湿性のあるティッシュというものがあることを初めて知った
！>

<<あれ高いんだよね。でも駅向こうのK薬局では安く売ってい

たよ。 > >

< あそこ何時までだっけ。今日は遅くなるから母親に頼むかなあ。
>

< < だったら、今日は私も自分の分の買いに行くから、ついで
に買っておばさんに渡しとくよ。 > >

< すまん。助かる >

そして、小学校以来あいつの家に行く機会が多くなった。
もちろん、あいつはいないんだけど、おばさんにお茶なんかを
勧められて飲んで帰る日も増えてきた。

「どうしてうちの娘は、南野さんお宅に寄ってから自分の家に帰っ
てくるのかしら」

あまり私のすることに煩く言わない母でさえ、遂にそんなことを
言い出した。

「まあ、成り行きというか、花粉というか」

隠す必要もないので、私は南野さんとこの正春とのここ数日のや
りとり（主にメールだか）を庭に咲いている沈丁花をガラスを隔て
て見ながら話した。

そつえば、沈丁花の香りをかいでいないなあ、なんて思いなが
ら。

そんな私に母は「ふうん」と言ったあと「まあ、これもひとつの
と言つて、にやりと笑った。

さてさて。

相も変わらず、メールでの情報交換は続く。
けれどそのメイン情報に混じって、花粉以外のやりとりもちらほ
らと増えてきた。

たとえば。

<今日の昼そっちの会社のそばに行くから、この間の紙代とお茶代を払う。>

なんてメールが来て。

だから、なんというかうちの会社の側で待ち合わせをして、そのままお昼と一緒に食べたり。

たとえば。

そのお昼を食べたときにあいつが「仕事先で貰ったけど見たい映画でもある？」なんて、シネコンのチケットを見せてきたから、そこで上映されている前々から見たかった映画に会社の帰りに待ち合わせて一緒に行ったり。

たとえば。

突然母が土日になるとケーキを焼きだし「悪いけれど南野さんの家におすそ分けしてきてくれない」なんて言ってくるもんだから仕方なくそれを正春の家に持っていったり。

するとそこでまた家上がるように言われて、正春がいないのに関わらずおばさんとおしゃべりして帰ったり。

たとえば。

たとえば。

……つまり。

生活の中に、あいつの存在が急に入り混んできちゃったわけ。

花粉症のせいで。

まあ、つまり。

私も暇なわけで。

彼もしないし。

彼はいないが、正春がいる。

そんな日々。

久しぶりに会社帰りに学生時代の友達数人で集まって飲んだ。
中にはちゃっかり付き合っている子たちもいて。

しかも目の前でいちゃつくもんだから、私は苦笑いをしてしまった。

ふと誰かの視線を感じてそっちに目を向けると、正春がいた。

あれれ、と思って手を振ると正春も振ってきた。

正春の隣には女の子がいた。

おデートですかあ、と思いじっくり相手の女の子を観察した。
可愛い子だった。

目の前には、いちゃつくカップル。

お店の向こうの席には、おデート中の正春。

そういえば、正春はマスクをしていなかった。

そういえば、私だって今日はマスクはなしで過ごしていた。

そういえば、最近正春との花粉メールも途切れがちで。

つまりが、いつのまにか花粉のピークは過ぎていたってこと。

もう正春との情報交換は終了ってこと。

縁側に座って青空を見上げながら、マスクなしの鼻と口であるかないかの沈丁花の香りを体の中に取り入れるようにと大きく息を吸った。

おかげさまで、もう涙目にもならなければ、鼻水もくしゃみもない。

「おつ。こんなところにカバがいる」

人の家の庭に勝手に入ってきた正春が私の顔を見てそう言った。

「なんですと」

しかし鼻から口から息を吸っている姿は、そう見えるかも。カバに。

「ふふん。気持ちいいんだから、カバでもいいもんね。ようやく春が来たのを喜べるんだから」

そう言うともう一度同じように息を吸った。

「確かに、ほんと、参ったよなあ」

この年になって花粉症になるとはなあ、と正春は言つと私から少し離れたところに座った。

「でもさ。楽しかったよ」

正春がそう言う。

「まさか、花粉症になったことで訓子のことメールのやりとりをするようになるとは思わなかったし」

「うん。それはそうよね」

あの日、あの信号でお互いマスクをして立っていなかったらこんなことにはならなかった。

そう思うと不思議だ。

「昨日のさ、あの中に。彼とかいたりするわけ」

正春が訊いてくる。

「あの中って、あのお店で？　いないよ、みんな高校時代の友だちだよ」

高校からは正春と違ったもんねえなんて思いながら私は両手を後ろについて、足を交互にぶらんぶらんとさせた。

そのたびに、足先で脱げそうで脱げない小さなサンダルがゆらゆらと揺れていた。

「あの子さ。ほら、昨日正春と一緒にいた子。正春の彼女なんですよ」

私もなんとなくそう言ってみた。

「可愛い子で正春幸せ者だねえ」

うん、文句なしに可愛い子だった。

すると正春は「彼女ではないけれど」と言い、そのまま黙ってしまったのだ。

—— 彼女ではないけれど、好きな子。

そう解釈して「ふうん。いいねえ。春だねえ」と言った。

すると正春は「なんだかなあ。そうくるかなあ」と言った。

見ると正春も私と同じように両手を後ろについて、足を交互にぶらぶらとした。

正春の足には大きなスニーカーが。

ぶらぶらとしても脱げそうにないスニーカーが。

正春が話し出す。

「だいたいさあ」

—— 右足ぶん。

「そんなにさあ」

—— 左足ぶん。

「話がさあ」

—— 右足ぶん。

「上手くさあ」

—— 左足ぶん。

「いくわけなんてさあ」

—— 右足ぶん。

「ないとさあ」

—— 左足ぶん。

「思ったけどさあ」

—— 右足ぶん。

「あら。正春つてば。何かうまくいかないこともあるの？」

足をぶんぶんさせるのを止めた正春に聞いてみる。

「全くさあ、上手くいったためしなんてありやしないって」

正春が言う。

あらま。

それは。

「かわいそうに」

正春、いいやつなのに。

優しいし、奢ってくれるし（あ、違うか）。

でも、あの子と上手くいかないのかしらねえ。

あらら。

人の不幸なのに。

あらら。

ちよつとまずいんじゃない。

すみません。

ちよつと、私、嬉しいような。

ううん。

かなり嬉しいような。

私って。

アクマだわ。

「なんか嬉しそうじゃない」

「え・え・ええ？」

まずいと思って、後ろについていた手で自分の顔を挟んで「いえいえ。そんなことは決して」と言いながら、ほっぺを両方から挟んで真面目な表情モードに戻す。

「なんだよなあ。かわいいよなあ。ずるいよなあ」

正春はそう言う私の左足のサンダルをコツンと蹴り飛ばした。

「あ、酷い。サンダル飛んでったじゃないのさ。ちよつと、取って来てよお」

私のサンダルは、沈丁花の低い木の下へとびゅんと飛んでいつている。

「やだ」

そう言う正春はぶうたれた顔のままで私のサンダルのもう一つもぽんと蹴り飛ばした。

全く何よ、人に八つ当たりしちゃってさ、正春のことかわいそうなんて思って損したわ、と思った瞬間。

さっきの正春の言葉が巻き戻されて再生される。

—— なんだよなあ。かわいいよなあ。ずるいよなあ。

「あのさ、正春。『ずるい』って、誰のこと」
「訓子」

この私が、いつずるいことをっ。

「で、『かわいい』のは誰よ」
「訓子」

この私が、いつかわいいことをっ、って、あらら。

あらら、あれれ。え？

「私、かわいいの？」

正春に聞く。

「うん」

正春が即答してくる。

衝撃的。

かなり、衝撃的。

「わ、私が？」

びっくりして正春を見る。

正春はため息をつく。

「気が付かないよなあ、訓子はさあ。親にもバレバレだったっていうのにさ」

バレバレって。ええと。

ああ、正春が私をかわいって思っていてくれたってことだよな。

同じ年なのに、かわいって思ってる。

ええと、つまり。ええと？

「まあ俺も何のリアクションも訓子にしてないし、言ってもいないし。そもそも、こんなに近所だったらさ、そんな気があってもそうそう行動に移せないというか。だから、まあ訓子のことは好きだけれど、でもしょうがないよなあって思っていたわけ」

『かわいい』どころの騒ぎじゃない衝撃的告白その2を、正春は何の心の準備もない私にさらりと言ってきた。

ほんと。

何よお。

好きって、さあ。

「でも、花粉症で訓子と付き合いが出来て。そうになると、ああ、これもひとつの縁なのかなあって、チャンスなのかなあって思いだしてさ。だから花粉の季節は終ったけれど、でもこれからもうこうして付き合っていけたら、そうしたらもしかしたら訓子だって俺のことに何かしらこう気持ちがかかるかなあって思ってた。でも、それも甘かったなあって。俺が女の子といっても、その子のこと可愛いなんて訓子は言い出すし」

そう言うとき正春はまたため息をついた。

そしてそれにつられるように私も溜め息をついた。

「この間一緒にいた子はさあ、花粉症になる前に友だちから紹介された子でさ。まあ、一、二回ご飯を食べたりしているんだけど。

確かに可愛いし、いい子だけれど。昨日で会うのはおしまいってことになったんだ」

ようするに、あの可愛い子は正春の好きな子じゃないってこと？

ふうん。って、あれね。ちょっと、ワタシ、いい気分かも。

「俺さ、つまりやっぱりどの子よりも訓子が可愛いって思うんだよね。訓子が笑うと腰砕けになるし。もう、ずっとそうだから、多分一生そうなんだと諦めた。腹をくくったというかさ」

正春のやけになったようなその言葉に、私は赤くなってしまった。

あの子よりも私が可愛いなんて。

正春って、なんというか。
ねえ。

それにしても、私のこれまでの人生で、男の人にこんな風に「可愛い」と何度も言われたことがあっただろうか。

いや、ない。

ないぞ。

だって、どうみても私は可愛いほっじゃないと思うし。

なのに、正春は私を可愛いと言う。

これって、つまり。

正春って、私のことをとても好きだと思ってくれているんだってことだよな。

それって、嬉しい、って思った。
嬉しいって。

「私はね、さっき正春があの子と上手いかわなくて悩んでいると思
ったんだ」

私がそう言う、「分かっているよ」と正春が言う。

ううん。

正春は分かっている。

「でね。それをね。ちよっぴり嬉しいって思ったの」

そう言うて舌を出す。

「私はね、正春とあの可愛い子が上手いってなくて、ちよっぴ
り嬉しいって思ったのよ」

私がそう言う、正春の表情が一瞬固まった。

そして、0・3秒くらいどんな表情をしたらいいか正春の顔は悩
んだ後、ちよっぴり怒ったような表情を選んだのだった。

そんな表情を選ぶほどに、正春は照れてるんだと思った。

「じゃ、俺も言うけどさ。さっきのあの顔は、あれはどう見ても『
ちよっぴり嬉しい』って感じじゃなかったよな」

そう言う、正春はすっと立って私のサンダルを取りに行った。

私に背を向けて歩く正春の背中を見て、くすりと笑う。

―― 正春ってば。

―― 背中全部で私を意識している。

そして私はそんな正春の背中をくすぐったい思いをしながら見て考えていた。

ここが、ドラマでいえばここが、物語最大のクライマックスだっ
てことを。

私が正春にどう答えるかで、私の人生が違ってくるんだろうなあってことを。

正春がサンダルを手にしてくるりと振り向いた。

正春の照れながらも顔の私を見る顔に、どうしようもないほどにときめいてしまう。

さて。

どうしよう。

サンダルを手にして私の方に歩いて来る正春に。

『そうなの。実はすっごく嬉しいって思ったの！』って。

正春が腰砕けになるっていう笑顔で言ってみようか。

それもひとつの夕方の景色（前書き）

「それもひとつの春の景色」（前話）の続編です

それもひとつの夕方の景色

このごろ、なあんか気持ちも冴えなくて体調も今ひとつなんだよね。

だから派手に残っていた有給休暇をちよいと使い、予定もないのに一日休みをとってみた。

網戸にした窓から、庭からの雨音が聞こえてきた。

随分と音楽的な音がするなあと思ったら、ひっくり返って庭に転がっていたバケツや上呂の上を雨粒が跳ねていた。

そんな様子を楽しみながら、天気予報とニュースを聞き、家族揃って朝ごはんを食べた。

外は昨日からの雨。

季節もまさに梅雨。

午前中の降水確率は九十パーセント。

「お、訓子のんこは今日は休みか？」

食後の珈琲を私がいれていると父がそう尋ねてきた。

「うん。有給が余っていてね」

そう私が言くと父は席を立ち、ハンガーに掛けてあった背広の上着からお財布を出して五千円札を一枚机に置いた。

「昼ごはんは母さんと美味しいもんでも食べてきなさい」

父はそう言くと、再び食事を始めた。

びっくりして母と目を合わす

「あら、お父さん。訓子は正春君とデートかもよ？」

母が澄ました顔で言う。

「……彼も今日は会社を休んでいるのか？」

むっとした声で父が言う。

「休んでないって。ちょっと、お母さんもそんないい加減なこと言わないでよ。正春は会社を休んでいません。休んでいるのは私だけだってばあ」

一体何を言い出すんだか、と焦りながらドリップの終わった珈琲を三人分のカップに注ぎだす。

「ふーん。あら、訓子はよく知ってるのね、正春君の予定を」

母が、へえーそうなのーっなんて言い出だす。

「ちよつと、それは……。あつ！」

勢いあまって珈琲がカップから溢れてしまった。

「訓子。朝から落ち着きがないぞ」

父が呆れたような顔をしてびちよびちよのテーブルを眺めている。

「……はあい」

そう返事をしながら、私は台布巾で机を拭いた。

正春っていうのは、ご近所にお住まいの青年で、私にとって長いこと単なる同級生にすぎなかった存在のヒトでしたが。

この春、お互いが花粉症になったことからいろいろと付き合いが始まって、めでたくもついには男女のお付き合いをするまで発展した間柄なのでございました。

さてさて。

そんな風に始まりました私と正春のお付き合いですが。

どうもご近所同士でお付き合いを始めますと、俄然周りのほうが熱くなるもののようにして。

恐らくここしばらくの「井戸端会議」での一番の話題は私たちネタだと思われるくらい、もうあつちでもこつちでも一人で歩いていても二人で歩いていても、あれやこれやと声を掛けられるようになった次第です、はい。

たとえば、「訓子ちゃんも女の子らしくなつて」とか。（この場合、「女の子」の年齢は三十歳未満ということだと思われる）

たとえば、「春君も、大きくなつて」とか。（この場合、「春君」とは正春のことで、「大きく」というのは一体何を指すのかは不明。恐らく、あまり意味はないと思われる）

そんな言葉をご近所を歩いた際に、かけていただいていた。

そしてそれは私たちだけでなく、私の両親や正春のご両親も同じだったようでした。

正春一家はどんな反応をしているのかは知らないけれど、うちの母なんかは「まるで芸能人の母になった気分よ」などと暢気なことを言っていた。

芸能人というのはいい例えだと思った。

かくゆう私も、なんちゃって芸能人になった気分がしていたから。

どういふ点でかと言うと。

自分たちが親しくなる速度よりも、周りが期待する状況速度の方が速くて、対応に困ってしまっていたから。

なんと、一部の奥様の間では、私は妊娠二ヶ月（しかもおなかの中にいるのは女の子だそうな）になっているそうでした。

そんなこんなで、この凄まじいご近所パワーの実態を実感している日々なのであります。

そして、こんな過激なご近所の情報と対極の情報をもつのが、実はそれぞれの実家でした。

私たちは相談して、家族にはむしろ今の二人の状態を控えめに伝えていたので、私の親も「本当に訓子と正春君は付き合っているのか？」と疑問に思いもするらしかった。

だって、仕方ないじゃない。

正春つてば、私に衝撃的告白をしたあと仕事が衝撃的忙しさになっ
てしまつて。

実際に、あんまり会っていないんだもん。

だから、ご近所の方々が思うほどには私たちは何の進展もしてい
なかつたのだ。

もしこれが芸能界だったら「破局」報道されることは間違いなし
つて程のお付き合い内容。

つまんない。

たとえば、こんな雨の日だとしても。

一緒にお茶を飲んでおしゃべりしたり、ビデオで映画を見たり。
何なら、正春が行きたいって言っていた車のショールームに行っ
てもいいし。

つまりなんらかのかかわりを正春と持ちたいって思ってしまう。

そして、そんなことを思ってしまう自分に戸惑いも感じている。

今まで長いこと、正春のない生活を送っていて、全く不自由はし
なかつたのに。

付き合いだした途端にこれだもん。

やだなあ。

ずるいなあ。

正春はいないし。

だからここ最近ちらりと考えてしまうことがある。

私、もっと誰か他の、もっと私の側にいてくれる、どこかの誰か

と付き合った方が幸せかもしれないって。

——— つまり、正春じゃない誰かと。

「部屋の片付けをしているね」

父を玄關で見送ったあと、そう言っただ部屋に戻ろうとした。

「ねえ、訓子。ランチ行くでしょ？」

母が言う。

「うん。行こうか」

そう答えると母は「お父さんも奮発したわよね」と言いながら五千円に向かって拜んでいた。

トム・ヤン・クンが食べたい、との母の希望で、自分達が住む沿線にあるお店に行った。

「この酸っぱい辛さがいいのよね」

母がそう言いながら嬉しそうにスープを飲んだ。

「うん。そうだね。この独特の味っていいよね。でもさ、私は昔、苦手だったなあ、この味とか臭いとか」

私はそう言いながら今は好きになったこの味を楽しんだ。

すると母も「あら。それを言うなら私はねえ、昔、メロンが苦手だったわ」と言い出した。

「メロン？」

それは初耳だわ、と母の方を見た。

「なんかほら、あれって、きゅうりみたいで」

「……確かに、下のほうは」

そうかもしれないなあと思い、でも今やお中元でメロンが来て一番喜ぶのは母なのになって思った。

「私ねえ、昔、お父さんのことも苦手だったのよ」

母が言う。

母と父は職場結婚だ。

「だってね、訓子。お父さんってなんだかいつも難しい顔して、誰を見てもにこりもしないのよ。まるで笑うのが無駄な筋肉を使うことかのように」

まあ、確かに今でもそんなににこやかな父ではないが。

「でもね。ずるいのよ、あの人ったら。ある時、私が頼まれて作った資料を渡したら、にっこり〴〵なんて笑ってきて」

「へえ」

「それでね、その笑顔がね。もう、すごく素敵で。私二重に驚いて、思わずよろけちゃったのよね」

「……え？ それって……その先の話って」

「ふふふ。そうそう」

母が笑い出す。

そうなのだ。私が聞いていた両親の馴れ初めとは「お母さんがお父さんの前で転んでしまつて、その際にお母さんのパンツが見えてしまったからその責任を負うべくお父さんが結婚を申し込んだ」というものだった。

「あの、パンツ事件にこんな裏話がねえ」

「ふふふ。そうなのよつ。本当に、妙な縁よね。あの時お父さんが笑わなかったら、訓子は今ごろこの世にはいないんだからねえ。私もパンツを見せたかいがあつたってことよねえ」

「……そんないい方も、なんだかアレだけど」

「ふふふ。縁なんてね、そんなもんなのよ。不思議なもんなのよね」

縁は不思議。

確かにそうだなあ……と思った。

「ねえ、訓子。縁は又の名をチャンスって言うんだから。訓子もがんばるのよ」

母はいつか誰かさんが言ったことと同じようにそう言つと、また「すっぱ辛い」と言いながらスープを飲んだ。

ランチのあと、母と一緒に買い物をして春用のブラウスを二枚買って帰った。

駅に着いて、歩く頃には雨は随分と小降りになっていた。

夕飯は私たちの胃の都合で、簡単に釜揚げのおうどんにすることにした。

母が通販で取り寄せたさぬきうどんがメインで、あと野菜のてんぷらをいくつか揚げることになっている。

「訓子、ナスが傷んでいたから買って来て」

六時過ぎになって母が言ってきた。

「了解。ナスだけでいいの？」

「うーん。あとは適当に」

「了解、了解」

そして私はランチの時の少し気合の入った格好から一転してシャツにジーンズにサンダルという姿でお買い物に出かけた。

「気持ちいい……」

雨はすっかりと上がっていて、おまけに閉店前の大売出しのように空は青空で一杯だ。

夕方だけれど、空は青。

それだけでも得した気持ちになる。

しかも、それに加えて浮ぶ白い雲は茜色になっている。

これもまた、なんともいえない美しさだ。

本当に六時過ぎているよねって、思わず腕時計で時間を確認した

りしてしまった。

あちこちのご近所さん宅からは夕飯の匂い。

お醤油と出汁の甘い煮物の匂いとか、カレーの匂い。

おもきつきりガーリックをがきいたステーキを焼く匂いに育。

いろんな人が、確かにここで暮しているっていう全部が、私をわあつと包んでいる。

突然、今のこの瞬間を切り取って世界中の人たちに見せたい気分には私になった。

これが私の一押し「日本の平和な風景」ですよ、って。
ねえ、とても愛しいと思いませんか、って。

そう思う気持ちとともに、自分の心の中から熱い願いのようなものが湧き上がってきた。

私も。

私もその風景を自分の手で作りたいって。

「訓子」

ふいに後ろから声を掛けられる。

振り向くと、少し後ろの方に背広姿の人が見えた。

立ち止まって、その人物がこっちに向かって歩いてくるのを待つ。

少し疲れた表情を残しながらも、その顔は私を見ると晴れやかなものに変わった。

私を見て、微笑んでくれる人がいる。

その事実は、衝撃的発見であり、衝撃的感動でもあり。

雨上がりの空のようでもあり、たまにしか笑わない男性社員の笑

顔でもあり。

「お帰り」

そう言つて、やっぱり誰も代わりになんてなりはしないその腕に自分の腕を絡ませる。

ふと、「あ、そうか」つて思った。

ここ最近の気持ちの冴えなさも、体調の冴えなさも、あそこでの私の生活がもう終わりになっていた合図なんだと。

実家での親との生活。

あまり今まで意識せずに暮してきたけれど。

でも、自分の認識とは別の気持ちと体で、もうあそこじゃないってことを私は知っていたのだ。

私のいる場所は、別にあるって。

そうと分かったら、実行あるのみ。

腕を組んだ正春を見上げる。

「ねえ正春。私近々家を出ようと思うけれど、正春はどうする？」
すると正春は、一瞬驚いた顔をしたあと、うーんと唸り「そうだなあ。七月の半ばなら休みが取れるよ」と言ってきた。

七月半ば。あと一ヶ月ちよい。

「そう。いいね。じゃ、それでいきましょう」
私が言う。

自分でも自覚できるくらいのにここに顔の私と違い、正春はとても真面目な顔つきになっている。

「今から一度家に戻って、それから訓子んちに行くから」

正春がそう言う。

そして「あのさ。なんていうか……野暮なこと聞くようだけれど、これって俺たちが結婚するって意味だね。訓子は俺と結婚してくれるんだよね」と聞いてきた。

そう、あからさまに言われるとちと恥ずかしいと思いつつここはしっかりと答えないとって思って「うん」と答えたあと、その返事じゃだめだと思い「はい」と言い直した。

正春と手を繋ぎなおして歩きながら「あ。……ナス」って思ったけれど、ナスよりもオイシイ話があるんでいいかって思った。

夏の少し手前。

雨上がりの夕方のご近所で。

私はナスではなく、結婚をお持ち帰りました。

五時の鐘が過ぎても

光り輝く思い出っというのを私は持っている。

遊ぶことしか頭になかった小学生の頃。

男の子も女の子もドロドロになるまで夢中で遊んだあの日々。

五時の鐘がなるのが一秒でも遅くなるように願っていたあの頃。

滅茶苦茶だったわりには、その音が魔法の時間が終わる合図だったことを、みんな良く分かっていた。

けれどその物分りのいい顔の下で、きっと誰もが思っていたのだろう。

五時の鐘が過ぎても。

まだまだ遊びたい。

ずっと、ずっと。

切ないくらいに、そう願っていた。

それくらい、私たちは仲が良かった。

遊ぶことにも真剣だった。

そしてその中に。

その光の中に、彼がいた。

すぐ前を走るのに。

追いつかない。

側にいるのに。

手を伸ばせない。

届かない。

呼んでいるのに。

振り向いてもらえない。

そんな彼が。

「あたたた」

ずきんずきんとする頭をそつと摩る。

そして、くしゃくしゃになっているねこっ毛のその髪を目を瞑りながら指ですいた。

ただでさえ櫛通りの悪い髪が、異常なまでにこんがらがって最後まで指が通らない。

おそらく爆発しているんだろうと思った。

ああと、ため息が漏れる。

おまけに、やけに体がだるかった。

いつもは痛まない場所の筋肉まで痛んでいた。

「うーん」

二日酔いって筋肉にまでくるのなかなか、なんて思いながら寝転がったままで伸びをする。

本当にたくさん飲んでしまった。

もしかしたら、まだ息もアルコール臭いかもしれない。

昨晩は、同期の退職の飲み会だった。

彼女は、——同期入社だった彼女はある恋をした。

けれどその恋の相手はどこからどう聞いてもよくない噂ばかりのヤツで。

みんなで「止めたほうがいい」って散々言っただのに、なのに彼女はずっぽりと嵌ってしまい。
そして。

再び、やりきれない思いが込みあげてきて堪らなくなってしまう。

だからって、彼女が会社をやめるのは絶対におかしいのに。
なのに、結局、私は止めることはできなかったのだ。
彼女が恋をすることも、そして会社を辞めることも。

—— 私の言葉なんて、何の役にも立たない。

しょせんはそうなのだ。
そんなの良く分かってるのに、でももしかしたらって思いを捨てることが私には出来なかったのだ。

誰かに何かを言われたからって、そしてその思いが報われること
はないと分かっていたって。
恋なんて。
人を想う気持なんて。

止められるものではないのに。

—— 私の言葉なんて何の力も持たない。

何度も何度もそう思いながらも。
それでも。

それでも自分の言葉で相手の気持を変えることが出来るかもしれ

ないって思っていたのだ。
とんでもない話だ。

自分が何様だと思っていたのだろう。

彼女と接したことで、その自分の傲慢さを痛いほど感じた。

彼女の痛さと、自分の痛さが重なって。

最後には自分の痛さだけで飲んでしまった。

情けない。

結局、彼女のためだなんて仮面を被りながら、自分のために飲んでしまったのだ。

再びずきんと頭に痛みが走った。

その痛みとともに、夕べ見た夢までも思い出してしまった。

懐かしい夢。

子どもの頃の。

公園から、みんなで全速力で走って家に帰る夢。

五時の鐘を聞きながら、走って、走って。

夢の中の私は「家に早く帰らないと」というよりも、「あの背中をどうにかして追い越したい」ってことばかりを思っていた。

もう少しなのに、どうしても追いつけない、追い越せない。

「ちよつと、待ってよ！ 待ちなさいよ！」

走りながらも叫ぶそんな私の声が届いているのか、届いてないのか。

ともかく答えは返ってこない。

私のことなんて振り向かずひたすらに走るその背中。

追い越せない背中。

返ってこない返事。

夢の中でも味わう、あの思い。

「う。ほんと。悔しい」

眠くて目が開かないので、そうつぶやきながらどうにも気になる髪を無理やりに梳かした。

何本か髪が抜けた気がした。

そのことに余計に腹が立って、そのまま髪をぐしゃぐしゃとしてしまった。

それにしても、どうしてこんなにぐしゃぐしゃなんだろう？

まるで髪を洗わずに眠ったみたいに。

そういえば、私は家に帰ってからお風呂に入ってたっけ？

どうだっけ？ どうしたっけ？ と思いながら、昨日の記憶をたどり出した。

そして、そうすることで段々と覚醒してくると、どうもお布団の中にいる自分の格好が妙なことに気がついた。

すーすーする。

あら？ と思い、眠い目を無理やり開けて、髪をいじる腕を見た。

―― 肌色。

「えっ？」

いつも眠るときに着ている古い長袖Ｔシャツの袖の部分が見えな

い。
がばつと起きる。

その途端、体にかかっていたお布団がずるりと腰のところまで下がった。

は、はだか。

「うそつ。何？ あ、ありえない！」
ありえない。

裸で眠るなんて、そんな習慣は私には。

「……うるさい」

「は？」

その声とともにいきなり目の前に腕が出てきたと思ったら、その腕によって私の体は再びベットに倒されてしまった。

「おはよう」

並んだ目線で、その腕の主が私に言う。

「おはよう」

目を白黒させながらも、私も挨拶する。

「じゃ、おやすみ」

その腕の主の一重の目が、再び眠りに落ちるために閉じられようとしている。

「ちよつと、待ってよ。待ちなさいよ、航^{わたる}！」

その腕の主——^{こづがみ}鴻上航に私は何度も何度も言いなれた例の台詞を言う。

「……はい」

航は本当に眠そうで、声だけでようやくそう答えた。

答えたのだ。

「あのさ」

一瞬夢の中の航の答えなさと、今の航の答えが重なって、そう航が答えただけで私は満足してしまった。

が、しかし。

そんなんで満足している場合じゃない。

この状態は、明らかに、ナニかがあったってことを示しているんだろうし。

でも、そのことをなんて聞けばいいんだろう？

「あのさ。もしかして、やっちゃった？」

まるで小さい頃にいたずらをしたときの問いみたいな言い方で私は聞いてしまった。

「やった」

するとこれまた航から、私と同じようなニュアンスで言葉が帰ってきた。

——「やった」

そうか。やってしまいましたか。

うーんと思つて再び寝てしまった航の顔を見る。

やってしまったものは、仕方が無い。

やってしまったものは。

なんて言えるほど、私は達観してはいない！

どうしよう。

やっちゃったよ、こんちくしょう。

しかも相手は航！

おまけにここは。

ぐるりと部屋の中を見て泣きたくなった。

ここは、航クンの部屋。

まさに自分の家の目と鼻の先でこんな事態になってしまうとは！

枕もとにあった目覚し時計（これ、大昔の通信テストの景品だし）で時間を確認すると針は七時をさしていた。

これは、朝の、だよな。

私。

外泊しちゃっているんじゃない！

もう一度がばつと起きて、航の部屋のカーテンを少しだけあけてその隙間から外を見た。

すると、まん前にある私の家が目に入って。

そしてそのまま視線を下におろすと。

最悪なことに、うちのお母さんが朝から家の前を掃除している様子が見えた。

眩暈がした。

通りを掃きながら、母はきよろきよろとしていた。

「探してるよ」

母はきつと私がひよこひよこ帰ってくるのを待っているのだろう。

ああ、お母さん、あなたの娘は今ここに。

気分が悪くなってきた。

そして、気が付く。

私にもああして家族がいるように、当然航にも家族がいるわけで。

ああ、ますます気分が悪くなってくる。

「わ、航う」

そこに落ちていた航のＴシャツをがぶりと被り、ゆさゆさと航を揺り起こす。

「ん。なに？」

「あのさ。航の家の人は」

「ばあちゃんち」

「ああ、そうか」

そういえば、そんなことを母も言っていた。

ってことは、この状況を航の家の人に知られることはないわけで。

そう思うと気持ちが多少は楽になった。

多少は。

多少はね。

ともかく、私は家に帰らないと。

でも、どうやって？

こんなに密なご近所関係の仲で（しかもマイマザーは、ただいま目の前の道を掃除中）、私は一体どうやってこの家から出て行ったらいいのでしょうか？

また、航は静かになっていた。

眠ってしまったのかもしれない。

航は、いいわよ、と思う。

何があつたにせよ、ここは自分の家なんだから。

ここから抜け出す苦労なんて無いわけだし。

だから、こんな事態になっても、どうってことないんだと思う。そう。

航には、どうってことないオハナシ。

つまりが、問題は私。

この事態はともかく置いておいて（つまり、なんでこんなことになっちゃたかってこと）、どうやって外泊のアリバイを作るか。

そして、ご近所のみなさんに見つからないで、どうやってこの家から外に出るか。

それが、大問題だと思った。

ともかくそれが。

一番の大問題なのだと。

—— そう思うおうとした。

そう思わないと、たとえばこんなしょうもないシチュエーションなのにどこかで自分の気持の中の何かが報われたような気になってしまっていた私がいるってことと向き合えないといけないし、この状況に慌てながらも、どうやって家に帰るかを考えながらも、ある一部分では嬉しいとさえ感じていた私がいるってことも認めなきゃならないし。

がつくりきてしまう。

思い知らされてしまう。

社会人の顔をして、大人ぶった顔をしているくせに。

人に対しては、その恋の行方について口出しまでしているっていうのに。

結局は、まだまだ航を好きなままにいる、そんな女の子のままな私だから。

五時の鐘が過ぎても。

魔法の時間は過ぎても。

航に恋する気持だけは、過ぎ去ってはいかない。

暢気に眠る航の側で、航のＴシャツを着ながら。
こんな自分が情けなくて。

—— 情けなくて。

あくびをする真似をしながら。
少しだけ、泣いた。

子どもの時間が過ぎても（前書き）

前作「5時の鐘が過ぎても」の航サイドの物語です。
楽しんでいただけたら嬉しいです。

子どもの時間が過ぎても

「うわあ、航ちゃんさん！」

聞き覚えのある声に呼ばれて振り向くと、美紗緒が真っ赤な顔をしながらにこにこ改札を出て来た。

「よお」

金曜の夜だけあって、この改札出る人たちも明らかに飲酒率が多いようではあったけれど、まさかよく知る人物までがそこに属しているとは思わなかった。

美紗緒はにこにこしながら、俺の腕を持ち上げるとそのまま手を繋いできた。

美紗緒の指に嵌った指輪がひんやりとあたる。

「酔っ払い娘」

繋いできた手を離さずに歩き出す。

「へへ。旦那、送別会ですよ、送別会」

そう言々と美紗緒は、トトロの歌を口ずさみだした。

くるくるとした美紗緒の髪が、歩くたびに肩で揺れて、トトロを歌う口の中に入りそうになっていた。

「ほれほれ、髪を食うなって」

空いている手で、美紗緒の髪の毛を後ろにやった。

「へへへ。航ちゃんさん、ありがとーまき」

『がとーまき』だって、『ごとーまきなのにい』、なんて美紗緒が一人でケタケタと笑い出す。

「ご機嫌さん？」

美紗緒に聞く。

「不機嫌くん」

そう言いながら一瞬眉間に皺を寄せたと思ったら、また美紗緒はケタケタと笑い出した。

「あれだな。その『送別会』とやらで、なんかあったんだな」

酔っ払いの美紗緒にそう言う。

「うん、そうなのよお。もお、同期の子が退社をするんだけど、その理由がね。もう、やな男が理由でさあ。あんなヤツは止めて止めたんだけどさ」

そう言うとき美紗緒は手だけでなく腕までを俺の腕に絡ませてきた。

「……ばかだあ。恋なんて」

スーツ越しにも美紗緒の体温がじんわりと伝わってくる。

その温かさが、とても意外だと感じてしまった。

美紗緒とは、家が近所で、それこそ鼻水をたらした子どもの頃からの付き合いで。

当然、手だって繋いだこともある。

まあ、子どもの頃だけけれど。

だから、全く知らないって間柄ではないんだけど、むしろ親しい間柄なんだろうけれど、こうして相手の体温を感じるほどは近くもなかったんだと改めて知ったというか。

へえ、と思った。

そして、ふーん、と。

「美紗緒は好きなヤツいないの？」

酔っているせいかなかなり素直な美紗緒に、そう聞いてみた。

「好きなヤツか」

うーんと美紗緒が唸りだす。

「あ、あのコ、あのコ。ほら、児童館でよく会った村本栄一郎くん」

村？

「ほら、卓球が上手くてさ。航、負けてたじゃない」

そう言つと美紗緒はくすくすと笑い出した。

「航、ここらへんでは一番強いからつてさ、みんなを連れて『道場破りだ！』つて言つては隣の児童館まで行つたの覚えていない？
そこでさ、村本くんつていうすぐく卓球の強い男の子がいてさ、
航つてばコテンパにやられたじゃない？ あれ、傑作だつたなあ」
美紗緒の話に、そういえばそんなことがあつたなあ、と思い出す。

そうそう、たしか村本つていう名前だつた。

「おまえ、よく覚えてるね。しかもフルネームで
へへへと美紗緒が笑う。

「うん。児童館つて入るときに名前を書くでしょ？ 航たちなんて
そのまますぐに卓球場に行つたけれど、私とか知紗江ちゃんなんか
は入り口でうろつろつてさ。あのコが自分の名前をなんて書くか
チェックしてたんだよね」

へえ。

「『女』してたじゃん」

確か小学四、五年の頃だつたと思う。

男たち（俺を含め）は卓球に夢中で、女たちはそのプレイヤーに
夢中だつたつてことか？

「なんか、裏切られた気持だなあ」

昔のことといい、美紗緒の体温といい。

「待てよ。美紗緒は、今もその村本ってヤツが好きってことか？」

そう聞きながら、酷く自分がショックなのを俺は感じていた。

つまり、大昔の児童館で何回か会っただけのヤツを未だに好きだなんて言うことと、あの頃は知紗江も含めてここの辺の女の子はみんな、俺たちの味方だっと思っていたことがまるつきり一方的な思いだっってことに気が付いたことで。

「うーん、好きっていうか、憧れていたっていうか、羨ましいって思ったっていうか。そーいう記憶ってなかなか抜けないんだよね」
うん、村本くんはカッコよかった、村本くんになりたかったなあ
と美紗緒は大きく頷きだした。

そんな美紗緒の様子を見て、大人げないとは思いつつ。

俺は、面白くなかった。

「航は？ 航ちゃんさんこそ、いないの？ 彼女」

美紗緒がふってくる。

「彼女ねえ。いないねえ」

仕事の忙しさのせいだけじゃなくて、このところそういえば、恋をしていなかったなあ、と思う。

「彼女いないの？ へえ、航が？ 彼女無し？ まあ、珍しい。じやあ、私になつてあげるよ」

そう言う和美紗緒は立ち止まって、いきなり両手で俺の顔をブロツクして触れる程度のキスをしてきた。

ぎよつとする、というのはこんな状態だろう。

「あのなあ」

かすかなキスだったけれど、美紗緒のキスは甘かった。

きつと電車の中で飴でも食っていたにちがいない。

「えっ？ なに？ もう一回？」

きょんとした顔をして、美紗緒がもう一度キスをしてきた。決して深いキスではないけれど、前よりは少し長めのキスを。

今度は、ぎょつとどこの騒ぎじゃなかった。

胸にドスンと鉄の玉を当てられたような、そんな衝撃があった。

あの美紗緒とのキスで。

あの、美紗緒との。

やられた、と思った。

てつきり自分の後ろにいるとばかり思っていた女の子に、追いつかれていたのだと思った。

自分の後ろにいるっていうのは、子どもの頃この辺りで男女含めて俺に追いつけそうな足の速さのヤツは、美紗緒だけで。

まあ、その美紗緒をしても決して俺を抜かすことは出来なかったのだけだ。

出来なかった、というか、俺がさせなかったのだが。

少しでも気を抜くと美紗緒に追いつかれると思っていた俺は、走るときは容赦なく全速力で走っていたから。

美紗緒には追いつかれなかった。

肩を並べたくなかった。

いつも自分が優位に立ちたかったのだ。

子どもながらに、そこだけは死守しないと自分は美紗緒に負けるって分かっていたんだと思う。

子ども同士の力争いなんて、今になってみるととてもばかげている話だけれど、その中にも真実はあって。

そして、自覚もないままその真実は、今の今まで俺の中で眠っていたのだ。

唇を離した美紗緒が俺の顔をみてにつこりと笑った。

—— だめだ。こいつは、完全に酔っている。

その笑顔の素直さに、悔しい気がしてきた。

酔っていない美紗緒でも、俺にキスをしてくるだろうか？

彼女になるなんて言うだろうか？

それがとても気になった。

「美紗緒」

ん？ とした顔をした美紗緒の頬に手を置き、こっちからもキスをした。

美紗緒がしてきた、唇だけ触れるようなキスじゃない。

美紗緒を飲み込んでしまうような、そんなキスだ。

「今日、泊まれよ」

美紗緒の耳を噛みながらそう言う。

今日、明日と親は伊豆に行っている。

他の兄弟は結婚して、既に家を出ていた。

つまりが、これはもうなるべくしてなるってことなんだと思う。

そう思った瞬間、俺の目の前に、ずっと一本のレールが見えた。

そしてそのレールの前に立つのは、俺一人ではない。

—— 一人ではない。

子どもの時間が過ぎた今だからこそ、俺はこいつと一緒にいたい
と思ったのだ。

美紗緒に隣にいて欲しいと。

そう思うと、わくわくとした気持ちになった。

美紗緒と一緒にならきつと楽しいって。

—— そして。

「うそっ！ なに？ ありえない！！」

やっぱり、の美紗緒の言葉に、頭が痛くなる。

でも、まあ。

それが男と女の醍醐味ってやつでしょう。

つまり、俺たちは子どもじゃなくて、もうオトナだったこと。

子どもじゃできなかった楽しみを、共有することができるってこ
と。

けれど、ともかく今は眠い。

もう少しだけ美紗緒を抱いたまま眠って、そしてその後に「それ
から」を考えよう。

おもいきり面倒で、やっかいなご近所の女の子との恋愛を。

もう少しだけ美紗緒を抱きしめて。

—— 美紗緒の体温を感じて。

インスタントお隣さん その1（前書き）

「インスタントお隣さん」は、全四話です。

インスタントお隣さん その1

「結婚することになったんだ」

長年の想い人であるお隣の秀一君が、そう照れたように私に報告する姿を見て、生まれて初めて「目の前が真つ暗になる」という言葉の意味を体験学習した、清水美野しみずみの十九歳の秋でございました。

「うげっ。美野か。屋外版座敷わらしかと思った。で、こんなところで何を」

お子さまが家に帰ったあとの夕方の公園で、ベンチに体育座りで一人反省会開催中に、最近彼女が出来たとかで浮かれポンキチの高校生の秀二が、えらく甘い甘い香りさせながら寄ってきた。

「座敷わらしって失礼な。ボブは流行りなんだって。で、おいこらっ。デートばかりしてないで、勉強に励めよ。若造」

そう不機嫌な声で言う、「ボブは流行りなんて、よく言うよ。俺が知る限り美野はずっとその髪型じゃん。で、美野ってさ。もしかして。兄貴の事をあきらめてなかったとか」と確認するかのような言葉が返ってきた。

「美野さあ、確か十年くらい前に振られ済みだよな」

「振られ済みなんて。済み、だなんて、なんていけずなっ！ 言っておくけどね、私はね、振られてなんかいやしないんだからね。秀一君からは『美野とはずっと仲良しでいようね』って言われただけなんだからねっ！」

「……世間ではね、それを振られたというのですよ。美野サン」
しょうがねえなあ、と秀二は言いながら勝手にベンチの隣に座ると、まあ俺も結婚までいくとは思わなかったけどさ、と言った。

「ちよっと。なあんか、聞き捨てならない台詞だわね。あんた、秀

「一君の結婚に絡んでいるわけ?」、と軽い調子で訊いたら、秀二は「えっ」と言葉に詰まった。

「……あ、そうか。まあ、そうだよな。そこまで聞いてないか。まあ、いいや、いずれわかるだろうからさ。兄貴の相手って、俺の友だちの姉ちゃんなんだ」

縁とは不思議なりと、あははは、なんて笑う秀二の顔の肉を思いつきり引つ張ったまま、「おまえは、また余計な世話を焼きあがつて!」と私は怒鳴った。

私の迫力に恐れをなした秀二は、その友だちの姉ちゃんの働くお店へ明日連れていってくれると言った。

秀二が「お店」なんて言葉を使うから、もしかして席料やお酒がとても高い「お店」なのかと構えたら、なんてことはない、駅ビルにある文房具店が「お店」だということだった。

秀二としつかりと時間の約束をしたあと、私は秀二の顔の皮を引っ張るのをやめ、最後に思いつきり強くデコピンをした。

問題の当日。

私は大学の帰りにそのビルに寄ることにした。

秀二はというと、生意気にも学生服を私服に着替えて、駅の改札口に立っていた。

「ご苦労」と私が言うと、「ねえ、美野。ほんとに行くの?」と秀二は妙に弱気なことを言ってきた。

「勿の論太郎」と私が答えると、秀二は「ああ、どうか見つかりませんよう」とぶつくさと言い、がくりと頭を垂れた。

私と秀二は、文具店の前にある書店で、秀一君の彼女を見ることにした。

彼女は秀二の顔を知っているそうなので（まあ、そりゃそうだろうさ）、気づかれたくないという秀二の希望に沿ったものだった。

まあ、それくらいはいいだろうと、私は雑誌を立ち読みするふり

をしながら、視線を文具店においた。

彼女はすぐにわかった。

というのも、秀一君と秀二と彼女さんで撮った携帯の写真を見せてもらっていたからだ。

彼女は、まあ、すごい美人でもなく、かといってその逆でもなく、所謂フツの女性だった。

文具店の制服であろうエプロンと白シャツが、彼女にはとても似合っていた。

清潔な感じがした。

そうか、秀一君はあんな女性が好きなんだ、と持っている雑誌の上から目だけ出してまじまじと見た。

そして一度見ると、目が離せなくなった。

彼女は、確かに感じはいい。

けど、だからって、一体彼女の何が。

彼女のどこが、私よりもいいと秀一君は思ったのだろう。

そして私には、一体何が足りないのか。

そう考えると、胸の中にもやまとした黒いもの溜まってきた。

「うげ。やばい」

そんな秀二の情けない声が聞こえてきたかと思ったら、「おまえ、何やってんの」と呆れたような声が入ってきた。

その声の主であろう、学生服を着たえらく背の高い少年が（青年か？）、秀二の頭にでかい手を載せていた。

「いや、その。雑誌を」

もともと弱そうな返事をする秀二を守るべく、「ちょっと、あなっ！」と私はその学生服に声をかけた。

学生服は、ゆっくりと私を見下ろしてきた。

……。偉そうなんですけど。

学生服は目を細めて私を見ると、「なんでしょう」なんてゆっくりとした声で返事してきた。

「そ、その手を、は、離して！ お、お、弟に乱暴しないでよっ！」

気合は十分なわりには、学生服相手に声が裏返ってしまったのが、
みじめ。

「弟？」

怪訝そうな顔で、学生服が秀二を見下ろす。

バカな秀二は手で「ちがうちがう」のジェスチャーをしている。

また、こんな時に正直に答えてどうするっていうの。

私はあんたを助けるために、こう言ってるんでしようが。

「……姉がいるなんて初耳なんだけど」

学生服が、秀二に言う。

「な、なんであなたにそんなことを報告しなくちゃいけないのよ」

学生服に捕らわれている秀二を、ぐいっと引っ張り助け出す。

そのまま私の後ろに秀二を隠して、もう一度気合を入れてぐつと
学生服を睨む。

「だって、義理の兄弟になるわけだし」

義理の兄弟？

「なあ、この人って頭大丈夫？」なんて学生服が私の背後の秀二に
訊いてきたんで、私はびつくして秀二を見ると、秀二の奴は手で×
マークなぞを作っていた。

一体なんなの？

「あんた、誰さ？」

学生服が私に訊いて来た。

あんた、ですって？ な、な、生意気な。

「あんたこそ、誰よっ」

尖った声で私が言うのと、秀二が「ひえ〜」と小さな声を上げた。

「なんであんたにそんなことを言う必要が」と学生服が言うので、
私も負けずに「こっちこそ、あんたなんか自分の名前を言う必要
なんて感じません！」と言い放ち、秀二の腕を掴んで、さっさとそ
の場から立ち去った。

「……美野」

「なによっ」

頭から湯気を出しながら歩く私に、秀二が声をかけてきた。

「美野、幸が薄いかも」

そうしみじみと言う幼なじみに、「おまえのせいだな!」と言ったあと、思いきり強く奴の足を踏んずけた。

秀一君の結婚式は同じ年のクリスマスイブに行われ、年明けには新婚旅行のお土産を持って秀一君とお嫁さんはうちにまで挨拶に来てくれた。

秀一君とお嫁さんは、秀一君の会社の社宅に入るそうだ。

ああ、もう、その姿さえ見ることができないのかと思うと、なんとも言えない気持ちになった。

諸悪の根源である秀二には、会うたびに足を踏むことでしか仕返しはできず、しかも毎回大人しく足を踏まれたままにいる秀二の姿に、段々と仕返し of 意欲もなくなり。

つまりが、失恋を、失恋として受け入れる心が私にもようやくできたのだった。

さて。

生物の芽生えも瑞々しい、春が来た。

花粉症の私は、平常よりも水々しい鼻の中をフローすべく、マスクを着用していた。

そして、秀二曰く「座敷わらし」な髪型も、ぱつさりとショートにしてみたり。

そんな姿で、母親のいいつけで家の前を箒で掃はいているときに、一台の車がやってきた。

なんと、運転席には秀一君の姿が。

おおお、と箒の柄を掴んだまま驚いていると、秀一君は一瞬私が誰だかわからないような顔をしたあと、あっと、気がついたような表情になり、フロントガラスの向こうから手を振ってきてくれた。

マスクの中でにんまりとしてしまう口。

花粉症で潤みがちな目には、目薬よりも効くそのお姿だ。

すると、停まった車からは秀一君ともう一人。背の高い男の人が降りてきた。

家の中からは、秀二とおばさんが出てきた。

おばさんは私に気がつくとはほ笑みかけてくれたけど、秀二は私の顔を見るなり駆けよってきて小さな声で「おまえ、家に入れ」と言ってきた。

「髪も切ったし、マスクもしているし。今ならまだあいつも、美野のことを認識できてないかもしれないし」

そう早口で秀二が言う。

「あらあんた。秀一君のことをあいつなんて言っちゃダメでしょ。それに、もう分かったみたいよん」

「兄貴のことじゃないって。いいから自分の家に入れよ」

「家に？ なあんでよお」

せっかく秀一君に会えたっていうのに？

挨拶もしないで、なんで私が家に。

ぶーぶーと秀二に文句を言っていると、「秀二、美野」と呼ぶ声が聞こえた。

秀二がさつと私を隠すように、その声の前に立ちはだかった。
ん？ 既視感。

何だろう、と秀二の体の横から顔を出すと、にこにこしている秀一君とどつかで見たような偉そうな男が立っていた。

「美野。久しぶり。元気だった？ あのね、紹介するね。彼はね、僕の奥さんの弟で磯田^{いそだ}理一^{りいち}君っていうんだ。今日から空いたままになっている僕の部屋を使ってもらうことになってね」

……僕の奥さんの弟。

秀二の膝をカックンとさせて、そのまま振り向かせる。

「ねえ、秀二くん。もしや、彼はあの時の」学生服と続けたいところを時間の関係で省略した。

秀二は観念したように、こくこくと頷く。

「美野、気に入られたみたい。がんばって逃げてね」

「は？ 気に入られた？ で、逃げてって」

「美野ちゃん。これから理一君もお隣さんになるから。秀二同様に仲良くしてね」

おばさんは、にこにここと「よろしくね」と言った。

お、お隣さん？

このクソ生意気な奴が？

それに、おばさんってば。

か弱い女子大生とこんな凶暴な高校生とが、一体なにをどうしたら「よろしく」できるのかと。

秀一君とも秀二とも別の種族のような磯田 理一が、「ということで」と右手を出してきた。

秀二の体から顔だけだった状態で、その手をじつと見る。

私が磯田 理一と握手するのを、秀一君もおばさんも期待しているがをひしひしと伝わってきた。

意を決して、右手をそつと出す。

その瞬間、まるでネズミ捕りのようにバチンと勢いよく私の手が握られた。

「よろしく、美野」

小さいながらも、しっかりと呼び捨ててくるこのインスタントお隣さんの声に、いやあな予感がした。

インスタントお隣さん その2

「おい、みの虫」

そう私のことを呼ぶのは、私のインスタントお隣さんの磯田^{いそだ}理^り一^{いち}、高校三年生だ。

この青年（少年？）磯田 理一のお姉さんと、私の長年の想い人であつたお隣の秀一君が結婚して（つまり私は失恋）、二人は秀一君の会社の社宅に住むことになったので、それまでお姉さんと二人暮らしだつた磯田 理一は住んでいたアパートの更新をせずに、秀一君の家の秀一君の部屋に住むことになったわけ。
ちなみに、秀一君の弟の秀二と理一は同級生だ。

秀一君の結婚もこの二人の関係が発端らしく、未練がましいと言われるのを承知で言えばと、つまりがこの二人が同級生でなければ――。

「朝から変な顔」

理一が、ぷつ、と笑つてそのまま横を通り過ぎた。

「あ、あなたね、それって、年上に対する態度じゃないんじゃないの？」

早足で歩き、理一の横に並ぶと私はそう言つた。

「そつちこそ、その顔。慣れない暮らしに戸惑う年下の少年に向ける顔じゃないんじゃないの？」

理一はそう反撃してきた。

全く、あーいえばこーいう。

秀二だつて、そんな生意気なこととは言つてきたことがないつていうのに。

「だつて、あなたの顔見ると、不愉快なんだもの」

自分の失恋を、理一の顔を見るたびに思い出しちゃうんだから、しょうがない。

「それ、俺の責任？」

全とお見通しのようなことを理一が言う。

おまえの失恋は、俺のせいかい？ と。

「あたりまえ」

ぶん、と怒ってそう言い放つ。

「へえ。俺の姉さんが、秀一さんに会ったのって、一年前なんだよな。で、あんたはさ、秀一さんの側に随分長いこといたんだろ？
みの虫」

反論してみるよ、ってな顔で理一が見下ろしてくる。

「ほんと、憎たらしい」

人間って、本当のことを言われると一番腹が立つのはなんででしょう。

「ま、せいぜい、その非生産的思慕を大事にしててくださいよ」

そう言う理一は、「学校、遅れるから」と言って走りだした。

「清水さあん、スマイル」

朝一のシフトで入ったカフェで、店長から笑顔指導が入った。

「す、すみません」

無理やり口角を上げて、にへらと店長に向って笑う私。

大学に入ってから始めたカフェでのバイト。

私の仕事は、接客だ。

注文を聞き、その品を席まで運ぶ。

チェーン店で大勢の人が働いているため、お休みもシフトもほぼ希望は通り、人間関係も良好で、理想的な職場だといえた。

お陰で、親からはおこずかいを貰わずに済んでいるし。

流石に食費を入れるまでは稼いでいないので、その代りといっては何だけどもたまにお菓子を買って帰ったり、で、ちよこと貯金もしてみたり。（私はこう見えても堅実なのだ）

そして、目下の貯金の目標は、秀二の大学合格祝い。

具体的なリクエストの品は聞いていないけど（そもそも、まだ試験の時期でもない）、前々から「合格したらなんか買って」と言われているのだ。

生意気にも彼女がいる秀二だけど、それでも私にとっては弟みたいに可愛い奴なのだ。

そういえば、と思う。

弟みたいに可愛いとは到底思えないけれど、理一にも合格祝いをあげたほうがいいのだろうか。

秀二と理一は同じ家にいるわけで……。

「店長、あのお」

仕方がないなあと思いつつ、バイトに入る時間を少し増やした。

泥のようになった体を引きずって帰る。

結局、朝一のバイトが済んだ後、大学に行き講義を聞いた後、再びカフェの夜のシフトに入り。

お客さまが多いのは結構な話だけれど、もうふくらはぎはぱんぱんに張っていた。

あれを、買おうと思った。よく雑誌に出ている、寝ている間に履いているだけでむくみがとれるとかいう靴下を。

そんなことを考えて歩いていたら私の背に、「もしかして、みの虫？」と声を掛けてくる人物がいた。

くるりと振り向き、「あのね。その呼び名、嫌なんですけど」と声の主である理一に言う。

「今帰り？」

暗闇の中でも、理一が眉をひそめるのがわかった。

「あんたこそ、今帰り？ 未成年」

そうやって私は前を向いて歩きだした。

「俺は、塾だし。で、あんたは何さ」

そう言うとき理一は私のあとにぴたりとついて歩きだした。

あんたは何さって、あんたこそ何なのさ。

「バイト」

とても疲れた体に、ぶつきらばうな理一の言葉は思いのほかきつく感じられ、涙が出てきた。

別に、お疲れさん、なんて言ってほしいとは思わない。

ただ理一のその物の言い方は、見るからに疲れているだろうという人に対して、あまりにもぶつきらばうで、冷たいように私には感じられたのだ。

「バイトって朝か昼だけって聞いたけど」

秀二か、秀二だな。人の事一々話すなって言うの。

「そんな疲れた顔して、頑張りすぎじゃない？」

そうそう、疲れているの。だから、ほつといてよ。

「こんな遅くに。ふらふらしながら歩いてて。危ないって思わないわけ？」

はあ？ おまえは、私の親か？ 大きな御世話だ。ふらふらだつて？ そりやそうだろう、立ちっぱなしだったんだから。

「おい、みの虫」

理一が歩みを速めて、私の前へと回り込んだ。

暗闇の中、目の前に大きな黒い壁が立ちはだかる。

「……なに、泣いてんのさ」

理一の声がやけに小さい。

「バカ、ボケ」

あんたは、見て見ぬふりって言葉を知らないな。

ああ、涙が出たら、鼻水も出てきた。

がさごそとカバンに手をつ込み、ポケットティッシュを取り出し、びんと鼻をかんだ。

「何か欲しいものがあるでしょ」

私の問いに、理一が怪訝そうな顔をした。

「大学の合格祝い。秀二にもねだられているから。だから、あんたも何かあるでしょ、欲しいもの」

理一はふいをつかれたような表情をして、暫く黙ったあと、「まだ試験も受けてないのに」と言った。

その声は、初めて理一を年下なんだと思わせる、ちょっと情けないような頼りない声で。

ああ、そっか、この子はまだ高校生なんだもんだと私も初めて自覚できるようなものだった。

そういえば、理一には両親はいないのだ。

彼には、家族といえばお嫁に行ったお姉さんしかない。

子どもでいられる時間が、私や秀二に比べるとぐっと少なかったんだろうなと気がついた。

秀二同様に仲良くしてね、って言ったおばさんの言葉が今更ながらに染みてきた。

「あのね、合格してから『あれ買つて、これ買つて』って言われても対応できないから聞いているんですよ」

こっちにも都合つてもんがあるのよ、と理一に告げる。

「……そーいうことか」

理一が苦々しい顔をした。

「欲しいもん、ある。でも金はかかんない」

だから、バイト増やさなくてもいいと理一が言った。

「お金、かからないもの？」

「うん。だから」

だから、の先を理一は言わない。

「あんた、気を使っているんですよ。そんなのいいのよ、あんただ子どもなんだから、甘えられる人には甘え——」

「デートして」

理一の言葉に、「はあ？」と返した。

「デート。美野とデートがしたい」

私と、デート？

「まあ、そんなにいいならいいけど。あれ、理一って彼女いなかったっけ？」

秀二にいたるんだから、こいつにだっていてもおかしくはない。

「彼女はいない」

「ふーん。淋しい青春ねえ」

「美野だけには言われたくなかった」

非生産的思慕者のくせして、と理一が言う。

「私？ まあ、確かに彼はいなかったけど。でもさ、好きだったから、秀一君のこと。そういった意味では淋しいってことは感じなかったな」

秀一君が、つまり好きな人がいなければ、少しは淋しかったかもしれないけど。

いや、うーんと、かな？

「……そーか。そんなに好きだったんだ」

理一がしみじみと言う。あんまり、そこ、しみじみされるとかえってみじめになる気がします。

「好きな子いないの？ この子のメールアドレスを知りたいなあとかいう」

「なんで、メールアドレス」

「だって、高校生の恋って、携帯が絡んでそうじゃない？」

「それ、偏見じゃない？」

「そうかな？ だってテレビで見たよ。朝起きたらメールして、ご飯食べてもメールして、眠るときにもメールして、って一日何回もしちゃうんでしょ？」

「はあ、それ面倒くさそ。メールするよりも、直接会ったほうがいいのに」

「まあ、みなさん直接会えない事情とかあるんじゃないの？ それにさ、実際そうだった関係になると、日に何度のメールも面倒じゃなくなるのかもよ。会えない時間が、愛を育てるとか何とか。うちのお母さんがよくカラオケで歌ってるよ」

「なんか、厄介だな」

「まあ、でも、そーいうもんなんじゃないの？」

そう言いながら、秀一君のことを思い出した。元気かな、秀一君。

「会えないかあ。そうかもね、そういう時期にもなるかもね」

どんどん勉強で忙しくなるしなあ、と理一が言う。

そうこう話しているうちに、お互いの家の前まで来た。

なんだかんだ言っ、私は理一にボディガードをしてもらった感じだ。

「秀二って、美野のアドレスを知っているの？」

門扉に手をかけながら、理一が訊いて来た。

「ああ、秀二ね。多分、うん、知っているよ」

「訊いてもいい？」

「何を」

「みの虫のアドレス」

「ああ、はい。どうぞ」

別に私のアドレスなんて、シークレットでもなんでもない。

「朝晩メールするから」

「ん？」

「ついことで。バイト、夜のシフトはやめなよ。おやすみ」

「あ、はい。おやすみなさい」

私もそう挨拶をして、玄関の扉を開いた。

はて。

今の会話って、なんか妙じゃなかったでしょうか。

インスタントお隣さん その3

「おい、みの虫。帰るぞ」

そう私のことを呼ぶのは、私のインスタントお隣さんの磯田^{いそだ}理^り一^{いち}、高校三年生。

その高校生男子と私は、ひょんなことから毎週月曜日の夜に、ともに家路につくはめになっている。

バイトのシフトをもとに戻したいと店長に伝えたところ、他の曜日はともかく月曜は人手が足りないのではらくこのままをお願いしたと言われた。

そのことを、どこのどういう情報機関を通じて知ったのか（秀二だ。秀二なんだろうけど）、お隣の理一は丁度自分の塾が終わる時間と同じだからと上層部に働きかけ（秀二のおばさんだ）、結果上層部同士の話し合いが行われ（おばさんと私の母だな）、とある決定事項が私に下りてきた。

『清水美野（大学二年生）は、バイトのシフトが夜の月曜に限り、大学受験の為に塾に通う磯田理一（高校三年生）と共に帰宅するべし』と。

横を歩く制服姿の理一を眺める。

しかし、考えてみれば私の方がお姉さんなのだから（二つほど）、寧ろ私が理一と「帰ってあげている」ってことなんじゃないかって気もした。

二年の違いといえば、小さくはない。

私が小学生になった時に、秀二はまだ字もろくにかけない幼稚園児だったし（秀二と理一は同じ年だ）、私が颯爽とセーラー服を着こなしている時でも、秀二はランドセル背負って泥だらけで走りま

わっていたし。

秀二と理一はかなり違うキャラクターとはいえ、人の育ちにそう変わりはないと思うから。

そう思ってみると、このクソ生意気な理一のこと、ちょっとだけ可愛いと思えるから人の脳ってすばらしいと思う。

「あれ、買ったの？」

理一が訊いてくる。

「あれ？」 はて？

「…… 散々言っていたよな。足の疲れを取る靴下だとか、なんとか」

「ああ、あれね。それがさ、ちょっと聞いてよ」

横にいる理一の制服の袖を引っ張りそう言う。

「すっごく高いんだけど。あれ」

評判になっているその品をお店に見に行ったのはいいけれど、あまりの高さに目が飛び出そうになったのだ。

「だからやめた。やめた、というかもう少し様子を見るつもり。夜のシフトにも段々慣れてきたしね。それよりもさ、聞いてよ。私、すっごくいいもん見つけたのよ」

再び理一の袖を引っ張る。

「スニーカーなんだけど、普通のものよりも筋力アップできるってやつ。私、それを買おうと思って」

くびれのある脹脛とかいいと思わない？ と理一に言う。

「この間、お店で説明を聞いたの。そしたらね、最初は慣れないだろうから履く時間を短めにして、段々と慣らしてくださいって。なんか、本格的なエクササイズっぽくない？」

その靴を履き、足が細くなって引きしまった己の姿を想像し、ちよつとうつとりとする。

「…… それ。逆の事じゃね？」

「ん？ 逆のこと？」

「みの虫は、足が疲れるんだろ？ だからその高い靴下を買おうとした」

「やめたけど」

「やめたけどって。そんなやめるほど、高いもんかなあ」

「ほっ。知らないくせに」

「はあ？ 知っているって」

そう言うとき理一は正確にその値段を言った。

「もしや、理一も足が疲れているの？」

理一も買おうとお店に行っただろうか、と気になった。

「それで、その靴だけだ」

けれど理一は、私の言葉には答えずに靴の話をしだした。

ちよつとム力つく。

「店の人が『最初は慣れないだろうから履く時間を短めに』ってことと、筋力アップっていうみの虫の言葉から考えるに、それは履くと疲れる靴なんじゃね？」

疲れるっていうか、筋肉付けるから鍛えるっていうか、と理一が続けた。

「ただでさえ足が疲れるみの虫が、そんな靴を履いて大丈夫なわけ？」

理一の言葉に、なるほど私も思った。

「でもさ、履いているうちに慣れるんじゃない？ ……多分。でも、

うん、今度お店で、聞いてみるよ。あとね、足の疲れだけど、青竹を踏みだしたんだ」

「青竹？」

「うん、知らない？ 青竹。さお竹じゃないからね、あのトラックで移動しながら売っているやつじゃないからね。足でさ、こう踏み踏みするものだからね」

若い子は知らないかなあ、と言ってその場に立ち止まり、足踏みをする。

「若い子って。……知っているけど」

「あ、知ってる。よかった、知らないとあれ説明するの結構やつかいだなあって思ったから。で、足って、つばがいろいろとあるの。知ってる？ それね、すつごく大事なんだって。そうそう、足のつば押しってやったことある？ あれもさ、やりだしたんだ。でもさ、秀二ってば、あれをやると『痛いよお。止めてえ』とか、すつごく情けない声出すんだよね」

以前何かのおまけでついてた足のつばを押すグッズで、秀二を涙目にしたことを思い出し、おかしくなった。

そういえば、と思う。

「秀二、元気？」

お隣だけど、このところと顔を合わせていない。

「元気。学校推薦取るんで、結構戦々恐々とした状態」

「ああ、あれって誰がどこに希望を出したとか、デマも含めていろいろあるもんね」

「うん。推薦通ればほぼ合格だけど、通るまでが神経もたないよなあ」

「あら」

理一も随分と繊細なこと言うもんだと、驚いた。

「あんたは、普通に受験？」

「うん。センター利用したり」

「ああ、そう。だとすると勉強する科目也多いんだね」

「まあね。得意な科目もなければ、不得意な科目もないから、それがあっているかなあと思って」

「は？ あのさ。今……聞き間違いかな。理一さあ、得意なものなければ、不得意なものないって言った？」

「うん、言った」

「普通、ない？ 国語はいいけど、数学がダメとか」

「普通はそうみたいだよなあ。でも、ないんだ。みんな同じ点数」

「みんな同じ点数。ああ、そんな人、いるんだ」

「ここにね。それに、俺からしてみれば、それが一般的なんだと思

つていたから、びつくりしたよ」

課目によって点数が倍くらい違う奴っているだろ、と理一が言った。

「そうね。私もそうだったなあ。まあでもさ、好きな科目はあるんでしょ？」

「好きな科目、ねえ」

理一は遠い目をする。

「家庭科、とか」

「か、か、家庭科？」

思いがけない科目にびつくりする。

「料理作るの面白いしさ。あとグルタミン酸とかアスパラギン酸とか、奥が深くて勉強になったし」

「グルタミン酸ねえ」

聞いた覚えはあるけど、どんな役割をするのかは忘れた。

「じゃあ、家政科に行くの？」

「それはないなあ。まあ、大学は堅実路線でいって、就職も堅実になところ決めて、ともかく早く独立したいと思うけど」

「あ、わかる。私も一人ツ子だけど、だからこそっていうか、ともかく就職して収入を得て、独立したいと思うもん」

「同じだな」

「ほんと、同じね」

「美野って、共働きでもいいひと？」

「うん。私バイトして思ったんだけど、働くの好きなんだよね」

「俺、料理はできるし」

「うん。男の人が料理ができると、女の人でも外で働きやすいもんね」

「だよな」

「すごい、はじめて気があったかも！」

握手握手と、理一の手をとりぶんぶんとふる。

「……美野さあ、大学生だよな」

「うん。何を今更」

理一が、はあとため息をつく。

「今どき、俺の同級生の女子でも、こんな無邪気なことしないなあ
と思って」

「無邪気？」

二つ上の私をつかまえて無邪気とは。

そんなことを言う理一は、全く無邪気じゃない。

「まあ、それだけ秀一さんや秀二に大事にされたんだろうなとは思
うけど」

「大事に、ねえ」

まあ、意地悪をされたとは思っていないけど。

「でも、大事にするならさ、私を振らないと思わない？」
どうしても、そこに思考が戻ってしまう私。

「大事にしたからこそ、振ったんだと思うけど」

「なにそれ。ブー・ブー。今のは不正解の音。やっぱ、高校生の
お子様には恋愛における心の機微なんてわからないのねえ」

徐に、ふっとため息をつき理一を見る。

「美野にだけは言われたくないその台詞。心の機微？ 心のきび団
子の間違いなんじゃないの？」

「心のきび団子？ ど、どんなお団子よっ。……でも確かに、きび
団子は好きだけど」

と、侃々諤々しているうちに、またまたお互いの家の前まで来て
いた。

「まあ、ところどころ意志の疎通はできなかったにせよ、将来に向
けてのお互いのビジョンは一致したってことで」

門扉に手をかけながら、理一がそう言った。

「将来のビジョン？」

「共働きってこと」

「ああ」

そんなこと。でもそれって、何も特別なことじゃないと思うけど。

「ところで、美野って料理はできるの？」

理一の問いに、「洗濯は得意です」と胸を張って答えた。

「洗濯ね。まあ、いつか。お互い手分けをすれば」

そう言つと理一は、「またね」と言つて玄関の扉を開けた。私も、「またね」と言つて挨拶をして、玄関の扉を開いた。

はて。

何やら何かが決まっていくな、そんな会話だったような。そつでないような。

インスタントお隣さん その4

「ねえ、ミノって誰？」

そんな風に、ちよつと怖い声で訊いてきたのは、俺の彼女の倉田くらた静香だ。

「ええと。なんで？」

恐る恐るそう訊くと、「秀二、今、私の事ミノって呼んだ」
あちゃー。やっちまったか。

「わお。秀二、久しぶり。メンタル元気？」

レレレのおじさんみたいに、幼なじみでお隣さんで二つ年上の清水 美野が、家の前を掃いていた。

美野は意外と、孝行娘なのである。

「不元気」

左頬を押さえたままでそう答えると、目ざとい美野はその手をぐいつと引つ張ってきた。

「あちゃー」

まだうつすらと赤い頬を見て美野が言う。

その美野の「あちゃー」を聞いて、こんなところも美野に影響を受けていたんだと、がくりときた。

おいしいお菓子があるからあとで持つていく、と美野は言つと、レレレのおじさんを放棄し家の中へと消えていった。

つまり、あれだ。美野は、これから菓子を持って、俺の家に来て、俺の話を聞くとのことなのだろう。

迷惑千万。

よろよると家に入ると、母親が「あら、お帰り」と平和そうな顔で言ってきた。

「ただいま」と言ったあと、もうすぐ美野が家に来るよ、と伝えた。

すると母親はいそいそと、お茶の用意をしだした。

母親は美野が好きだ。

娘が欲しかった母親にとって、美野は大好物なのだ。

美野の両親が共働きということと、母親の娘欲しさの利害関係が一致した結果、今や美野はまるでうちの「長女」的存在になったいた。

俺が生まれた時から、美野は我が家にいたので（まさに字のごとく、「いた」のだ）、小さいときは美野が夜、家に帰るたびに俺は泣いていたそうだ。

小学生のころまでは、友だちもみな近所ということもあり、美野と俺と兄貴のことは「兄弟」とみなされていたが、中学に入るころから、こんな関係は世間ではあまり理解されないことだと気がついた。

世間というのは、自分が経験していないことや一般的でないことに対して、心が狭いのだ。

二階に上がり制服を着替えていると、「おじゃまします」と美野の声がした。

早い。

「面倒だけど、言わないと更に面倒だし」

とはいえ、本当のことを言うのは嫌だったので、なんとか適当に話を作ってこの場を乗り切りたいと思った。

「面倒だあ」

はあ、とため息を一つつくと、俺は二階から下りて行った。

リビングに行くと、やたらと多くの菓子を前に美野と母親がげらげらと笑いながら紅茶を飲んでいた。

平和。

「いただきます」

椅子に座り目の前にあった紅茶を飲み、そして菓子を手に取った。

どらやきだ。

「これ、美野が？」

ちよつと高そうなそれはやや小ぶりのサイズで、口に入れるとふんわりとした食感と粒々とした餡子のコラボレーションが絶妙だった。

「これは、私がわざわざ買いに行ったのよ」と、やけに偉そうな口調で母親が言う。

「イケメン店員さんがいる、和菓子屋さんなんだって」

にやにやしながら言う美野に、「ほんと、秀二にもああいった爽やかさが欲しいところよねえ」と母親が言った。

「爽やかって、店員なんだろ？ そりゃ、客相手には爽やかになるだろ」

客相手に、ダークな店員なんてありえないだろうと思うから。

「そんなことないよ、秀二。いるよ、爽やかじゃない店員さんってでも、爽やかじゃないっていうよりは、怖いっていうのかなあ。この間テレビで見たもん。『頑固おやじのラーメン屋。汁は最後まで飲め。麺が伸びるからおしゃべり厳禁』ってさ。そうなるとき、こっちも緊張しながら食べることになるのかなあ」

私、シナチク苦手だから残したりしたら熱湯かけられそうだなね、と美野が言っていると、私は血圧が気になるからスープは全部飲めないわあ、と母親が言う。

二人とも、冗談でなく、真剣に話しているところがミソだ。平和だ。

「で、どうしてビンタされたの？」

美野がいきなり訊いてきた。

「あら、そういえば頬が赤いような。あんた、まさか」

母親と美野が黙ったまま顔を見合わせた。

「おばさん。秀二ね、メンタルがダメっぽいつて言っていたよ」

「あらまあ。このところ、推薦がらみで、この子でも色々と思うところがあるみたいだしねえ」

二人の憐れんだ目が俺に向けられた。

「だからってそんなことして。秀二、それは犯罪だよ」

「……どうでしょう」

二人のテンションがいきなり下がっている。

「男にはわからないのよね。いきなり、まあ、予告されても怖いけど、電車の中で触られるのって」

秀二、最低だよ、と美野が言う。

「相手のお嬢さんに謝りに行かないと。……今からお父さんにも連絡して。ああ、それから、あとは何をしたらいいのかしら」

母親がおろおろしだす。

「ちよつと待てよ。俺、そんなことしてねえし」

この二人、完全に勘違いしている。

俺のことを、疑わしいような目で見ているし。

「だから、これは違うって」そう言って左頬を押さえる。

「これは俺が彼女のことを『美野』って呼んじゃって、それに彼女は怒って」

バツシーン、ときたわけですよ、とゼスチャーを交えて伝える。

「だそうですよ、おばさん」と、美野がけろりとした顔で言う。

「まあ、彼女も気の毒に」私だってお父さんが他の女性の名前を呼んだら傷つくわ、と母親も言う。

ああ、嵌められたあ。

「秀二にとって、女の子が一番近いのが美野ちゃんだものね。仕方がないっていえば、そうなんだろうけど」

気をつけないとね、と母親が言う。

「ねえねえ。私、凄くいいこと考えちゃった。私のことを、『静香』って呼べばいいんじゃない？」と、美野が言う。

「あら。だったら、私のことも『静香』って呼んでもいいわよ」と、

和代の名を持つ母親も言った。

「……あのさ、突っ込みどころは満載だけど、とりあえず一点。なんで知っているわけ？ 彼女の名前を」

彼女ができたのは言ったけど、名字は確かに母親に伝えただけど、言っていないし下のほうは。

別に、隠していたってわけじゃないけど、ただ言わなかったただけだ。

美野がぎくりとした顔になる。美野だな、おまえだな。で、出所は理一だな。

すると美野は、わざとらしく口笛を吹きだした。って、おまえは、昭和時代のマンガのキャラか！

「ところで、秀二。合格祝いは何が欲しい？ なんでも言ってるね、バイトのシフト沢山入れているし、と美野が言う。

「まあ、美野ちゃん。ありがとうね」でもいいの？ こんなものの為に、と母親が言う。

こんなので悪うございましたね。出所は、あなたの子宮なんですけどね、と思う。

「うん。いいの、いいの。理一にもあげるって約束したし」

理一というのは、兄の奥さんの弟で、今一緒に住んでいる俺の同級生だ。

彼は毎日のように塾に通っている為、今この時間も勉強中だと思われた。

「まあ、まあ、美野ちゃん。ありがとうね」

母親は、新しくできた家族の兄嫁とその弟の理一のことでも可愛がっていた。

ここまできると、人を可愛がるのがこの人の趣味なんじゃないかって思うほどに。

「そんなお礼を言われるほどのものじゃないんだ。理一へのものは」

ってことは、理一は既に美野にプレゼントをリクエストしたんだ

な。

「理一はね」

俺も参考にしようと、耳を澄ます。

「デート。私とデートがしたいんだって」

ケロリとそう告げた美野の顔を、俺も（そして母親も）三秒ほど凝視したあと、お互い無言で顔を見合わせた。

美野、おまえ、その恋愛感覚のなさってどうなんだよ。

これは長年うちの兄貴に片想いしながらも、全く相手にされなかった（とはいえ、兄は美野に冷たくしたことなんかなく、本当の妹のように可愛がっていたのだが）弊害なんじゃないかって、今更ながら気づいた。

このままで美野に、未来はあるんだろうか？

相手からの恋愛のシグナルをキャッチできないまま、一生を終えるんじゃないだろうか。

「美野ちゃん。本当に理一君と仲良しになったのね」

流石は年の功、母親は巧みだ。

しかし母親の言葉に美野は、はあ、とため息をつく、「正直ちよつと意地悪で憎たらしいんだけど、秀二と同じ年だと思うと、ああ、小さいんだなって思ってた」と言った。

小さい？ あのでかい男が？（まあ、そういう意味じゃないんだろうけど）

「うちは共働きでも両親は健在だし、それにおばさんとおじさんにもよくしていただいたから幸運にも淋しいなんてことなく育ったけど、理一は、早くにご両親亡くして、でお姉さんも結婚して、今は一人でしょ。だからお姉さんの分まで、私が面倒みようって思ったんだ」

美野の言葉に、しみじみとする俺と母親。

おそらく、母親が美野を好きな点って、こういうスピリッツにあるんじゃないかって思った。

——そして、理一も。

理一が美野に注目したのは、最初の出会いの時だ。

本人いわく、小さな体で自分より体のでかい他人である俺を庇う姿に、何かを感じたそうだ。

それを訊いた時、ああ、こいつマジだなと思ったし、でも秀一兄さんを好きだった美野に理一は合わないだろうとも思ったから、理一には悪いけど二人が会うようなことは避けまくっていた。

でも、今、理一はこの家に住んで、そして美野の側にいる。

「面倒って、一生かもなあ」

ぼそりと言った言葉は、母親だけには聞こえたらしく。

「そうかもねえ」と、応えがあった。

いとこ間戦争

初めて会った時の純哉すみやは、それはそれは可愛らしい男の子だったのだ。

「中学受験したんだってね。大変だったね」

私がそう言うのと純哉は小さな声で、でもはっきりと「はい」と答えた。

声変りもしていない、その真っ直ぐな声に、古い言葉で言えば私は「イチコロ」になった。

「クラブは何に入ったの？」とか、「好きな教科は何？」など次々の質問にも、彼はその声で誠実に答えてくれたのだ。

……のだ。

つまりが、全てが過去形。

「純香すみかって、アフオ？」

「……。アフオって何よ。アフオって」

ケラケラと笑いながら、うちのリビングにて私の問題集をばらばらと捲るのは、純哉。

年月というのは残酷だ。

四年で、あのかわいい純哉を生意気少年に変貌させたのだから。

「いやさ、アフオっていうとあまりにも直接的な表現だから語尾を柔らかくしてみたんだけど。お気に召さなかった？」

「召さない」

「ふーん。じゃあ、勉強を教えるのよそうかなあ」

「またケチなことを言って。あのね、あんたは頭がいいんだから、それを社会の役に立てるってーのは、使命つてもんでしょ」

「使命、ねえ。しかし、純香に勉強を教えてそれが社会の役に立つのかねえ」

そう言つと、純哉は持つている団扇でぺちと私の頭を叩いた。

中学受験で見事難関校に合格した純哉は、頭脳明晰なままで成長し、そしていつの頃からか（つて、随分早い段階でだったけど）、一つ上の私の勉強まで見てくれるようになったのだ。

そもそも私は学校での勉強があまり得意でなかったたので、人から勉強を教わることも多く、姉には「年下の子に教わるなんて」とばかにされてもいたけれど、そういったこだわりも一切なかった。

使えるものは、なんでも使おうつていうのが私だったし。

「役に立つわよ。純哉に勉強を教えてもらつてさ、学校での成績を良くしてさ、推薦貰つてさ、めでたくトリマーになるべく学校に入學して学んだ暁には、純哉の家のワンちゃんも綺麗にしてあげるからさ」

「うち、犬いないし」

「あはは。確かにね」

私の将来の夢はトリマーだ。

だから大学でなく、専門の学校に通いたいと思っている。

私は小さなころから動物が大好きだったのだけど、姉が動物の毛のアレルギー持ちだったので（はじけるほど元気な姉なのに。まあ外見とアレルギーは関係ないけどね）、家で犬や猫を飼うことはできなかった。

そんなこともあつて色々と悩んだけど、やっぱり私には私が歩みたい人生があるわけで、意を決して親にそつち方面に進みたいつて言つたら、母親は「なら、小さな洗濯機をあなた用に買った方がいいかもねえ」と言うことで話はついた。

それくらいの気づかいで、クリアできる問題ならば、もっと早くに言つてもよかったなあと思いつつ、まあ姉も段々とアレルギーが軽くなっているのかなあとも思つたり。

指先でシャーペンを回しながら、私の問題を解いているところを見る。

頭がいいってすばらしいね。

「私にも純哉と同じ血が流れているはずなのになあ」と言うと、純哉のシャーペンが指の間でぴたりと止まった

「純香って、アフオ？」と、半眼で私のことを見てきたので、「あはは。冗談よ、冗談。マイケル」と私は言って右手で純哉にハイどろろってな感じで発言を促すと「ジョーダン。ってもう、そのネタってさ、何年ものだよ」と怒った。

ちなみに、マイケル・ジョーダンとは、アメリカの有名な元バスケットの選手だ。

更に言えば、この「マイケル」「ジョーダン」は、初めて純哉に会ったときに私が仕込んだ技（？）だ。

少し緊張気味の純哉を、なんとかリラックスさせようと私なりの気のつかい方だった。

「ねえ。だったら、純哉の血を私に輸血したら、私も少しは賢さが増すかしら」

「血液型が合わないのに、輸血したら大変なことになるだろ」純哉が顔をしかめた、そして「いいじゃん。わかんないところ、俺が教えれば。それで」と問題集に顔を埋めそうな勢いでそう言った。

純哉は、こっちを見もしない。

「でもさ、そのうち動物の事とか専門にやるわけで。それでも純哉、わかるのかなあ」俯いたままでこっちを見ない純哉の顔を覗き込むようにして見た。

あらら。生意気少年純哉の顔が赤くなっている。

「勉強のしすぎで、熱でも？」と純哉のおでこに手をあてると、「おまつ！勝手に人の事触るな！」と手を叩かれた。

「うつ。おねえちゃん、シヨック。純哉がこんな子に育って」おむつを替えたあげたの忘れたの？と泣きまねをする。

「誰が、誰のおむつを替えたって？そもそも、純香とは血も繋がっていないければ、そんなガキの頃は存在さえ知らない他人同士だったんだから。親父の再婚相手が純香の母さんの姉さんってことだけ

で、成り行き上親戚になったけど。それだけなんだしっ！」

純哉はそう言つと、「とつとこの問題を解きやがれ！」と問題集を私に突きつけてきた。

私は問題集を受け取りながら、「まあ、そうだけどさあ」と純哉が言つた私たちの関係を肯定した。

「でも、すつごく嬉しかったんだよね。うちお父さんは一人っ子で、お母さんは二人姉妹で。で、おばさんは結婚していなかったから、いとこって存在がいなくて。だからおばさんが結婚するって、家もうちの側にするって、更に相手には二人も子どもがいるって知つた時、私、すつごく嬉しくてさ」

友だちから「うちのいとこがね」とか「いとこの家に遊びに行つた」、とかいう話をいつも羨ましいと思つて聞いていたから、おばさんの結婚による副産物は宝物のように思えたのだ。

そんな夢の「いとこ一家」がご近所にやってくるのかと思うと、興奮して眠れないほどだった。

そして、いとこ一家はやつて来た。

待望のいとこ殿の誕生だった！

「だったらもつと、敬え。尊べ」純哉が言つ。

「そういえばさあ、前々から思つていたことだけど。尊ぶって漢字は、一文字の中に小さな『つ』まで入つていてさ、充実感があるよね」そう思わない？　と思つていたことを口に出す。

「……純香。おまえ、人前であんまり滅多な事をしゃべるなよ。ああ、でも、そう考えると動物相手の仕事は合っているのかもなあ」と純哉がぶつくさと言う。

「まるで、私の発言に難があるような」

「まるで、難がないような」

ぐるるる、と喧嘩前の仔猫状態になる私たち。

と、そこに。

どたどたとした足音とともに、緑の服を着た（服というより、衣装？）姉が走って登場した。

そして、姉は私たちが見守る中、私たちが勉強しているテーブルの上に飛びのった。

……テーブルが軋む。

「さあ、ウエンディ！ 旅に出るぞ！」そう言うと姉は、腰に手をやり私のことを見下ろしてきた。

姉を見て、純哉はあんぐりと口を開けている。

姉の綾子は大学生で、ちょっと個性的だ。

「ピーター。私、旅には行きたいけど、今はお勉強中だから」私がそう答えると、「ふむ。感心感心。よく学べよ」と言ってテーブルからひらりと飛び下りると（そしてどすんと床に音を立てると）姉は部屋から出ていった。

「……勉強、しょうか」と純哉が言うので、「うん」と私も答えた。

ぼそりと純哉が「純香でよかった」と言ったのを、私はしっかりと聞いていた。

多分、私たちって両思いなんだろうなって思う。

でも私は、せっかくできたこのいとの関係を、まだまだ満喫したかったのだ。

暫くは、このくらいのスタンスで純哉と過ごしたいのだ。

今みたいな、応酬戦が楽しいのだ。

純哉でよかった。

私もそう思っているよ。

いとことしても、好きな相手としても。

生意気少年では、あるけれどね。

いとし間戦争 2 (前書き)

いとし間戦争の続きです。

「いとし間戦争」は二話で完結。

いとこ間戦争 2

親父と女の趣味が一緒なんて、最悪だ。

いそいそと、近所の親戚の家に向う準備をしている弟を横目で眺めながら、ため息をつく。

「純哉君、いつもありがとうね」

弟が向う先の家のおばがそう言つと、「純哉君、あんまり無理しないでね」と同じ顔をして義母が声をかけた。

おばと義母は双子の姉妹だ。

義母と父は、四年前に結婚をした。

それによつて、俺と弟には血の繋がらない二人のいとこが誕生した。

弟が向う先にいるのは、そのいとこのうちの妹の純香で、俺の目下の悩みは――。

「綾子あやこよ、綾子」

おばの声が一段と大きくなる。

「あら、綾ちゃんどうしたの？」

「綾子ったら、今度は女優になるとかで、大学の演劇サークルに入つて」

「……じよ、ゆう？」

「おばさん、それはもしや、『優れた女』って文字を使う女優ですか？」

「そうなの、そうなの。智哉君ともや、どう思う？」
「どう思うも、なにも。」

「お笑い芸人、じゃないんですよね」

「そうなの。お笑い芸人、じゃなくて、女優」

「……」

おばの顔を眺めながら、なんとも言えない気持ちになる。

おばと義母は一卵性ということもあってか、良く似ている。

父から義母を紹介された時にまず思ったのが、「顔では、選ばなかったんだな」ということだった。

丸い顔に、丸い頬。丸い目に、丸みを帯びた体。

ともかく丸い。

義母の名誉の為に付け加えると、ハートも丸い。つまり、とてもいい人なのだ。

話を戻すと、そんな義母の妹であるおばも、同じく全てにおいて丸い。

更に、おばの産んだ娘のうち、長女の綾子はおばにそっくりだ。

つまり、丸い。

三人とも、コロコロとよく笑うもんだから、余計に丸く見える。

そして、どういうわけか、俺はその長女の事がずっと好きだつりする。

……不覚にも。

「智哉君、大丈夫？」

義母が、俺の目の前で手をひらひらと振っている。

「いやあ。今年も終わりに近づいたっていうのに、最後になって衝撃が走りましたよ」

「あらま」

そう言つと義母は笑い、おばも笑ったので、俺もお愛想でとりあえず笑った。

「笑っている場合じゃないぞ」

「え？　なんで？」

へらへらと笑いながら、俺にポテトチップスと演劇のチケット（勿論、綾子の演劇サークルのだ）を渡しに来た綾子が不思議そうな顔をする。

「おまえ、女優だなんて」

「優れた女と書いて、女優」

そう言うのと綾子は、えへへと笑いだした。

「演劇やるのって、すげー金かかるってよ」

「知ってる。バイト増やした」

これもバイト先で買ったもの、とポテトチップスを指した。

「まさか、増やしたバイトって駄菓子屋か？」

「違うよお」

なんで駄菓子屋よ、と綾子が言う。

「ってことは、まさかのコンビ二か」

「まあ、そうだけど。でも、まさかの、ってどういう意味よ」

「まさかのっていうのは、まさかのってことだって。つまりが、まさか、綾子が弁当を温めたり、おでんを温めたりしているわけ」

「……まさかが気になるけど、まあ、そうよ。ついでに言う、温めてばかりじゃなくて、お茶を冷やしたりもするけど」

そんなどーでもいい情報を綾子は言ってきた。

「まさか、『レシートはいりません』なんて言われたり」

「だから、まさかって。何なのよ、もう。はい、そうそう。レシートね。お店の人には渡してって言われて、お客さまからは要らないって言われて、面倒くさいのなんのって。まあ、レジのところにレシート捨て場のボックスがあるから助かっているけどね」

そう言う一瞬綾子は難しい顔をしたが、すぐににへらと笑った。

だから、笑いごとじゃないって。

「釣銭、しっかり渡しているだろうな」

「うん。今のところクレームはなしだよ」

「期限切れの弁当は、下げているんだろうな」

「うん。でも、あれ勿体ないよ」

「まあ、それは確かになあ……って、まあ、この際そのことは置いておいて」

呑気そうな顔の綾子をじっと見る。

「コンビニって、うちからすぐのあそこだよな」俺がそう言つと、「うん。そう。ご近所だよ」と綾子が答えた。

まあ、歩いて五分くらいの所だが。

「バイトの終わりは何時なわけ？」

「ん。八時には上がらせてもらっている」

ふむ、八時か。まあ、大丈夫か。

「あのさ、そんなに私のことが心配なら、智哉も一緒にコンビニでバイトをやる？」にこにこしながら、綾子がそう言ってきた。

「だ、誰がっ。誰が、そんな飛んで火に入る夏の虫さまのような様をみせるか」

「え？ そうなの？ 高校までは積極的に夏の虫になってたのに」

「俺を夏の虫にさせたのは、どのどいつだっ」

「え。私、頼んでないよ。智哉に体育祭委員をやれとか、文化祭実行委員をやれとか」

そう。確かに綾子からは、頼まれていない。

こいつが、運動音痴なくせに体育祭委員を受けて（しかも立候補だ）、それを見た周りのやつらが「お願いだから智哉もやてくれ」と泣きついてきて、結果、自分の案だけ出すとすっかり委員としての自覚が萎えた綾子の代わりに、俺が動くはめになったというだけのことだ。

更に、高校三年の時は、受験前だつていうのに、ジャンヌダルクのごとくクラスの皆を鼓舞し文化祭参加気分にならせておきながら、自分は追試で参加できず、結局俺が尻拭いのように文化祭を仕切ったということも。

そう、綾子に頼まれたわけではない。

ともかく全てがこんな調子の綾子とも関係の中で、俺がコンビニのバイトを始めたとする。

「じよ、冗談じゃない。なんで俺が」

なんで人に為に、つーか、綾子の為にバイトをしないといけないのか。

「まあ、それは、ともかくとして。……おっと、そういえばこれのチケット代はいくらさ」

「こんだけ金がかかると言っておきながら、綾子がただでこのチケットを俺に渡すとは思えなかったのでそう訊いた。」

「え。まさか、私が智哉からお金を取るはずなんてないじゃん」

「無料よ、無料、と綾子は言っと、ポテチも付けちゃうしとやけに気前がいいことを言う。」

「智哉からお金を取るはずなんてないじゃん、だと？」

「時折綾子たち親子が開く、よくわからないフリーマーケットで、どんだけ俺にガラクタを売りつけたと思っているんだこの女は。」

「綾子から買った（売りつけられたとも言っ）薬屋で買ったであろう店のロゴ入りの貯金箱は、動かぬ証拠としてしっかり俺の机の上にあるというのに。」

「まあ、捨てりやいいんだろうけど。どういった経緯であれ、好きな女から受け取ったものは、そう簡単には捨てられないし……。」

「——て、くれればいいのか」

「はっと我に返った俺に、綾子の声が聞こえた。」

「え？　なんだって？」

「だから、智哉は当日の受付とか会場整理とかをしてくれればいいから」

「受付。」

「会場整理。」

「してくれればいいから。」

「は？」

「もうね、純哉ちゃんと純香にもお手伝いお願いしたの。だから、智哉もやってね」

「そう言っと綾子は、ポテトチップスの袋を開け、チップスを一枚取り出し、ぱっと俺の口にそれを入れてきた。」

「取引成立！」

「無理やり入れられたそれを、俺は咀嚼しながら、綾子のコロコロ」

と笑う顔を見ていた。

ポテトチップスは、俺の好きなコンソメ味だった。

茜色の空と雨上がりの虹と

高校を卒業するにあたり、娘に携帯電話を持たせようと思った機械音痴の母親が同じく機械に弱い父でなく、連れとして近所でも優秀だと評判の篠田家の子息兼娘の同級生を選んだのは自然の流れといえよう。

「悪いね」

そう言って私は隣を歩く、篠田 幸弥ゆきやに声をかけた。

「いや」

なんでも、篠田も（同級生なので、ご近所さんとはいえ、昔から名字を呼び捨てだ。ある時を覗いては）携帯を持っていなかったとかで。

「真子まこちゃんと一緒ににお出かけなんて、久しぶりね」

篠田のスポンサー兼保護者である篠田のおばさんがにこりと笑う。

「ほんと、昔はご近所で子どもたちを連れて、プールに行ったりしましたものね」

うちの母親もそう言っと、母親同士顔を見合わせ「懐かしいわねえ」と言っていた。

確かに、うちのご近所は、同じくらいの年の子がぞろぞろいたせいで、何かと町内会のイベントも多く、子ども同士親同士の仲もよかった。

「よかったわ、幸弥君がついてきてくれて。おばさんも、真子も機械全く駄目で」

ここで名前のあがらないうちの父親は、最初から戦力外とみなされている。

「真子、ちゃんとお礼を言ったの？」

お礼も何も、まだ携帯ショップについていなければ、携帯電話を手にもしていないのに。

とまあ、文句は言いたいが、波風は立てたくないの、「ありがとう」と大人しく言うと、篠田は「いや」とさっきと同じ言葉を返してきた。

「……一体、何をどう選べば」

やけに明るい店内に茫然と立ちすくす私に、「お母さんたちはあそこで待っているから、幸弥君にしっかり教えてもらいなさいよ」と母親は言つと、いそいそと篠田のおばさんとソファに陣取り世間話を始めた。

平和な光景である。

さて、ともう一度視線をフロア一杯にディスプレイされた携帯電話に移す。

……あれだな。

選択肢が多いって言うのも、一種の不親切だな、私のようなものにとっては。

「どんなのが欲しいの？」

救世主篠田の声が頭上から降ってきた。救世主は背が高いのだ。

「どんなの、と言われましても」

さっぱりでござんす、ってなゼスチャーをしてみせる。

そんな私の姿に篠田は少しだけ笑つと、「じゃ、携帯でどんなことをするつもり？」と訊いてきた。

おう、それなら簡単。

「家への連絡用の電話と、写真」

「メールは？」

「め、メールねえ」

実は、メールなんて面倒って思いがある私だった。

「メール機能なんて、必要かなあ」

素朴な疑問を篠田にぶつけてみる。

「どうかな。まあ、自分が必要なくても、これからはなんらかの連絡手段としてメールが選択される可能性は多いだろうなあ」

高校の時の連絡は、電話の連絡網でかろうじて機能していたけれど。

「ん、じゃ。メールもかな。でもさ、いちいちこんな小さなボタンを指で押すのやだなあ」

「確かにね」

男子なんて女子よりも指が大きいのだから、なおさら大変そうだと思うた。

「特に希望の機種がないのなら、俺もそんなくらいしか携帯つかう気ないから、同じやつにしてもいい？」

そう言つて篠田は、「これ」とスカイブルーの携帯を手にとった。

「色は他にもあるみたいだけど」

携帯の下に置かれていたパンフレットをめくりながら篠田が言う。

「あ、いいや。面倒だから、篠田と同じで。それいい色だし」

女子だからってピンクなんて柄でもない私は、その篠田の持つスカイブルーが気に入ったのだ。

「じゃ、親呼びますか」

篠田がそう言うので、私は母親たちを呼びにいった。

ほんと、助かった。

私と母親じゃ、途方に暮れまわるところだった。

あのあと私は篠田家にお邪魔し、携帯と説明書を広げながら、携帯電話に関するレクチャーを篠田から受けた。

更に、買った時点ではかなりアンニュイな数字とアルファベットの羅列だったメールアドレスを、自分が覚えやすいものへと設定も

しなおした。（勿論、篠田が）

篠田のおばさんが出してくれたケーキの写真も撮った。

そしてそれを、メールに添付して送るといふ高度な技もやってみた。

送る相手は、勿論篠田だ。

するとすぐに篠田も返事のメールを目の前でしてきたので、今度はそのメールを開くという技を習った。

一通り全部いろんなことをして、携帯マスターとなった私は足取りも軽やかに自宅へと戻ったのである。

春が来て、私は料理の専門学校へと進み、篠田は某有名私立大学へと入学した。

機械について戦力外通告を出されている父親は、洋食屋を営んでいて、私はそこを継ぐべく修行を始めたのだ。

多くの友人が短大や大学で青春を謳歌する中、私はひたすら野菜を刻んだり、肉を処理したり、スープをとったりと常に汗だくだった。

専門学校の友だちの中には、それでも無香料のお化粧品でかわいくしている子もいたけれど、私は高校の延長線上的な顔&スタイルつまりが、すっぴん&ジーンズだった。

学ぶべきことも多く、とるべき資格もあり、充実しながらも、あわただしい日々だった。

そんな時。

ふと。

茜色した夕暮れの空が、視界に広がった。

はっとした。

しばらく、ぼーっとしてそれを仰ぎ見ていた私は、そっだそっだ携帯を取り出し、料理以外のものを初めて撮った。

そして更にふと。

その撮った写真を誰かに見せたくなくなった。

けれど、面倒くさがさが災いしてか、個人的なメールをやり取りするような相手はいなかった。

メールアドレスは知っていても、まさに連絡用のみの相手ばかり……、あつ、いた。

篠田がいた。

そう思った次の瞬間、私の指は篠田に教わった通りに、写真を添付してメールを送る方法をたどっていた。

けれど特に書きたい文章はなかったので、無作法かもしれないが、写真のみを送った。

無事に送れたマークが出てほっとして、携帯をポケットにしまおうと思った瞬間。

滅多に鳴らない着信音が響いた。

慌てて開くと、篠田からだった。

篠田のメールも本文はなく、添付された写真のみだった。

「かわいい」

赤ちゃんの写真だ。

そういえば、篠田家の御長男には赤ちゃんが生まれたと聞いたなあと記憶をたどる。

篠田、おじちゃんか。

携帯をしまいながら、一人で笑ってしまった。

それ以来、本文なしの写真のみのメールを思い出したように篠田とやりとりするようになった。

私が何を送っても、篠田はそれを何も言わずに受信してくれて。

そんな私への返信は、篠田の好きなもの（だと思われる）、人物や食べ物だった。

なにせ、お互い本文なしなので、推測するしかないのだ。

だったら、文章を入力して色々と聞けばいいのかもしれないけど。

まあ、そうなんだろうけれど。

文章があることで、全てが台無しになるような、そんな気がしたのだ。

そうこうするうちに、月日は流れ。

私はいよいよ、父親の洋食屋の手伝いをするようになった。

父親から、パンパンに糊のきいた洋食屋の制服を渡されたとき、嬉しさのあまりそれも写真で撮ってしまった。

そして、いつものように篠田に送った。

篠田からは、お返しなのかスーツの写真が届いた。

就職活動開始なのか、それとも既に内定つてもんが出たのか。

普通の大学生の生活には全くうとい私にはわからなかったが、ともかくその写真から篠田もそろそろ社会人になるんだなあと思つていた。

「あ」

近所にある駅ビルの書店を覗いたら、スーツを着た篠田がいた。

生身の篠田を見たのは、高校卒業以来かもしれない。

ご近所とはいえ、活動時間帯が違つとなかなか顔は合わせないものだ。

スーツを着た篠田は、なかなか様になっている。

うちのランチタイムに来る、サラリーマンのお客さまみたいだと思つた。

久しぶりだと声でもかけようとおもつた時、篠田の側に立っていた女性が篠田に話しかけていた。

なるほど、彼女もスーツを着用している。

……私は、ジーンズだ。

まあ、いいや、と思つてその場を立ち去る。

まあ、いいや、と思つたはずなのに、心の中はもやもやとしていた。

そしてまたまた少しだけ月日は流れ。

お店では、洗い物と接客だけまかされていた私も、ようやく食材に手を出せる様になった。

野菜を洗ったり、皮をむいたり、そして切ったり。

そしてそのうちに、サラダは私の担当になった。

練習のため、店に出すサラダと同じものを閉店後に作った。

そして、写真にとり、篠田に送った。

篠田は既に社会人になってた。

篠田のおばさんが、息子の帰りが遅いとうちの母に話していたのを聞いたことがある。

篠田からは、なんと名刺の写真が送られてきた。

そうか、篠田もがんばっているんだと思い、私も力が湧いて来た。

その直後のことだ。

珍しく篠田の方からメールがきた。

パスポートの写真だ。

篠田は外国で仕事をするんだと思った。

そんなことは、一言も書いていなかったけど、そういうことなんだろうと。

私は初めて携帯で篠田に電話をした。

「お互い、物持ちがいいな」

携帯ショップに向いながら、篠田が言う。

「でも、お店がなくなるなんて」

以前篠田が行った携帯ショップは無くなっていたので、私たちは同じ会社の携帯を扱う違う店に来ていたのだ。

あの頃よりは、少しは携帯電話について詳しくなった私だったが、

だからって全ての機能を使いこなしているわけではない。

とはいえ、もう随分同じ機種を使っていたので、そろそろ替え時だとは思っていたのだ。

篠田が海外勤務になるのかどうか、ということは聞いていない。私は電話で篠田に、携帯を買い換えたいので付き合ってほしいと言っただけだった。

携帯ショップへの道を歩きながら、今回は両方の母親がいたんだなあと思った。

細かい話になるが、今までの親の名義で入っていたのでそれは解約した。

今更ながらなのだが、社会人にもなったので、自分の名義で今回は携帯を契約するつもりだった。

驚くことに、篠田もそうだったらしい。

そろそろどうにかしないと、と思っていた時の私からの電話だったそうだ。

篠田も意外とのんき者だ。

携帯ショップに着き、受付の番号札をとると、私たちは携帯の機種モデルを見だした。

「どんな機能が必要？」

篠田の以前と同じ問いに、「ん。電話、メール、写真、かなあ」と答える。

「変わらないね」と篠田が言う。

「そうなんだよね」と私も答える。

篠田が壁にかかっていた携帯のモデルを手取る。

「これにしようかと思う」

篠田の手には、以前と同じようなスクイブールの携帯があった。前回は篠田と同じのにして間違いがなかったから、今回も「私も同じので」と言った。

「これ、海外にも繋がるから」

「……海外」

「そう、海外」

そう言いながら振り向いた篠田を見た途端、私は不覚にも涙が出てしまった。

今までだって、会ったりなんかしていなかったのに。

なのに、海外って単語で涙を流してしまう私はずるい。

会わなくても、話しをしなくても。

嬉しいこと、知らせたいことを真っ先に知らせる相手、それが私の場合には篠田だったのだ。

会わないのに、話さないのに、それでも側にいて欲しい相手、それが篠田だ。

「これからもメール、待っているから」

篠田は両手を自分の膝に置き、そして体を屈めて私の顔を覗きこんできた。

その様子は、迷子になった小さな子に大人が「どうしたの」と訊く時のようなもので、同学年女子相手にするものとは思えないなあと思った。

けれど、篠田にとっての私は、そうなんだろうなと思った。

近所の、機械オンチの子。

「本当に、待っているから」

私は何度も頷いた。

せめて笑顔を見せようと頑張ったけれど、それが報われたかどうかは篠田にしかわからない。

そしてまたまた少し月日は流れ。

私はサラダに加え、料理も作りだすようになった。

まずは、オムライス。

白いお皿に、ふくつらとした黄色とその上にかけて赤いケチャッ

プという昔ながらの一品だ。

閉店後に作ったものを携帯で撮り、海外にいる篠田に送った。

——「食いたい」

しばらくすると、そんなメールが返ってきた。

篠田は海外に行ってから、写真だけでなく文字も送ってくるようになっていた。

だから、変な話だけど、以前よりも篠田のことを近く感じた。

篠田が文字を送ってくるようになったので、私も写真だけでなく同じように日々の出来事なんかを送るようになっていた。

更に日々は過ぎ、ある日、篠田からメールが来た。

——「帰国します」

そして、こんな一文が。

——「オムライス、食わせて」

私は、昨日撮った、とっておきの写真を篠田に送った。
雨上がりの空にかかる虹の写真を。

——「待ってるよ」の言葉を添えて。

階段下プリンセス（前書き）

「膝小僧プリンセス」関連作品。

ご興味のあるかたは、そちらもどうぞ。

勿論、この物語単独でも、お読みになれます。

階段下プリンセス

「小枝子お。謀^{だばか}ったな」

「……たばかり」

謀るとは、物騒な。

私は視線を一口分だけコーヒーが残っているカップから、目の前の男「モンキー天野」に移した。

モンキーのあとに「D^{ディ}」でもつけば、若しくはモンキーの前に「ファンキー」と後に「ベイビーズ」でもつけば、奴の人生にも違った展開があつたのかなあ、なんて思ったりした。

—— 違った展開、かあ。

コーヒーを飲み干す。

お砂糖もミルクも入っていない、そのまんまの苦いコーヒーを。それにしても「モンキー天野」だなんて、久しぶりに奴の懐かしい渾名^{あだな}が頭に浮かんだものだなあ、と可笑しくもあり。

それにしても。

「謀るもなにも、私、君と話すの百五十年と三カ月ぶりですから」
謀りようがないでしょ、と言いながら耳をほじると、「百……！
な、わけないだろ、昨日だって話しただろつ、て、おまえなあ、
人と話す時は耳をほじんな！ ああ！ おまつ！ それ、す、捨てるなよっ！」

天野はそう言うつと、私の指から落ちた体内内容物落下について、文句を言いだした。

ぎゃーすか、ぴーすか。

元気だなあ。

素晴らしい。

天野の話を頭の半分で聞きながら、カフェの窓ガラスの向こう側に広がる街の様子を眺めた。

休日だっというのに、みなどこかへ向かって歩いている。

—— ううん、どこかじゃなくて、誰かかもしれない。

そう思うと、あんなにたくさんの人みんなに、会うべき人がいるってことになる。

あの人たちには、あの人たちが来るのを待っている人がいるのかって。

虚しい。

…… ああ、虚しいな。うん、虚しいよ。

なんで私はこんな関係で、奴の前に座っていないといけないんだろって。

自分で決めたこととはいえ、こうしたふとした瞬間に辛くなるときがある。

天野が文句を言い終わったところを見計らい、「そろそろ帰ろうよ」と言う。

目の前のコーヒーもなくなったことだし、耳も疲れたし、天野からの話もなんだかよくわからないし、と席を立とうとした私の腕を、天野が強く掴んできた。

その強さに、ほんと、びっくりした。

「まだ、帰すか」

そう言うつと、強い眼差しで私を見てきた。

それに負けて、椅子に座る。

すっと、そのまま。

「……だからよお」

「だから？」まだ話はあるんですか。

「あれだよお」

「……あれ」あれって何よ。

ああ、わからないかよお！ と天野は頭をかきむしる。

その動作に、側を通った女の子が、ぎよっとしたような顔をして立ち止った。

ああ、驚くよね、当然だよと思い、カフェで一番目立ったおバカの連れとして「ごめんね」と頭を下げた。

「ああ、だから。八重子ちゃんだよ」

「八重子」

八重子は、私の妹だ。

八重子の名を聞いた途端、ここ最近こいつに頼まれながらも適当にうつちゃっていたことを思い出した。

つまり、今日の議題は、そのこと？

「小枝子も知ってんだろ。っていうか、小枝子がお膳立てでもしたんだろ？ 健也かつやが八重子ちゃんと付き合うことに。だから、俺が頼んでいた八重子ちゃんのこと、話を進めてくれなかったんだろ？」

健也？ ああ、弓高ゆみだか健也のことね。

これまた懐かしい名前が出たぞ、なんて思うと同時に、「健也が八重子ちゃんと付き合うことに」という言葉が頭に残響し……。

「——うぞつ！」

結局、カフェで一番目立ったのは私だった。

コーヒーのお替りを天野が頼む。

コーヒーをとくに飲んでしまい、そして天野の爆弾発言で水も飲み干し、ついにはもう氷をガリガリと噛むしかなかった私にとつては、ありがたいことだった。

なにせ、私は無一文だったのだから。

いや、本当の意味でそうというのではなく、そもそも私はお隣さんに回覧板を届けた帰りに「ちょっと話がある」と天野に掴まったので、つまりが着の身着のままだったのだ。

言われるがままに天野家所有の車に乗り、少し離れた街のカフェ
なんかに来たわけだけど……。

よって服は、部屋着に毛が生えたようなものだし、足元なんて母
親のつつかけだ。

連れてこられた時は、なんでこんな場所まで、と思ったものだが、
まあそんな話なら確かに近所の喫茶店ではできないわね、と納得し
た。

「それ、健也と八重子がつて、どこからの情報よ」

注文をとったお店の人が側からいなくなるのを合図に、そう訊い
た。

「見たんだって、光石^{みつし}が。……その、ホテルで」

「ホ……」

健也と八重子、が？

つまり、円山町とか、そういうこと？

コメントに困る。

「……つまり、お二人さんは、既にそういったご関係だっていうわ
け？」

頭が、ずきんずきんとしてきた。

「それをおまえに訊こうと思って」

その言葉に、眩暈までしてきた。

いくら姉妹とはいえ、訊けますか？

あんた、ホテルに行ったの？ と。

しかし、光石が見たってことなら、見間違いつて線はないんだろ
う。

健也と天野と光石と私は、同じ学年で小さい頃から互いを知る「
ご近所さん」だったからだ。

小学生の頃は、朝から晩まで今から思うとよく飽きなかったなあ
と思うほど、とことん遊んだものだ。

そこに時折加わってきたのが、三歳年下の妹の八重子だ。

八重子は、昔からよく転ぶ子で、お陰で私はバンドエイドを常備する癖がついたほどだ。

八重子と健也といえば、思い出すエピソードが一つある。

確か、私が風邪を引いて、遊びに行けなかった時のことだ。

果敢にも一人で遊びに行った八重子だったが、案の定転んで泣いて、結果、健也が家までおんぶして送ってきてくれたのだ。

穏やかで面倒見の良い健也の性格もあるのだろうけれど、同級生四人の中で一番身体の成長が早かったのが奴だったので、自然とそういったことを引きつけてくれたのだろうと思う。いい奴だ。

その対極にいたのが、天野だった。

学年でも一、二を争う小柄な奴は、その体形をいかし、すばしっこく身軽に隙間から隙間へと自由自在に移動していた。

塀やら屋根やら、まるで天野には行かない場所はないかの様に、その動きはしなやかで大胆だった。

率先して一番危険なこと、そして面白いことに手を出しては、先生や大人にしかられ。

しかられながらも、どこか愛嬌があるんで許されちゃうお調子者。

それが、天野。

そしてついた渾名が、「モンキー天野」。

至極、妥当である。

そんな天野を、天野の何にも縛られない自由な姿を、私は友だちでありながらも憧れの気持ちで眺めていた。

三歳下の妹の面倒を見なくちゃいけない姉という自分の立場に感じていた窮屈さが、天野を見ることで和らいだのだ。

そんな天野や健也に加え、慎重な光石に私と、みな性格も違うのに、あの頃は本当にやけに気が合っていた。

そんな仲の良いご近所さんだった私たちは、それぞれの誕生日や節句などの行事の度が集まるとスナップなんかも撮ったわけで、それが屋外になった時は、天野だけは必ず階段の一段上にのり、私たちと写真に写っていた。

そして階段に立つたびに、同じくらいの視線になった階段下にいる私のことを「ちび」と呼ぶのだった。

まあ、同じくらいの視線っていうのは、正確じゃないな。

階段にのると、確かに天野の方が背が高かったし。

おまたせしました、とお店の人がコーヒーを置いてくれた途端に、それを飲んだ。

「—— はあ、落ち着いた。悪いけど、八重子には訊けないよ。そんな、健也と、どうなってるの、なんて」

私がそう言うとき意外にも天野も、やっぱりそうだよなあ、と頷いた。

「いやあ、俺はさ、八重子ちゃんと出かけたと言ってたじゃん」

その通りなので、黙って頷く。

二週間も前になるだろうか。

私にしてみたらある日突然といった感じで、天野がしきりに「八重子ちゃんと出かけたから話をつけてくれ」と言うようになったのだ。

出かけたいなんで、一体どこに出かけたいのよ、と訊いても、天野はももごと誤魔化して行き先を告げようとはせず。

だから、なんか妙だなあって思って、その話はわざと八重子には言わずに、放っておいたのだけだ。

「別にね、俺ね、八重子ちゃんと付き合いたいとか、そんな意味で出かけたって言ったわけじゃなくて、その、まあ、夢っていうか」

「ゆ、夢？」

男に、そんな夢を見せるほどの女ってことなんだろうか。
凄いな、うちの八重子は。

「そう、夢。でも、健也と付き合っているならさ、それを知っちゃ
ったらさあ、そう簡単には連れだせないじゃんよ。ああ、夢は、夢
だったってことかあ」

「……はあ」

夢、夢、と夢を連呼した挙句ため息をつく天野を見ながら、ご近
所としての、昔馴染みとしてのスタンスなら、別に出かける位のこ
となら、そんな気にしなくていいんじゃないかなって気もした。

健也だって、そこら辺はわかつてくれそうだし。

けど天野が、夢見るほどに八重子が好きっていうのなら、やっぱ
りそれは問題なんだろうな、とは思う。

健也だって自分の彼女に想いを寄せる男の目の前に、その人を差
し出すような真似はしないだろうから。

しかし、そんなに天野が八重子を好きだったのなら、「出かけた
い」じゃなくて、せめて「デートがしたい」とかそういった恋する
気持ちのところを話して欲しかったなあ、なんて。

そうしてくれたら、八重子に伝えたかもしれないなあ、なんて。
そうなれば、八重子は健也じゃなくて、天野と付き合ったかも、
なんて。

今とは違った展開が、あったかもしれないあと。

「ああ、俺の女神が」

天野が頂垂れる。

女神かあ。

すごいなあ、八重子は。

女神ってことは、人じゃないよね。

既に神。

恋をすると、人ってポエマーになるのね。

でもまあ、そんなのを目の前で見せられるのは、私にとってはあまり愉快なものではないですが。

「夢を見たんだ、俺」

こうなったら、最後まで付き合って聞きますよ、と頷く。

「八重子ちゃんと一緒に歩いていて、駅前に来るんだ」

ああ、駅前に。やけに現実的な夢だこと。

「で、宝くじ売り場があって」

ああ、この辺りではよく高額が当たるとかいう、あの売り場ね。

「そこでさ、八重子ちゃんと一緒に宝くじを買ったら、三百万円が当たったんだ」

ああ、夢よもう一度と天野が嘆く。

……反対に、私はしらけた。

「つまり、天野は眠っている間に見た夢で、八重子と一緒に買った宝くじが当たったと。だからその夢の通りに八重子と出かけたかった、と」

「うん、そんな夢を見たのって初めてだったから。しかも、三百万だぜ。ちよつとリアルじゃね？」

「……つまり、天野が八重子と出かけたと思う裏には、恋とか愛とかそういうことは関係ない」と

「あ、当り前じゃないか！」人をなんだと思っているんだ、と天野が言う。

人をなんだと思っているんだ、なんて思いがけないコメントがきたけれど。

「もう一度確認させてもらうけど、八重子は、当たりくじを買った

めの女神ってこと」

「うん。そう」

「で、夢って言うのは、眠って見るやつのこと」

「そりゃ、そうだ」

「だったら最初からそう言いなさいよ。こっちが、『一体どこに出かけたいのよ』って尋ねても誤魔化しちゃってさ」

「いやあ、だって、そんなこと言うの、ちょっと恥ずかしいかなあなんて」

……恥ずかしいって、結局今言っているじゃないの。
紛らわしい！

「と、いうことで、残念ながらプラス三百万はないですが、一つこれですごくお願いします」

そう言つと、天野はポケットから通帳を出し、それをまるで将棋の駒を指すようにすつと私の前に置いた。

「……私、あんたにお金なんか貸してないけど」

まあ、確かにお金に困っていた時もあつたのかもしれないけど、

天野はそんなことは言わなかったし。

「うん。借りてない」

天野はそう言つたきり黙つた。

黙られても、困る。

決して繊細とは言えない私だけど、だからって目の前に置かれた人の通帳を、ひらひらと開いて眺めるほどには、神経は太くないから。

「小枝子、見て」

天野の言葉に、しぶしぶと開く。

通帳は、ぱつと開くと真ん中あたりの途中のページが出てきたので、このまま後のページを見た方がいいのかなと思いつつも、ぺらぺらと捲り一番最初のページから見ることにした。

そういえば、この銀行つて光石の働く銀行だわ、なんて思いながら「ご新規」と印字された日付を見た。

それは、私たちが大学を出て社会人になった年のものだった。そのあと約三年間は、天野が勤めていた会社からの「給料」と「賞与」の印字が順調にされていた。

働きだして三年。

丁度それは、私たちが幼なじみから脱した付き合いを始めた頃でもあった。

天野に誘われて、二人で旅行に行った時もあった。何かが変わるのかな、と思った時でもあった。

通帳は、その後天野に起きたことを何より正確に伝えてくる。

「給料」の印字がなくなったのだ。

天野の会社は、本業以外の投資に走り失敗し、社員を雇用できない状態になった。つまり、倒産。

預金が減るばかりの通帳を見ると、あの頃の出来事がまざまざとよみがえり、苦しくなる。

天野は、職探しに明け暮れた。

見る見る痩せていく天野を心配するうちに、誰よりも天野の力になりたいと思っている私が、誰よりも天野の負担になってしまっていたことに気がついた。

気がついてしまったものは、しょうがない。

私は、何もなかったような顔で、幼なじみの顔で、天野から少し離れた場所で、天野の事を応援するようになった。

私たちは、もとの幼なじみに戻ったのだった。

そして、数か月のブランクはあったものの、以前の勤務先よりもう少し少ない金額にはなったものの、再び通帳には「給料」の印字がされ

るようになっていた。

そしてそれは、現在も続いていた。

ただのどこにでもある通帳なんだけど、この一冊には天野の頑張り
が記されている。

苦汁をなめたこともあつただろうし、今だってそうなのかもしれない。

最初の会社は、天野が学んだことがいかされた会社だったけれど、
今の会社はそうでもないようだ。

それでも、天野は働いている。

そして休日でも、ぎゃーすか、ぴーすか煩くて、元氣だ。

それは、素晴らしいことだ。

それこそ、女神さまに感謝したいくらいだ。

幼い頃とは違う思いで、私はそんな天野に、天野の強さに憧憬を
抱いた。

「結婚して」

通帳を閉じた私の耳に、天野のそんな声が聞こえた。
目が泳いでしまう。

「小枝子、俺と結婚して」

天野を見る。

「ずっとそう言いたかったけど、俺、自分のことばかりで、余裕な
くて。ごめん」

小枝子と一緒に暮したい、と天野が言う。

「……お、遅いよ」

もう、ダメだと思ってたよ。もう、天野とは繋がっていないって
思っていたよ、と心の中で言う。

「大変お待たせしました」

ぺこりと天野が頭を下げる。

そして、「待っていてくれて、ありがとう」と。

天野から借りたハンカチで涙を拭きながら、揃ってカフェを出た。

「そこ、階段あるから気をつけて」

大人になって、少し優しくなった天野がそう言った。

その注意に従い、慎重に階段を下りようとした私に、「ちょっと、そのまま」と天野が言う。

私は、階段の上。

天野は、階段の下。

「ちび」

階段の上にいる私を天野がそう呼ぶと、昔からは想像もできないくらい大きくなった体で、いきなり私をお姫様だっこしてきた。

「うわ、あ、危ないよ」

やっぱりどこかお調子者の天野を頭を、私はぺしっと叩く。

その途端、私の左足のつまかけが、シンデレラの靴のようにポロリと脱げた。

階段下プリンセス（後書き）

みんなで100題チャレンジ！企画 「044：階段」にて参加

呪文にかかったプリンス （前編）

光石 ^{みついし} 卓 ^{すくも} といえば、昔からクラスのアイドルで王子様な男の子だった。

小学校時代には、「きらきら星」を弾きたいからとの理由でバイオリンなんかを習っていた彼は、その外見とあたりの柔らかさも相まって女の子に絶大な人気を誇り、やんちゃで元気がよく男子に人気があつた天野と双璧をなしていた。

光石も天野も背は低かつたので、余計にこの二人は何かと比べられた気がする。

そしてこの二人に健也を加えた三人は、家も近く仲が良かったので、とても目立つ存在だった。

（ちなみに健也は二人とは違い、背も高くのんびりとした穏やかな男の子だった）

年を重ねるにつれぐんぐんと育ち、すばしっこかつた頃の面影もなくなつていった天野に比べ、光石のそれは控えめだったため、それゆえに、アイドル度、可愛がられ度は半端でなく、高校の頃のキヤッチフレーズは（なぜ一般市民にキヤッチフレーズなんてモノがあつたのかと思うと謎だが）、「百万人の孫」だった。

百万人もの老人はちよつと想像できなかつた私だけど、その気持ちには十分に理解できた。

光石は、気配りもできる心優しい少年だったため、「孫」のネーミングは言い得て妙だと思つたからだ。

しかし、そこらへんが一部の男子の癪に障るところがあつたようで、何かしらのトラブルに巻き込まれては、すつたもんだしていたようではあつた。

気の毒。

そんな気の毒な光石を、小学生のころからずっと好きな（勿論、想いは一方通行だ）私は、もっと気の毒ともいえよう。

でも、それも終わりなのだ。

私は今朝手に入れたチケットをバックにしまいながら、そう思った。

それも、今日でoshiまいなのだ。

＊

「^{さがき}里垣、凄いね。これ大人気のプログラムでしょ」

よく手に入ったねえ、との光石の声に、にやけないようにと注意をしながら「え、そうなの？」としらを切る。

そうなのだ。

プラネタリウムで上映するこのプログラムは、小惑星に行きそして帰って来た探査機の七年の出来事を綴ったもので、光石の言うとおり大人気のものだったのだ。

当日の窓口販売でしかチケットを入手することができないこのプログラムに光石を誘ったのは、一週間前だ。

一週間前に、偶然を装い光石にコンタクトをした私は、このチケットを二枚自分が持っていると言っていると嘘をつき、星や宇宙関係が好きな彼を誘ったのだ。

結果、作戦は大成功。

光石はその場で、OKをくれたのだから。

今朝、気合を入れた争奪戦でチケットを無事にゲットし、胸をなで下ろしたのは、光石には秘密。

気合で言えば、争奪戦の時とは違ったそれが、今日の服には表れていた。

センスのいい友人の力を借りて、上から下まで揃えたのだから。友人は、私の光石への想いを聞くと、「だったら今晚、押し倒しちゃえ」と言った。

更に、「なんで、そんなに長い間なんのアクションもしないのか理解できない」とも。

だから私は言ったのだ。

「多分、私が押し倒しても、光石は拒まないよ」と。

それくらい、光石は優しいから。

でも、私が欲しいものは、そんなものではないのだ。

「拒まない」イコール「受け入れる」ってわけじゃないって、わかってるから。

それは虚しいだけだから。

そう思うなら尚更、光石と（嘘までついて）出掛けるなんてばかだと言われた。

引きずるだけだと。

返って面倒なことになると。

「入場しようか」

光石の声に頷いた私の耳に、「あ、光石じゃね？」と言う男の人の声が聞こえた。

私と光石で同じタイミングでその声に振り向くと、私には見覚えのない男の人が立っていた。

その男の人を見る光石の顔は、怖いくらいに無表情だった。

「光石、なんだよ、デートかよ」

男の人はそう言うと、じろりと私を眺めてきた。

すると光石は、ずっと私の腕を取り、そのまま自分の後ろへと引いた。

私の視界一杯が、光石になった。

「おまえはいいよなあ。仕事ができなくても、その顔で上司にへらへらしてりゃ、出世できるんだから」

その言葉に、私たちの周りにいた人も、ぎよっとした顔をした。男の人には、連れの女性がいた。

その人は男の人に何か小声で言いながら、服の裾をぐいぐいと引っ張っていた。

「おまえな、光石。いつまでもいい気にいるなよな」

ゴミみたいな捨て台詞を言うと、その人は側にいた女性を、今度は自分が引っ張るようにして立ち去った。

とんでもないことに、その人が去った後も、その人が残した負の余韻がこの場には漂っていた。

誰一人しゃべらず、不自然にしんとしていた。

たった一人の悪意を持った言葉が、私たち二人だけでなく、その場にいた多くの人の心も傷つけたことを感じた。

「さあ、さあ、入ろうか。ほらほら、せっかくだからいい席を探さないでさ」

光石はそう言うと、私たちの隣に並んでいた老夫婦に、「上映、楽しみですね！」と明るく声を掛けた。

その途端、今まで重く漂っていた負の空気がぱっと晴れた。

光石の言葉により顔をほころばせた老夫婦からそこにいた人みなに伝染するかのように、リラックスした空気がさーっと広がってしまったのだ。

再びあちこちで、人が話す声が聞こえた。

「百万人の孫」光石の威力は、健在だった。

私は光石が誇らしかった。

そう思う権利はないのかもしれないけれど、そう思ったのだ。そして、そんな光石を好きでよかったと思った。

会場はまだ明るく、私たちは見やすそうな席を選んで座った。
上映までは、もう少しだ。

「プラネタリウムって、久しぶりだなあ」

光石がそう言いながら、入り口で受け取ったちらしを見だした。

「小さい頃は、よく来たの？」

「うん。健也や天野とさ」

「ああ、そうなんだ」

「光石ってさ、確かUFOも好きだよな」

「うん、大好き」

その光石の鼻血ものの笑顔に、胸がきゅんとした。

ほんと、いい子だなあ、光石。

そして、さっきの人の言葉も、光石には何のダメージも与えていないと思え、ほっとした。

私は光石から視線を逸らすと、会場内のあちこちを眺めた。

すると、彼氏と並んで座っている可愛い女性のかような髪が目に入った。

肩まで伸びてくるんとしたその髪は、綺麗な栗色に染められて、見るからに女の子していた。

そんな髪を見ると、私は大昔に光石から「褒めてられてしまった」自分の髪を思わずにはいられない。

私の髪は小さな頃から襟足につかない程、さっぱりとしたものだった。

小学四年生の時のことだ。

掃除をサボっている男子を注意したら、「おとこ女の癖に」と言われたのだ。

その場では、その子のお尻を箒で叩いて終わったけれど、その言葉は私にとってかなりショックだった。

髪が短いことに関して何も思っていなかった自分とは違い、他の子からは（男子からは）そう見られていたのだと知ったからだ。

しかも、その男子が「おとこ女の癖に」と言った時、丁度雑巾を洗ってきた光石が教室に入ってきたからだ。

一番聞かれない人に聞かれてしまう、というよくあるパターンを私は怨んだ。

——そして、最悪の事態がおきたのだった。

掃除の最後に、光石と二人でゴミを焼却炉に運んだ時、私は光石に「褒めてられてしまった」のだ。

「里垣の髪の毛っていいね」と。

「うちの田舎で見た夜の空みたいに真っ黒だよ。短いのも似合っているよね」と。

羨ましいな、とまで光石は言ったのだ。

そう言う光石の髪は、薄茶でサラサラで、しかも私よりも少し髪が長かった。

褒められながらも、みじめだった。

子どもながらも、それは彼の気配り故のものなんだってことが、わかったから。

光石は私を、慰めようとしてくれていたのだと、わかったから。

「ありがとう」と言いながらも、私は傷ついていた。

もしかしたら、「おとこ女」って言葉よりも、傷ついたかもしれなかった。

だから、助かった。

私が箒で叩いた男子が、二度とその言葉を言わなかったことに。

もしまた言われていたら、私は泣いてしまったかもしれないと思うからだ。

その子の言う「おとこ女」だけでなく、光石からの褒めの言葉を、その場のみじめさを思い出して……。

そして今、二十年近く経っても、私の髪は同じ年の女の子としては珍しい程真っ黒で、しかもショートヘアだった。

気配り故の言葉でも慰めだろうと、それがみじめな場面だったにせよ、「光石が褒めてくれた」それは私にとってはとても大きな事実だったからだ。

自分でも矛盾していると思う。

実は何度か、髪を伸ばしたり染めたりしようと思ったことはあった。

けれど、その度に、ギリギリで考えを改めた。

つまり、そうなのだ。

私にとって光石からの言葉というのは、その裏にどんな意味があったとしても、思いがけず降ってきた流れ星のようなもの——つまり宝物だったからだ。

そう思ったところで、ベルが鳴り、場内が徐々に暗くなりだした。

光石が楽しみにしているプログラムが、始まる。

「ちょっと、里垣。大丈夫？」

上映後、不覚にも泣いてしまった私に、光石はハンカチを差し出してきた。

泣いてしまうプログラムだという前評判があるのは知っていたが、私の計画では泣くのは光石だった。

そしてハンカチを差し出すのは、私だった！

なのに、まだ会場は完全に明るくなっていないというのに、光石はめざとく私の役目であるハンカチ渡しをしてきたのだ。

「大丈夫、大丈夫」

光石のハンカチで鼻水混じりの涙を拭くなんてことは出来る筈もないので、私は光石に渡すはずだった、新品のブランド物のハンカチをバックから取り出し使った。

大失敗。

「ともかく……凄いやね。七年も」

「うん、凄かったな。うん、面白かった。ありがとな、里垣」

光石は、はあとため息をつくと座席のリクライニングを戻した。

私は涙声になるのが嫌で、その光石の言葉に無言で頷いた。

七年か、と思う。

それよりも長い間、私は光石に片想いをしているんだなと思った。

「プラネタリウムのお礼に、夕飯を奢るよ」

席を立ちながらそう言った光石の申し出を私は断ろうとしたけれど、これが最後なんだからと思い、「割り勘なら」と言って笑った。

すると途端に光石は渋い顔をしてきたので、私は再び笑ってしまった。

呪文にかかったプリンセス（後編）

食事は、プラネタリウムが入る建物のすぐ側にあるホテルのレストランですることにした。

レストランは上階にあるので、エレベーターに乗った。

豪華なエレベーターに乗りながら、おしゃれをしてきて良かったなあと、しみじみと思った。

「いただきます」

二人で声を揃えて、食べだす。

「ひゃあ、綺麗だね」

家ではまず作らないであろう（少なくとも私は）、繊細な前菜のテリーヌとかゼリー寄せとか、そういったものに思わずそう声が漏れた。

「プロだね」

これ、何層にもなっているよ、と光石もそう言った。

広々とした空間には、天井からのおしゃれな照明が垂れ下がり、まるで祝福されたかのような光が私たちのテーブルにも注がれていた。

ワイングラスも、その中の黄金色したワインも、キラキラと輝いている。

夢のようだった。

「里垣の家の店、どうなの？」

光石が訊いてくる。

「うん、まあ、なんとか」

私は、両親がやっていた学校そばの文房具屋を、引き継いでやっていた。

そんなお店だから、劇的に売り上げが上がるとか下がるとか、そ

ういうことはない。

まあ、量販店に比べると確かに値段は少し高いわけだけど、ノート一つとっても種類を多く置くようにしたり、または登校前にも買えるようにと朝早くから店を開けたりしているわけで。

「一人だと、大変でしょ」

これだよ。

この一言が、優しさが、女子を唸らせる光石マジック。

「でも、もう慣れたから」

そもそも私が店を継いだのも、両親が他界したためだったのだ。

それに、一人だからこそ、なんとか生活できているっていうのもあるかもしれないし。

「里垣は、本当はやりたいことあったでしょ」

またさ、こういうこと言うかなあ、光石は。

「まあ、今も同じようなものよ。なんだかんだいって、文具や画材に囲まれているわけだし」

「絵画教室を開くとかは？」

「とんでもない」

「勿体ない」

親に甘えさせてもらって、私は美大に進んだ。

運よく、一発合格で、そこんことは親孝行だったんだろうけど、大学卒業間近に起きた事故で両親を失い、本当の意味での親孝行をする間はなかった。

やれ葬儀だ、やれ墓だ、やれ財産処理だなど、やれのオンパレードのここ数年だった。

そしてふと気がつくと、私もそれなりのお年頃になっていて、両親がいないことで心配をしている伯母たちから、「彼はいるのか」とか、「結婚はどうするのか」とか、そういったある意味ありがたいお言葉を掛けられるようになったのだ。

そして第三者からそう問われた時、ああ、私もいつまでも同じ場所に立ってはいけないうな、と思い始めたのだった。

片想いにだって、リミットがあるのだと。

ということで、体当たりで臨んだ今回のことだった。

ご近所の皆さま、および幼なじみたちへの綿密な聞き取りの結果、とりあえず今は光石には決まった相手がいないと知ったから。

だったら、誘ってもいいかなあって。

たった一日、一回きりのことだから。

「へらへらしている、かあ……」

そう言つと光石が、まいるよなあとつぶやいた。

それは、さっきの男の人が言つた言葉だった。

「ああ。……あの人、仕事関係の人？」

光石に恐る恐るそう聞くと、「うん、先輩」という返事が返ってきた。

「せ、先輩？」

同じ銀行の先輩（つまり、人生において光石の先を歩く人ってわけだ）が、後輩に、しかも休日になんかことを言つなんて。

「それは……辛いね。お互いに」

言われる光石も辛いだろうけど、そんなこと言つちゃう先輩も、つまりが辛いつてことなんだろうから。

「うん、そう。辛いよね、お互い」

光石は、「ごめん、ごめん。暗くしちゃつて」と言つと、再び食べだした。

「うーん。そっか。へらへら、かあ。そういえば私も、言われたことあったなあ。美大で、同級生にだけど」

パンをちぎりながら思い出した。

「『里垣はへらへらした顔して、卒なくいい評価もらつて。ほんとは、あんた私の事見下してんでしょ』って」

へらへらしているって見られるのはキャラクターの問題なのかな

あ、と私は言った。

「本人は別にへらへらした気持ちも、卒なく課題をクリアしているわけでもないのに、他の人から見ると何の苦労も努力もないように見えるのかなあ」

そういえば、小学生の時もそんなことがあった。

私の思いが伝わったかのように、「里垣の絵、酷いことになったもんね」と光石が言った。

図工の時間に、先生に絵を褒められたことがあった。

すると、休み時間の少し席を空けた隙に（図工の時間はたいてい二時間続いていたので途中に休み時間が入ったのだ）、筆を洗う水入れが私の絵にぶちまけられていたのだ。

—— 正確に言うと、それだけじゃなかった。

絵の端には、小さく走り書きで「ヘタクソ」って書いてあったのだから。

犯人は出ず。

見ていた人もいなければ、やった人もいないという、まさにイリユージョンな出来事があったのだ。

しかも、あれは私だけでは終わらなかった。

「確か、山岸さんもだったよね」

私がそう言うと、光石も思い出したのだろう、なんとも言えない顔をした。

そう、次の図工の時間には、クラスでも人気のあった可愛い山岸さんの絵も、同様な目にあったのだから。

あつ、と思い出す。

あれは、そうだ。

確か山岸さんも、褒められたのだ。

私の目の間に座る、優しき光石に。

それとも思い出し、ここで山岸さんの名を出すのはまずかったなあ
と後悔した。

さっきのあの光石の顔は、そのことを覚えていることを示してい

たから。

結局やられたのは、私と山岸さんだけだった。

山岸さんの絵がやられたのは、光石に褒められたからかもしれない……。

思うにあの時期、きっと何かしらの事情でクサクサしていた誰かがいたのだろうと思う。

「あの時も大学の時も、私や、それに山岸さんだって辛かったけど、そうした人や、そう言った人も辛かったんだろうなって」

誰かのことを無視できないくらいに気になり、何かアクションを起こすことで傷つけようとして。

でもそうしながらもきつと、そうしてしまった人の心のどこかも（もしかしたら本人も気づかないところかもしれないけど）傷ついていたんだと思った。

だって、そういった嫉妬や羨望といった気持ちは、私の中にもあるものだから。

馴染みのものだから。

自分のこととして、知っている感情だから。

「里垣は、昔からそうだよな」

「何が」

「受け入れ体質ってやつ」

「受け入れ？ ……どこが」

私がそう言うと、光石は笑った。

「真似したもん」

「受け入れ体質を？」

「うん。真似っていうか、同士というか。ああ、僕も頑張ろうって」

「光石が？」

「うん。そりゃ、今はともかく、小学生男子にしてみれば、女子に

人気があるより、男子に人気があったほうが嬉しいし、生きやすいし」

生きやすい、という言葉に、さっきの先輩からの暴言を思い出した。

確かにきつい、と。

しかし、光石の今の言葉に、私はちよつと引つ掛かりもした。言つたよね、今。

「女子に人気があるより」って、さらりと言つたよね。

そつか、自覚あるんだ。

っていうか、あつたんだ。

つい笑ってしまった。

「あ、笑っているし。本当なんだから。僕さあ、小学生の時に上履き何足ダメにされたか」

「え、それ、ほんと？」

何度か同じクラスだったけど、それは聞いたことがなかった。

「うん。それを天野が知ると、また面倒でさ」

天野つてば、僕より熱くなつて、と光石が言う。

「健也がさ、自分が来校者用のスリッパを履いて、僕に自分の上履きを貸してくれるんだけど、あいつでかいからさ、上履きがぶつかぶかで」

私はその様子を思い浮かべた。

体中で怒っている天野や、そんな天野の横で現実的な問題として上履きを光石に貸す健也のことを。

「大変だったんだね。でも、よかったね、二人がいて」
そう思った。

「うん。あいつらがいて、本当によかった。友だちつて大切だよ、特に子どもの頃はさ。結局三人で犯人見つけて倍返ししたわけだし」

いいな、天野に健也。

光石に、大切だなんて、思われて。

きつとそうやって、あの二人は光石の中に居続けるんだろうから。

羨ましいなほんと、と思いながら、あれ、今、また何やら聞き捨てならない台詞を聞いたような気もした。

「えっと。……ば、倍返し？」

聞き間違いだろうか、と思い光石に聞き直す。

「うん。三倍にはならないように、頑張って気をつけたけど」

「……三倍……」

「うん、その加減がね、難しいよね。恨みをかわないように、こっちは全てお見通しなんだってアピールも兼ねて。ともかくもうこういった事はしても無駄なんだと、相手にわかってもらえる加減っていうのかなあ」

「……か、加減」

私、酔ったのかもしれない。

光石の言う言葉が、どうも「光石」と繋がらない。

私は、あははは、と作ったような笑顔を光石に向けると、光石もにつこりと笑っていた。

おいしい食事に食後のデザートまで大満足だった私たちは、レストランを出るとエレベータに乗り、ロビーへと下りた。

「あれ」

光石はそうつぶやくと立ち止り、「ブライダルフェア」なんて看板の方向を凝視していた。

「……おや」

そこには健也が、弓高 健也がいた。

そしてその隣には、どっかで見たことあるような女の子が立っていた。

二人は、そこに置いてあったパンフレットを取ると、ロビーにあるカフェへと入って行った。

光石と私は顔を見合わせた。

「結婚するの？」

光石に訊く。

光石は肩をすくめたあと、「そうとしか、考えられないね。健也の性格上」と嬉しそうな声で言った。

「結婚するの？」

ロビーを歩きながら、今度は光石が訊いてきた。隣を歩く光石をぱつと見る。

「結婚するの？ 里垣は」

ああ、これだから近所さん情報ってやつは。（まあ、自分だって今回それを利用したわけだけど）

そんなに近くはない、うちと光石の家だけど、私の家は仕事の性格上半公共的立場でもあったから、噂になりやすいのだろう。

「……まだ、決めてないけど。お見合いして、何回かは会った。伯母から勧められた人だった。」

お見合いして何回か会ったってことは、世間では結婚の意志ありというんだろ。

「なんで、お見合い」

「なんでかなあ、縁もなかったし」

確かに大学の時も、好意をもってくれた人はいたけれど、つまりは今は一人だし。

「里垣のガードが、固いからじゃないの？」

「ガード？ まさか、そんなこと言われたことないし」

言われてみたいよ、とおちゃらけて言う。

「ふうん。じゃ、なに、僕にだけガードが固かったってこと？」

僕にだけ？

意味が分からず、光石の顔を覗きこむ。

「全然、相手にされなかった。小、中、高と」

「私が、光石を？」

「うん。だから、今日、誘われて、すげー驚いた」

光石の口から「すげー」なんて言葉を聞き、こっちこそ「すげー」驚く。

「……私、誘われたっけ？」

「誘った。小学生の時は、クラスのお楽しみ会でのグループに。中学の時は文化祭の委員に。高校では生徒会立候補の時の応援演説に」

「……確かに、そういった意味では誘ってもらったけど。でも、小学校でのお楽しみ会のグループ作りなんて、光石ファンの女の子が殺到していてそんな雰囲気じゃなかったし、中学の時は委員をやりたいたい女の子がいたからその子が適任だと思ったし。それに、生徒会の演説なんて、そんなの私にできるわけないって……え？」

私の返事に光石が、「ほらね」と言った。

「別に、そんな立派な演説をして欲しいわけじゃなくて。……口実だっていうのに。全部、全部、ぜーんぶ、口実。なのに全く里垣には伝わらなかった」

「口実」

「そつ。今日の里垣と同じ。無料チケットなんて、嘘でしょ」
途端に顔が赤くなる。

「……ばれてる？」

「しかしなあ、せっかく、里垣に誘われたっていうのに、あのクソ野郎に会うなんて」

クソ野郎。

それはもしや、さっきの先輩のことでしょうか。

「光石、その言葉使い」

光石ってば、全然アイドルの発言じゃない。

「百万人の孫」が聞いてあきれる。

そして思った。

この目の前にいる人は誰なんだろう、と。
まるで初めて出会った人のような気持ちになった。

もし、小学生の時にクラスのお楽しみ会で同じグループに入っていたら。

もし、中学の時に文化祭の委員と一緒にしていたら。
もし、高校で応援演説を引き受けていたら。

もっと早くに、今みたいな光石の言葉を聞くことが、できたんだろうか。

アイドルじゃない、本当の光石の側に。

私にとって、空の星のように遠かった存在の光石じゃなくて、多分驚くほど傲慢で欠点の多いだろう光石の近くに。

「その髪の毛」

光石はそう言う、私の髪を――耳の上あたりの髪を、撫でた。

「伸ばさないの、僕が言ったからでしょ」

私の黒くて短い髪のことを光石が言う。

「だから、受け入れ体質だっていうの」

私がずっとこの髪でいることも、つまりばれてたってこと？

「里垣。見合いで結婚するなんて、嘘でしょ」

光石の眼差しが揺れた。

その揺れに、光石の少しの弱さを感じた。

「……嘘だつて言ったら、いいことある？」

私がそう言う、
「僕にはいいことがあるけど」と光石は、ポケットからカードキーを出すと、それを片手でひょいと私の目の前に

差し出してきた。

「里垣次第」

私は五秒ほど、一体どういう意味なのかと計りかねたあと、絶句してしまった。

「ほんと……猫かぶりだ」

私の小さな声に、光石が笑う。

「里垣の前では、脱ぐからさ」

その光石の二重の意味に、びっくりした。

……もう。

「私は、高くつくんだから」

顔を赤くしながらそう言うと、「大丈夫、ばっちりローンを組むから」と光石は言った後、とっても嬉しそうな顔で笑った。

呪文にかかったプリンセス（後編）（後書き）

この物語は<http://aruh1n0n1wa.koborezakura.com/100t/index.html>「みんな
で100題」中の「085:姫君」として書きました。

お友だちプリンセス

友だちの友だちは、みな友だちだ。

小学一年生になるまえに友だち百人できていたという伝説の男、
奥田^{おくだ みどり} 緑の携帯のアドレスは、とんでもないことになっている（らしい）。

「これ、限定のスイーツじゃない」

私が歓声を上げると、緑は「友だちからもらったあゝ」と間延びした声で言った。

「ああ、友だち、ね」

はいはい、と返事をする。

緑と私のつき合いは長い。

それは、幼稚園に上がるまえの、公園デビューのときまで遡る。人見知りが激しくて、公園に行っただけはいいものの、入り口で固まってしまい何度も母を泣かせていた私を見つけてくれたのが緑だった。

ある日砂場にいた緑は、例のごとく入り口で固まる私に向かい歩いて来たかと思うと、左手で私を掴むとずんずんと砂場まで歩き出したのだ、そうだ。

ちなみに、その右手には緑の大事にしていた緑色のバケツがあったらしい（「緑」なだけに）。

「多香子が、公園で遊べるようになったのも緑君がいたからよ」

母にとっては最高のファーストインプレッションを得た緑は、それ以来、我が家での待遇はVIPだ。

家族でもないのに、こうして当然のようにリビングにいるのもそんなわけ。

何事も最初が肝心なんだと、この事実から私は教わった。

とはいえ、私はやっぱり愛想なしで、なかなかこの恩恵には授かれていない。

友だちだって、緑の力添えがあったとはいえ、私にはなかなかできなかつたからだ。

そういう意味で、本当に緑は貴重だ。

緑がいなかったら、こうして限定スイーツも食べることができなかつたわけだし。

口に出しては言わないけれど、心の中ではとても緑に感謝をしている。

昔は、緑のその友だちの多さに圧倒された私だけど、そんな友だちの多い緑だからこそ、私とも友だちでいてくれるんだとも思っている。

私の友だちへのハードルと、緑のそれとは高さが違うのだと。

そして、そのハードルが低い緑だからこそ、私とも友だちになつてくれたのだと。

「たあこ、おいしい？」

緑がにこにこしながら訊いてくる。

「おいしいよ」

私がそう答えると緑が笑った。

緑の家は、画廊を経営している。

サラリーマンだった緑のお父さんが、ある日一枚の版画と出会い脱サラをして始めたそうだ。

緑に負けず劣らずフレンドリーなお父さんは、会社時代のコネクションや版画への学びに対する真摯な態度が評価され、画廊運営は順調なようだった。

そしてそんな環境で育った緑も絵が大好きで、昔は自分でも色々と描いていたけれど、今ではそのお父さんのもとで働いているのだ。

ということで、緑の携帯のアドレスは、とんでもないことになっている（らしい）。

芸術家さんは勿論のこと、パーティーやなんだでお友だちになったモデルさんや芸能人で埋まっている（らしい）。

らしい、というのは、直接見たことはないからだ。

緑との会話の中で、そういったことが伺われる、ということだ。

そんな華々しい中に、普通のOLしている私の名前も入っている。

緑のアドレスは、玉石混交だ。

「高田さん」

びくつとしたのがばれないように、そつと息を吐いて声をかけてくれた人に振り向いた。

「大石さん」

大石さんは、会社の一つ上の先輩だ。

「あの話、どうなったかなあ」

照れるような顔で大石さんは訊いてきた。

「あ、大丈夫です。メール、送ろうと思っていましたが」

「そっか。ほら、白田さんっておとなしいから誘いにくくて」

大石さんは、私と同じ課の白田 萌子嬢に気があるようで、今度大石さんの同期であり私の大学時代の先輩でもある山田さんと四人で食事に行かないかということだったのだ。

大石さんはしきりに私に頭を下げると、じゃ、と顔を赤くしながら去って行った。

ふうと深呼吸した。

青春だなあ、と思った。

そして、誰かを想い顔を赤くするなんて、そんなこと本当にあるんだなあ、と感動した。

更に、なんたることか、人ごとなのに、胸がドキドキとしてきた。

はつきりいつて気が重かったこのことも、色恋とは全く縁のなかった私にとっては、貴重な体験だとも思えてきた。

人さまの恋路だけど。

どうなるのか、見てみたいとも……。

「えゝ、やめなよお」

緑に食事会の話をしたら、そんな反応が返ってきた。

「え、なんで」

四六時中、食事会をしている緑にまさかそんなことを言われるなんて、思いもよらなかった。

「そんなグループでなんて、しかも、たあこをそんな駒に使うなんて、失礼だ」

珍しく緑が怒りだした。

怒りながらも、お好み焼きをつつく手は休めないが。

会社帰りに緑からもらったメールで、私たちは近所のお好み焼き屋さんに来ていた。

「失礼、ねえ」

私も負けずに、お好み焼きをつつきながら、そう言った。

「でも、ちよつと面白そうだし」

私の答えに、緑からブーイングがきた。

「その大石って人、気があるなら自分で誘うべきだよ。なんか、そういうのって騙し討ちみたいで、嫌いだな」

嫌い！

「……緑でも嫌いなことって、あるんだ」

私がそう言つと「え、僕、嫌いなことばっかりだけど」と意外な答えが返ってきた。

「緑が」

へえ、と思いながら、今度はたこやきを串で刺すが、そのたこ焼きには緑の串も刺さっていた。無言の攻防戦が始まる。

うりうりと串同士の熾烈な戦いの結果、私は半分に切れた「たこなし」しか取ることができなかった。

一方、たこの入った半分を頬張る緑は、「ああ、たこ、おいしい」なんて幸せそうな顔をした。

お好み焼きと、たこ焼きと、数杯のビールですっかり気分がよくなった私たちは、足取りも軽く家へと向かった。緑の家は、うちの家から二十メートルも離れていないところにあった。

だから、近所でご飯を食べた後は、夜風に吹かれてふらふらしながら楽しく一緒に歩いて帰ることができるのだ。

二人で変なダジャレを言いながら住宅街を歩いていたら、とあるマンションが見えてきた。

そして、そのマンションの一部屋を狙うようにしてカメラを構える人の姿があった。

「あ、あつれえ」

緑が声を上げながら、その男の人に近づいた。

その男の人はびくつと体を震わせた。

「こんばんは！」

緑が言つと、その男の人はカメラを持ったままで、ふいと横を向いた。

「なにしてんのかなあ」

緑が訊いても、その人は答えない。

けれど、この人が何をしているのか、それは私にはわかっていた。

このマンションには、とあるモデルの子が住んでいて、その子は最近ちよつとしたトラブルを起こし週刊誌をにぎわしていたからだ。

無断で生活を撮影されることって、有名人なら仕方がないのだろうか。

よく、そういった人たちが屋上やベランダに出てきた姿をテレビで流されることがあるけれど、それに嫌悪感を抱く自分と、番組として成立しているのだからこれってありなんだろうなとどこか麻痺しちゃっている自分が半分半分でいる。

すると突然、カシャという音がした。

見ると、緑がその男の人の写真を撮っていたのだ。

「ボクんち、探偵なんだ」

はあ？ いつからよお、と啞然とする。

「だから、今度あなたの家を調べて、おうちの写真、取りに行こうかなあ」

その緑の言葉に、男の人が慌てたような素振りをみせた。

「え、嫌だ？ ふーん」

そう言いながらも、緑はもう一度その人の写真を撮った。

「ママから、自分がやられて嫌なことは、人にもやつちゃ駄目ってよって、言われなかった？」

緑の言葉に、尚ももごもごとその人は何かを言っていた。

「……それにあなた、それ、仕事じゃないでしょ。だったらやめときな、一度やると、戻ってこれなくなるよ」

緑のその言葉に、その人だけじゃなくて、私もはっとした。

緑の言葉の何に、はっとしたのかわからないけれど、今、緑は凄いいことを言ったと思ったのだ。

幸いにも、その人も何かを感じたのだろう。

緑の目の前で、カメラの操作をする（おそらく映像を消去したものと思えるけれど）、無言でその場を立ち去った。

緑は、ふうとため息をつく、私の方ににこにことした顔で歩いて来た。

その緑を見て、私は雷に打たれたような気持ちになった。

「……どうしよう」

そうつぶやいた私に、緑が「ん？」という顔をしながら近づいて来た。

「私、緑のことが好きなんだ」
すると、ぴたりと緑の足が止まった。

その緑の様子を見て我に返った私は、その場からずりずりと後ずさりをした。

そして、右手を前に出し、手の平を立てぐいっと緑に向ける。

「今のなし」

ほんと、一体何を口走っているのだから。

「なしなしなし」

そう言いながら、再び後ずさる。

なんてことを言ってしまったのだらうと、後悔した。

しかもよりによって、このマンションの前で。

そう、一時期緑はそのモデルさんとお友達以上の関係だったのだから。

それに、こんなことで、緑との友情を失うのはごめんだった。

いや、しかし。

もう、だめか。

だめだろうな。

友だち百人人間の緑だったけど、唯一友だちにはならない人たちがいたのだ。

それは、明らかに自分に好意を寄せてくる女子のみなさんだ（まあ、男子もいたかもしれないけど）。

関係がフェアじゃないから友だちにはなれない、と言っていた。

ああ、人と人の関係って、なんて脆いのだろう。

ああ、もう、緑からのおこぼれの限定品スイーツも食べることができないのだ。

ああ、こんな風に千鳥足で、飲んだあと一緒に帰ることもできないのだ。

ああ、時間を巻き戻したい。

「ちょっと、ちょっと」

焦ったように緑が私に向かって早足でやってきた。

うわあ。

聞きたくない。

わかった、わかったから、もう、友だちやめますから、だからみ

なまで言うなつて。

逃げなくては！

逃げろー！

私は、思いつきり緑がいるのと反対の方向に走り出した。

大人になつてから、こんなにも勢いよく走つたことなんてないなあと思ひながら。

体が重い。

でも、気持ちよくもあつた。

ふっ切る、という言葉が浮かんだ。

「緑とのことは忘れるのだ」と思ふ自分と、合っている言葉だと思つた。

しかし、そうカッコよくもいかなかった。

アルコールが、変なふうに戻つてきたからだ。

足がよれよれになつてきた。

心なしか、走りも蛇行しているような氣もした。

緑道までどうにかたどり着いた私は、そこにあつたベンチに座つた。

息が上がっている。

ビール臭い息が。

はあ、はあ、はあと肩で息をしながら、これからのことを思つた。

ともかく、大石さんの件は断ろうと思つた。

後悔したけど、この私にだって言えたのだ。

男で年上の大石さんだって、やっぱり自分で行動を起こすべきな

のだ。

思えば、当人である白田 萌子嬢だけが、その集まりの趣指を知らないというのは、フェアではない。

私は、簡単に「恋」を間近で見られる機会だなんて思ったけれど、今思うとあまりいい趣味ではないとわかったから。

—— 自分がやられて嫌なことは、人にもやつちや駄目
緑は正しい。

「や、ややや、こんなところに」
同じく、ぜいはあと息を弾ませながら、緑がベンチの後ろに立った。

「……追いかけてくるなんて」
振り向きながら、びっくりして緑を見た。

「ウオ、ウオ、ウォーター」

緑はそう言う、側にあった自販機に飲み物を買いにいった。

そして、緑は本当に水（お茶でも、ジュースでもなく）を買って戻ってきた。

しかも二本。

緑はくるとペットボトルのふたを緩めると、それを私に渡してきた。

「ありがとう」

緑のお陰で、開けやすくなったふたを外すと、私はごくごくそれを飲んだ。

「ウォーター、って感じだね」

すると緑もごくごくと飲んだあと、「うん、ウォーター、って感じだよ」と言った。

「この間」

緑が、水を再び一口飲んだあと話した。

「この間さ、大学の時の友だちと飲んで」

緑は美大に進んでいた。

「その中の一人の子がさ、『奥田くんってモデルさんとか知り合い多いでしょ』って言うてきて」

一体どんな話なんだ、と耳を傾ける。

「そしたら、お願いがあるって」

お願い。

「どこでどんな服を買えばいいのか教えてほしいって服！

「女の子の、服？」

「うん、女の子の服」

「緑が」

「うん、僕が」

へえ、と思いつつ、その子もなかなか目の付けどころがいいなあと思った。

緑の服のセンスは、ちょっといいから。

「でもさ、服を選ぶのはいいんだけど、ちょっと理由が気になるでしょ」

「まあ、そうよね」

「だから訊いたんだ。それ買ってどうするのって」

「そりゃ、着るんでしょ」

「誰の為に」

「あ」

「そしたらさ、ずっと好きな人がいて、その人と最初で最後のお出掛けをするために着たいんだって」

「……なんか、古風だね」

「うん。だからさ、出かけるだけじゃなくて、押し倒せって言ったわけ」

「また、過激な事を」

「はは。そうしたら言われちゃった。欲しいのはそんなものじゃないって。拒まれなかったとしても、それは受け入れられたって意味じゃないって」

「ああ、うん」

「その場では、その子に、ばかだなあとかいろいろと言ったんだけれど、言いながらもわかっていたんだ。彼女の言葉は、僕にとっても真実だなあって。っていうか、そのことを彼女と同じように僕は知っているじゃないかって」

緑はそのあと少し黙り、そして「一番フェアじゃないのは、僕なんだ」と言った。

にわかに緊迫してきた空気に耐えきれず、私はペットボトルに口をつけた。

「ずっと、たあこのことが好きだった」

口に入った水が、体内に入らず、体外へと放出された。

「ちょっと、たあこ、汚いなあ」

「や、ごめん。つい、口から水が」

しょうがないなあと、緑がしゃがんでハンカチで私の服を拭きだした。

そして「同じで、いいんだよね」と、顔が見えない緑が訊いてき

た。

「たあこも、僕と同じ気持ちって思っていていいんだよね」

こっちが答える隙もないほど続けざまに、緑は訊いてくる。

顔が赤くなるって、こんな瞬間なんだなと思った。

「うん……うん」

そう答えると、緑は無言で立ちあがった。

私はベンチに座っているわけだから、そうなるとやけに緑が大きく見える。

「もう、友だちじゃないね」

緑が言う。

その言葉に、私は少し淋しい気持ちにもなった。

「友だちでもいたい」

私の言葉に緑は唸った。

「だって、緑は私の初めての友だちだし」

私の言葉に、緑がはっとした顔をした。

「うん、そっか。……じゃ、たまに友だちね」

「たまにって」

「ほら、たとえばたこ焼きの争奪戦したり」

「うん。ああいうの、好き」

私がそう言うと、緑は私の手をひいて立たせ、そのまま抱きしめてきた。

「……こーいうのも好きになって」

緑の言葉に私は「うん」と言うと、私も緑を抱きしめた。

するりと手の中から何かが落ちた。
ゴンと音がする。

「あ」と緑が言う。
そして私も「あ」と言う。

緑の後ろで跳ねる水。

ペットボトルの水は、緑の背中と足元を濡らしたのだった。

「たあこ、あの子、上手くいったってさ」
数日後、緑が嬉しそうにそう言うてきた。

「あの子って、服の子？」
「そうそう、服の子」

ああ、そうなんだと、人ごとなのに幸せな気持ちになった。
人ごとといえば、私から食事会を断られた大石さんは、果敢にも
直接白田萌子嬢にデートを申し込み、……お断りされたそうだ。

世の中、ままならない。

でも。
だからこそ。

「たあこ、ほれほれ行くぞ」

あたりまえのように差しだされた緑の手に、私は自分のを重ねた。

見つけた気持ちを、大事にしたい。

見つけた人を、大切にしたい。

繋いだ手は温かい。

二人分の体温。

きっとこれは、幸せの温度なんだなって思った。

おひとりさまの縁台事情（上）（前書き）

サイトで行ってた投票に対するお礼の物語です。

『5時の鐘が過ぎて』 / 『子どもの時間を過ぎて』の関連話です。

おひとりさまの縁台事情（上）

縁台を出して夕涼みをしていたら、三つ下の妹の知紗江が男連れで帰ってきた。

まあ、珍しくもない光景だけど、面白くもない光景だ。

この姉を差しおいて、あんまりさかるんじゃないって思いは、やっぱありますよ、人間だもん。

とはいえ、姉にできる精一杯で手に持っていたビールを掲げ、余裕をかましたお疲れさんってなポーズを決めてみる。

ビールはね、ほんまもののビールですよ。

正真正銘のビール。

いつも飲んでいる、お手頃価格の従兄弟さんたちではありまへん。

たまには奮発して、自分をいたわる日もないとね。

「あ、お姉ちゃん」

知紗江は私に右手を振ると、隣の男を見上げて何やら話している。

やれやれと、おもむろに団扇で顔を仰ぐ。

団扇の中で金魚が揺れる。

ほらほら、金魚だっていい迷惑よ。

暑さだけでなく、熱さまで仰がないといけないなんてさ。

心の中でそうばやきながら半開き目のでパタパタしていたら、いきなり知紗江の男が私に視線をロククオンしてきた。

ああ、なんですかあ？

喧嘩売ってきますかあ？

「みやこさか 都坂 わか 和歌！」

知紗江の男が、いきなり人をフルネームで呼んできた（しかも呼び捨てだぞ！）。

「どちらさまで」

おまえさんに名前を呼び捨てされるいわれなどないと、キリッとした顔で私は睨んだ。

「嘘みたい。ほんと、変わってねえ」

けらけらと笑う男の隣で知紗江は苦笑いをしながら、「申し訳ない、成長のない姉で」なんて男に愛想を振りまくと、「お姉ちゃん、覚えてないかなあ。彼、村本 栄一郎くん。ほら、小さい時児童館で遊んだ」と言ってきた。

「うーん。エイイチローって。……フナコシ？」

「フナコシって、お姉ちゃん。それは俳優さんでしょ。そんなわけないでしょ。ちがうってば、村本君だよ、ほら、航君と卓球対決をしてコテンパにやつつけた」
わたる

航がコテンパ。

「ああ、あつたね、そんなことが」

段々と思いだしてきた。

ガキの頃からクツソ生意気な航が、道場破りだとかなんとか言っ
て迷惑にもいろんな児童館で卓球対決をしていたときに、あいつの

鼻をガツンと折ってくれた男の子がいたが。

そうか、彼がフナ……じゃなくて、村本か。

「立派な青年になつて」

私の知る彼は、当然のことながら小学生の姿で止まっていた。

そりゃ、そうか。

人は成長するんだもんね。

「今日ね、仕事で偶然会つて、名刺交換したときにお互い『あれつ
つてなつて』」

「そう。みやこざか、なんて名字、あんなたち姉妹以外で聞いたこ
となかつたし」

村本は私を見て、ぷつと吹き出す。

「君ね、フナ……村越君」

「村本です」

「ああ、すまん。フナコシ君」

「……わざとでしょ」

そう言つと、村本は私の縁台に腰かけた。

「ああ、そうか、じゃあ、私はもういいよね。お姉ちゃん、村本君
のことよろしくね」

「はあ？ よろしくつて、あんたのお客さまでしょ」

家の前まで来たのに家に入らず、再び駅にむかおうとする妹の背
に声をかける。

「いや、私のつてわけでも……。それにねえ。これから会社の飲み
会だし」

そうだ、そういえば、知紗江は同じ会社に狙っている（奴はハントーじゃけん）男がいるとか言っていた。
って、ことは。

「知紗江ちゃん、サンキュー」

知紗江「ちゃん」？

この男の気やすさは、なんなんだ。

「ってことで、僕もビールを貰ってもいいのかな、和歌」

おまえ、なんで私は呼び捨てなんだ。

「……まあ、いいけど」と私が言つと、「じゃ、ピザでも頼むか」と、彼は携帯を取り出し電話を始めた。

おひとりさまの縁台事情（下）

暮れゆく夏空を眺めながら、その空に向かい蝉の鳴き声がとけていくさまをみていた

「近所さんの家の窓は空いていて、そこからは話し声や料理をする音に混じりおいしそうな匂いまでやってきた。そんな中でこうしているのが、大好きだった。

東京生まれの東京育ちの私だけど、ここが「ふるさと」だって強く思えるから。

すると、とぼとぼとした足取りで、隣家の美紗緒ちゃんとこのおとーさんが帰ってきた。

心なしか、今日はいつもより帰宅が早い。さらに言くと、哀愁が漂っている。

それに、いつもなら「おう、和歌ちゃん」なんて声をかけてきてくれるのに、今日は「おう」だけだった。

この暑さにやられたのかもしれない。具合でも悪いのかな。

「久しぶりだなあ、ビールを飲むのは」

村本が喉を鳴らした。いつも安いのですましているんで、と。

「あ、同じ」

いざ買うとなるとビールって高いしねと言うと、ほんと手が出ません、と村本が相槌を打ってきた。

意外と話が合うじゃないか。

「でも、まあ、たまに飲むから貴重な感じがするんだよねえ、きつと」

「鋭いつ」

村本にぱちぱちと手を叩かれた。

「で、村越くんは、私に用事があるってことだよな」
うぬぼれとかでなく、まあ、そうなのだろう。

「いま一度言いますが、村本です。そう、仕事で偶然知紗江ちゃんに会って話をしたら無性に和歌に会いたくなつて。つまりさ、俺、小学生の頃ほんと卓球は負けなしかったんだよな」

また、卓球。

「強かったもんね」

「どの口で、そんなことを」

間髪いれずにリターンがきた。

「俺が負けたの、和歌にだけ。しかも、中学生だとかなんとか言つて児童館に来なくなつたし。あれって完全にやり逃げだよな」

ピザのマツシールドが喉につかえる。

「や、や、あんた、物騒なことは言いつこなしたよ。私はね、あんたたち小学生には付き合つていらなかったのよ。勉強もあったし」

そもそも、中学生が児童館に行くことじたいが違ふのだ。まあ、知紗江と仲良しの美紗緒ちゃん二人のお守つてことで、母親に頼まれて何度か一緒に行ったことはあったけど、あくまでそれは「保護者」としての立場だったわけで。

児童館の人にも言われたもんね。

空いているなら使つてもいいけど、基本小さい子が優先だよんと。

小さい子〃君たちだよ、村本。

「だからさあ」

村本がピザに手を伸ばす。

「また、やろうよ」

村本の言葉に、口をつけた缶から唇を外した。

「は？ なにを？ 卓球を？」

「ウィ、ムツシュ」

ムツシュじゃねだろうと、ぐいっとビールをあおる。

「うちの会社の側の体育館でさ、夜間に大人も利用できる卓球場があるんだ。そこならお子さまを気にせずにプレイできるだろ」

「プレイって。そんなことするまでもなく、あんたの勝ちだって。」

私、全然やってないもん。こんな相手に勝ってもつまないでしょ」

まったく、いったい何十年前（そんな昔じゃないか）の話を引きずっているんだ。

「そんなに、私に負けたのが嫌だったんだ」

だったら、勝たせておけばよかったと後悔する。

ついつい、年下の子相手に本気でやってしまった私も青かった。そういえば美紗緒ちゃんも、走るのが航に勝てないってことに、しつこくこだわっていたなあ。

まえに三人でお酒を飲んだとき、そんなことを愚痴っていたっけ。

なにを今頃言ってるんだろうこの子は、と思ったけど、どうやら他にもいたらしい。

「……でも、そう思えるのって、諦めてないってことだね。それって、強い証拠なんだろうなあ。私はさ、そういったこと弱いからすぐに、諦めちゃうから」

はあ、とため息をつく。

そう。今日のビールの原因もそこ。

諦めることを選んだくせに、そんなことをした自分に自己嫌悪なのだ。

だったら、諦めなければいいのに、諦めない自分もなんか嫌だったのだ。

「今さ、私さ、アルバイトなんだけど、そこから契約社員になるテストっていうか、まあ、そんなのがあって。仲間内でも誰が受けるか、受けないかっていう駆け引きもあってさ。そーいうの、なんか辛くなってきた。段々ともうどうでもいいやって気持ちになって。好きな仕事をしているんだから、雇用の形態なんてなんでもいいかって」

なのに、めでたく契約社員の切符を手にした仲間を見ると、平常心ではいられないのだ。

つまり、心の底では、どうでもよく思っていないってことだ。うじうじしている。

「なにくそって気持ちが足りないんだと思う。あと、面倒なことはごめんだとか、落ちたらやだなあとか。……ああ、ごめん。いきなりこんな話を聞かされたら困るよね。で、卓球か。まあ、私でいいならお相手するけど」

でも、ほんと強くないからね、と念を押す。

「それ、わかる」

村本がうんうんと頷く。

「俺だって、ガキの頃の負けた直後だったら、こんなには話せなかった。勿論、和歌が児童館に来たらあれこれ理由をつけて再試合を申し込んだらうけど、もう少し捻くれた申し出になったというかなんて言うのかなあ、村本は視線を遠くに据えた。

「俺も、すごく時間がかかる。面倒だったり困難な場面に直面したとき。気持ちを整理して、立て直して、奮い立たせて、それでようやく行動できるというか。変な見栄とか、失敗したときの怖さとか、いろいろ考えちゃうからさ」まだまだ人生長いのに、これじゃまず

いよね。直さないとなあ。

「でもさ、知紗江ちゃんと会って、和歌の写真見せてもらったとき。ああ、写真って、携帯のね。それ見たら、もう、うわっと思いが蘇ってさ。すげー、和歌に会いたくなってる」

知紗江ちゃんがさ、お姉ちゃんなら家にいるよって言うから、このことついてきて。

「思えばあの頃はさ、男とか女とか年が上とか下とかどこに住んでいるかなんて、そんなの全然関係なく、ただ卓球が楽しくていろんな奴と試合して。すごく自由だった。そういうのさ、最近はないあつて。大人になると、いろんな余計なもんが体中にくっついて頭も体も、上手く動けないって意識があるからさ」

村本は、見かけの割にセンチティブなことを言った。

「和歌を見たら、そんな自由な頃の自分を思いだした。だから、会ってみたいて」

で、おしかけちゃったわけですが。

「……なあんて。ほんとが一番興味があつたのは、知紗江ちゃんの見せてくれた写真通りに、和歌が今でも『中学生のころと同じ顔なのか』ってこと」

村本が人の顔をまじまじと見てきた。

「あれ、なんなんだろうな。写真見た途端に、フルネームおよび、思い出が洪水状に湧きあがってくるあの現象って」

パプロフの犬？ ああ、違うか、って村本が言う。

—— 中学生のころと同じ顔。

村本は知らないだろうけど、中学のころどころの騒ぎじゃないのだ。

「和歌ちゃんは生まれた時から同じ顔」っていうのは、親戚およびご近所さまの知るところだから。

両親には、この縁台でアルコールを飲むときは必ず身分証明書を肌身離さず付けるように言われている。

つまりが、永遠の未成年なのだ、私は。むむむ。

「完全、見た目逆転だね」

そうだ、あの頃は、男の子にありがちな状態として、村本はちびだったし。

「そうだね。親子に見えるかもね」

そんな理由で振られたことも一度ではない。

以前は、それをそのまま言葉通りに受け取っていたけれど、多分、それは違っただろうなと最近では思う。

なにか、他にも足りない点があるのだろう。外見は、理由の一つにすぎないのだろうと。

ひらりと、知紗江なんか軽く飛び越えるハードルの前に、まだ私は立つたままなんだろうな。

「親子か、それは斬新な」

村本は、楽しそうにビールを飲む。

「でも、まあ。楽しそうだし」

へえ、と思って私もビールを飲む。最後の一口だった。

「もしか、村本って、そっち系の趣味があるとか……言わないよね」

私、ひらひらした服とか着ないからね、とくぎをさす。

「は？ そんなこと言うそっちこそ、おやじ趣味とかじゃないよな」

「は？ なんでそんな話に……ああ、そっか」

私がそんなラベルを、私たちに貼ったからだ。

「ごめん。じゃ、全部チャラにして。……で、どうなるんだ?」
話がややこしくなってきた。

「つまりが、卓球でしょ」

村本が言う。

「ああ、そっか。卓球ね」
シンプルだ。

しかし、そうになると、おめおめと負けるのも嫌な気になってきた。

「あ、子どもが飲酒している」

いきなり聞き覚えのある、クツソ生意気な声がした。

「航、あんたは年上を少しは敬え」

縁台からすつくと立ち上がり威嚇すると、航の隣には美紗緒ちゃんがいた。

すつごく珍しいツーショット。

しかも、航の手には菓子折りのような袋がぶら下がっている。

「……あんたたち。なんかやらかしたわけ?」

菓子折り下げたの姿は、小さなころによくあった光景だ。

まさかこの年になって、どこかの窓ガラスを割ったとか、植木鉢を倒したとか、そんなんじゃないだろうけど。

「ああ、まあ、やらかしたっていうか、やっちゃったっていうか」
なあ美紗緒、って航の奴は偉そうな口をきく。

美紗緒ちゃんは顔を赤くしながらも大人しく頷くと、ふと視線を縁台に座る村本に移した。

「え。あの……村本栄一郎君、とか」

その言葉に、私も航もびっくりして美紗緒ちゃんを見た。

「ああ、きみって、知紗江ちゃんと一緒だった、たしか……」

「美紗緒、ほれ、行くぞ。おじさんとおばさん、待ってんだろ」

「ってことは、きみはボクに卓球で負けた……」

「……次は負けないから」

氷のような一言を残し、航は美紗緒ちゃんを引っ張って、なんと美紗緒ちゃんの家へと入って行った。

いやはや。

「村本。なんか、凄いことになったけど」

あたしゃ怖くて、明日からこの町に住めないよ、と村本に言う。

「あ、じゃ、俺んち来る？」

村本が言う。

「父親が、最後のお勤めとかで地方に転勤で行ってそこに母親もついて行って、兄さんは結婚して独立してるし、俺、家に一人なんだよね。家もさ、ここから歩いて二十分くらいだし、ちょうどいい距離じゃない」

遠すぎず、近すぎず。

「その展開、早すぎだから」

「確かにね。今日会って『惚れました！』って言っても、説得力ないか」

飲んでいるしなあと、村本は言う。

展開、早いけど、村本のことは嫌じゃない。

実は、ちよつときめいた。

でも。

「まずは、卓球ね」

そう、まずはシンプルに。

「そうだね、まずは卓球で」

村本もそう返してきた。

「じゃあ、航と練習するかなあ」

村本に対抗するのは、それもいいかもしれない。

「うわあ、それは止めて」

どうやら、この二人はそりが合わないらしい。

それにしても、美紗緒ちゃんまで村本を覚えていたのもなかなか興味深い。

今度、つついてみよう。

そして最後に重要な質問。

「村本の家の前に、縁台って置けるの？」

これ、実はマイ縁台なんだよねってぽんぽんと叩く。

「勿論」

私にとって、最高の答えが返ってきた。

「でも、まずは卓球で」

真面目な顔して村本が言う。

「そうね、卓球で」

そう答えた私の耳に、美紗緒ちゃんのおとーさんの「けっ、結婚っ！」って大声が聞こえてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4105p/>

ご近所恋愛のすすめ

2011年7月28日05時39分発行